

海上町岩井安町遺跡

— 海上キャンプ場改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1994

千葉県社会部
財団法人 千葉県文化財センター

うな かみ まち いわ い やす まち
海上町岩井安町遺跡

— 海上キャンプ場改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1994

千葉県社会部
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

海上町は、千葉県の北東部に位置し、下総台地と九十九里平野北辺の沖積低地があいなかばする自然環境に恵まれた地であります。この海上町に所在する千葉県立海上キャンプ場は、野外活動をとおして青少年の健全な育成をはかる目的で昭和48年に開設され、以後、今日にいたるまで、児童・生徒を中心に、広く県民に利用されてきました。

千葉県社会部は、この施設の老朽化に伴い既存の建物の改築など施設拡充を計画いたしました。開設に先立って実施された発掘調査によって集落遺跡の存在が明らかとなっており、千葉県教育委員会では、事業地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県社会部をはじめ関係諸機関との慎重な協議を重ねてまいりましたが、事業計画の変更も不可能であるとの結論に達し、やむを得ず記録保存の措置を講じることとなりました。

発掘調査は財団法人千葉県文化財センターが平成4年度に実施しました。その結果縄文時代から平安時代にかけての遺構・遺物が検出され、特に隣接する岩井安町古墳群の造営に関連すると思われる集落の一部が検出されるなど貴重な成果をあげました。

このたび岩井安町遺跡の整理作業が終了し、報告書として刊行することになりました。本書が学術資料としてはもとより、海上町周辺地域の歴史を知る資料として、また文化財の保護と普及のために広く活用されることを願っております。

おわりに、発掘作業から整理作業、報告書の刊行まで終始ご指導とご協力をいただいた千葉県教育庁生涯学習部文化課をはじめ、千葉県社会部、海上町教育委員会、関係諸機関各位には深くお礼申し上げますとともに、酷暑、厳寒のなかでの発掘調査、整理作業に協力された調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成6年3月

財団法人 千葉県文化財センター
理事長 奥山 浩

凡 例

1. 本書は千葉県海上郡海上町岩井字安町1,000他に所在する岩井安町遺跡の発掘調査報告書である。遺跡コードは361-001である。
2. 発掘調査および整理作業の実施は、千葉県社会部青少年女性課の依頼により、千葉県教育庁生涯学習部文化課の指導を受けて、財団法人千葉県文化財センターが行った。
3. 発掘調査は、平成4年4月1日から5月7日に上層確認調査、続いて平成4年5月8日から6月30日まで下層確認・上層本調査を実施した。現地の調査は技師矢本節朗が担当した。
4. 整理作業は平成5年7月1日から同年9月30日まで行われ、調査係長川島利道、主任技師宮城孝之が担当した。
5. 本書は、調査研究部長高木博彦、成田調査事務所長矢戸三男及び副所長豊田佳伸の指導のもとに宮城孝之が編集を行った。執筆については、第1章旧石器時代を主任技師新田浩三が、それ以外を宮城孝之が行った。
6. 011号跡から出土した炭化材の同定は、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し、その成果を第4章に掲載した。
7. 墨書については、国立歴史民俗博物館平川南氏に教示と協力をいただいた。記して感謝の意を表します。
8. 発掘調査から本書の刊行にいたるまで、千葉県社会部青少年女性課、千葉県生涯学習部文化課の関係各位をはじめ、多くの方々から御指導・御助言をいただいた。ここに深く感謝の意を表します。
9. 第1図の地形図は国土地理院発行の2万5千分の1「小南」・「旭」を使用した。
10. 本書の図版1航空写真は、京葉測量株式会社撮影によるものである。
11. 本書で使用した用語のうち、一般的な用語とは異なる遺構の名称を使用している。
竪穴建物跡 一般に「竪穴住居跡」あるいは「竪穴住居址」と呼ばれるもの。
12. 本書の遺構の縮尺は、竪穴建物跡を1/80、カマドを1/40、土坑を1/50に統一している。
13. 遺物の縮尺は、小型の石器が2/3、大型の石器が1/2、土師器・須恵器が1/4、縄文土器拓影が1/3を基本とした。なお、任意の縮尺によるものもあるので注意されたい。
14. 土器の断面については、縄文土器・土師器を白抜きとし、須恵器を黒とした。なお、縄文土器のうち胎土に繊維を含むものについては、スクリーントーンを入れた。
15. 遺構・遺物実測図に使用しているスクリーントーンは次のとおりである。

カマド構造 

焼土 

粘土 

土器の黒色処理 

研磨面 

本文目次

序 文 凡 例 目 次 序 章

1. 調査にいたる経緯と概要	1
2. 周辺遺跡	1
3. 遺跡の立地と基本層序	3
4. 調査の方法	5
第1章 旧石器時代	
1. 概要	8
2. 第1ブロック	8
第2章 縄文時代	
1. 概要	11
2. 縄文土器	11
3. 石器	13
第3章 古墳時代以降	
1. 概要	14
2. 竪穴建物跡	14
3. 掘立柱建物跡	45
4. 土坑	47
5. 溝状遺構	49
6. 遺構外出土遺物	50
第4章 自然科学的分析	
011号跡出土炭化材の分析	51
第5章 まとめ	56
出土遺物観察表	59
抄 録	68

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡	2	第18図 012号跡出土遺物 2	25
第2図 基本土層図	3	第19図 012号跡出土遺物 3	26
第3図 周辺地形図	4	第20図 020号跡及び出土遺物 1	28
第4図 グリッド分割図	5	第21図 020号跡出土遺物 2	29
第5図 確認調査グリッド配置図	6	第22図 020号跡出土遺物 3	30
第6図 旧石器時代調査区	9	第23図 021号跡及び出土遺物 1	32
第7図 第1ブロック遺物出土状況	10	第24図 021号跡出土遺物 2	33
第8図 第1ブロック出土石器	10	第25図 022号跡及び出土遺物 1	34
第9図 縄文土器	12	第26図 022号跡出土遺物 2	35
第10図 縄文時代石器	13	第27図 023号跡及び出土遺物	36
第11図 006号跡	15	第28図 024号跡及び出土遺物 1	38
第12図 006号跡出土遺物	16	第29図 024号跡出土遺物 2	39
第13図 010号跡及び出土遺物	18	第30図 024号跡出土遺物 3	40
第14図 011号跡	20	第31図 025号跡及び出土遺物 1	41
第15図 011号跡出土遺物 1	21	第32図 025号跡出土遺物 2	42
第16図 011号跡出土遺物 2	22	第33図 026号跡及び出土遺物 1	43
第17図 012号跡及び出土遺物 1	24	第34図 026号跡出土遺物 2	44

第35図	013号跡	45
第36図	018号跡	46
第37図	007号跡出土遺物	47
第38図	004.005.007.008.009.019号跡	48
第39図	001号跡	49

第40図	028号跡	50
第41図	遺構外出土遺物	50
第42図	011号跡炭化材検出状況	52
第43図	遺構配置図	

表 目 次

第1表	第1ブロック出土石器計測表	8
第2表	006号跡出土土器観察表	59
第3表	007号跡出土土器観察表	59
第4表	010号跡出土土器観察表	59
第5表	011号跡出土土器観察表	59
第6表	012号跡出土土器観察表	61
第7表	020号跡出土土器観察表	62
第8表	021号跡出土土器観察表	63

第9表	022号跡出土土器観察表	63
第10表	023号跡出土土器観察表	64
第11表	024号跡出土土器観察表	64
第12表	025号跡出土土器観察表	65
第13表	026号跡出土土器観察表	66
第14表	遺構外出土土器観察表	66
第15表	石器計測表	66
第16表	土玉類・土製紡錘車計測表	67

図 版 目 次

図版1	遺跡周辺航空写真
図版2	1. 調査区全景（南より） 2. 調査区全景（東より）
図版3	1. 調査区近景（東より） 2. 調査区近景（南より）
図版4	1. 確認調査 2. 確認調査
図版5	1. 第1ブロック遺物出土状況 2. A区調査状況
図版6	1. B区調査状況 2. C区調査状況
図版7	1. 006号跡 2. 010号跡 3. 011号跡
図版8	1. 012号跡 2. 020号跡 3. 021号跡
図版9	1. 022号跡 2. 023号跡 3. D区調査状況
図版10	1. 024・025号跡 2. 026号跡 3. 013号跡
図版11	1. 018号跡 2. 004号跡 3. 005号跡 4. 007号跡 5. 008号跡 6. 009号跡

図版12	1. 006号跡出土遺物 2. 011号跡出土遺物
図版13	1. 011号跡出土遺物 2. 012号跡出土遺物
図版14	1. 012号跡出土遺物 2. 020号跡出土遺物
図版15	1. 020号跡出土遺物 2. 021号跡出土遺物
図版16	1. 021号跡出土遺物 2. 022号跡出土遺物 3. 023号跡出土遺物 4. 024号跡出土遺物
図版17	1. 024号跡出土遺物 2. 025号跡出土遺物
図版18	1. 025号跡出土遺物 2. 026号跡出土遺物 3. 007号跡出土遺物
図版19	1. 墨書土器
図版20	1. 縄文土器
図版21	1. 磨石・凹石・砥石 2. 紡錘車・軽石・石鏃 ・磨製石斧
図版22	1. 土製品 2. 線刻土器 3. 銅製品 4. 旧石器時代石器
図版23	1. 支脚・鉄製鋤先 2. 鉄製品
図版24	1. 011号跡出土炭化材の顕微鏡写真

序 章

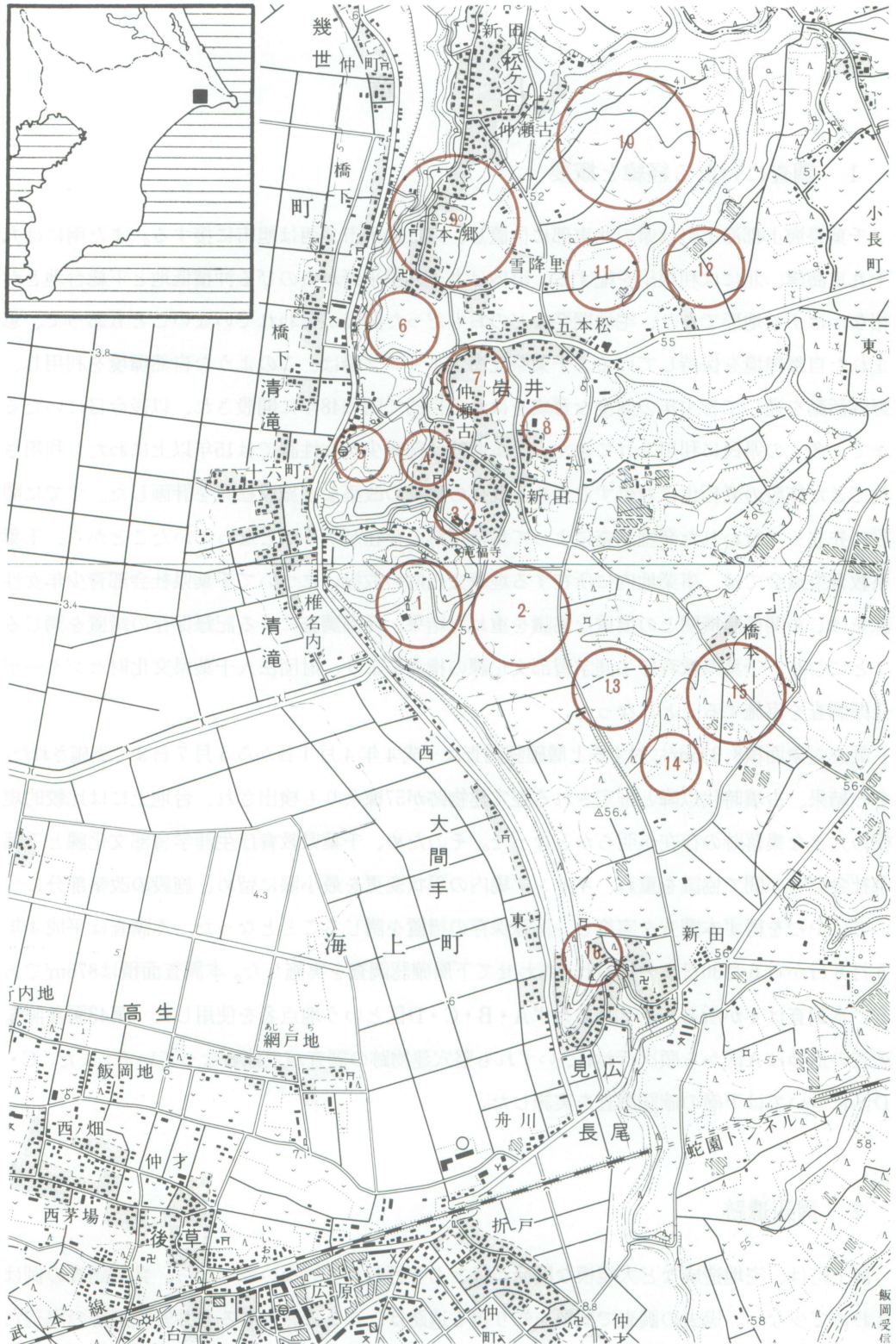
1 調査にいたる経緯と概要

千葉県海上郡海上町は県の北東部に位置し、東は銚子市、西は旭市に接する。また南には九十九里海岸、北には利根川を配する。町内は九十九里平野からのびる沖積低地と下総台地とが相なかつする地形であり、宅地開発などのおもだった開発が行われていないこともあって、恵まれた自然環境を保持している。千葉県立海上キャンプ場は、このような自然環境を利用し、野外活動を通して青少年の健全な育成をはかる目的で昭和48年に開設され、以後今日にいたるまで、多くの県民に利用されてきた。千葉県社会部青少年女性課では15年以上にわたり利用されてきた施設の老朽化に対処するため、既存の建物の改築など施設拡充を計画した。すでに開設に先立って行われた発掘調査によって集落遺跡の存在が明らかとなっていたことから、千葉県教育委員会では、事業地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて千葉県社会部青少年女性課をはじめ関係諸機関との慎重な協議を重ねた結果、発掘調査による記録保存の措置を講じることになり、千葉県教育庁生涯学習部文化課の指導により、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することになった。

調査対象面積8,335㎡に対する上層確認調査は平成4年4月1日から5月7日まで実施された。その結果、古墳時代以降と推定される竪穴建物跡が57棟余りも検出され、台地上には比較的規模の大きな集落跡の存在が明らかとなった。そのため、千葉県教育庁生涯学習部文化課と千葉県社会部との間で協議を重ね、キャンプ場内の現状変更を最小限に留め、施設の改築部分についてはやむを得ず本調査を実施し、記録保存の措置を講じることとなった。本調査は平成4年5月8日から6月30日まで行われ、あわせて下層確認調査を実施した。本調査面積は876㎡である。本調査は4か所あり、とりあえずA・B・C・D区という地点名を使用した(第43図参照)。調査の進捗はA区から順次行われ、いずれも竪穴建物跡の調査が主体となっている。また、C・D区については下層の確認調査を実施した。

2 周辺遺跡

海上町は、宅地造成など大規模な開発がほとんど行われていないことから、発掘調査の例はきわめて少ない。過去の調査で概要を知り得る遺跡は、ここに報告する岩井安町遺跡の周辺に限られている。「海上町埋蔵文化財分布地図」によれば海上町内の遺跡の分布で最も集中している地域が、岩井安町遺跡周辺の台地上である。古墳および古墳時代以降の遺跡がおもで、そのほかに縄文および弥生時代の遺跡が点在するが、調査例は少なく詳細は不明な点が多い。昭和



- | | | | |
|----------------|-------------|-------------|------------|
| 1. 岩井安町遺跡 | 2. 岩井安町古墳群 | 3. 岩井白幡遺跡 | 4. 岩井南瀬古墳 |
| 5. 岩井安鴻遺跡 | 6. 岩井浅間台遺跡 | 7. 岩井仲瀬古遺跡 | 8. 岩井新田遺跡 |
| 9. 松ヶ谷本郷-仲瀬古遺跡 | 10. 岩井儀明遺跡 | 11. 岩井石雪車遺跡 | 12. 岩井永山遺跡 |
| 13. 見広仲峠遺跡 | 14. 見広蟹喰塚遺跡 | 15. 見広橋本遺跡 | 16. 見広城跡 |

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡 (1/25,000)

24年に若干の発掘調査が行われた岩井安町古墳群は、明治初年に約50基もの古墳が確認されている古墳群であったが、発掘調査が行われた昭和24年時点で14基が確認されるにとどまり、現在は1基の墳丘を確認するにとどまるらしい。古墳群の時期は古墳時代中期以降と思われるが、古墳の確かな時期等は不明である。昭和48年に海上キャンプ場の開設に先立って岩井安町遺跡の調査が行われている。キャンプ場の施設部分のみの調査だが、古墳時代および奈良・平安時代の竪穴建物跡3棟が検出されている。また、平成3年にキャンプ場に隣接する公園の造成に先立って発掘調査が行われ、弥生時代後期5棟、古墳時代28棟、奈良・平安時代17棟の竪穴建物跡を検出し、ほかに掘立柱建物跡、方形周溝状遺構、土坑等多くの遺構・遺物を検出した。これによってそれまで知られていなかった弥生時代の集落跡の存在も確認され、岩井安町遺跡が長期にわたる集落跡の複合遺跡であることが判明した。本報告を含め、平成3年の公園造成に先立つ調査報告などによって、海上町の考古学的な解明がしだいに進められるものと考えられる。

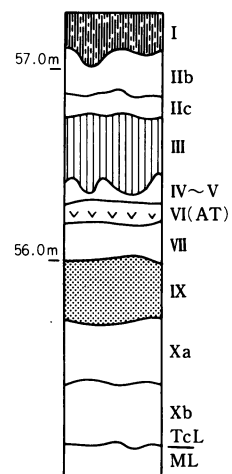
3 遺跡の立地と基本層序

遺跡の立地 当遺跡は海上郡海上町岩井字安町1,000番地他に所在する。遺跡の立地する台地の東西で地形はまったく異なり、東側は利根川からのびる樹枝状の支谷によって開析され、いくつもの小台地を形成している。逆に、西側は九十九里平野に面しており景観は一変する。台地上の標高は54m～57mを測り、西側の低位面の標高は4m前後で台地との比高差は50mにも達している。遺跡は九十九里平野に面する海食崖からやや奥に入った舌状の台地に立地しており、東西と北側の三方が谷に囲まれている。遺跡は南側の安定した広い台地に続いており、今回の調査区域は広い範囲にわたる遺跡の北端に位置するものと考えられる。

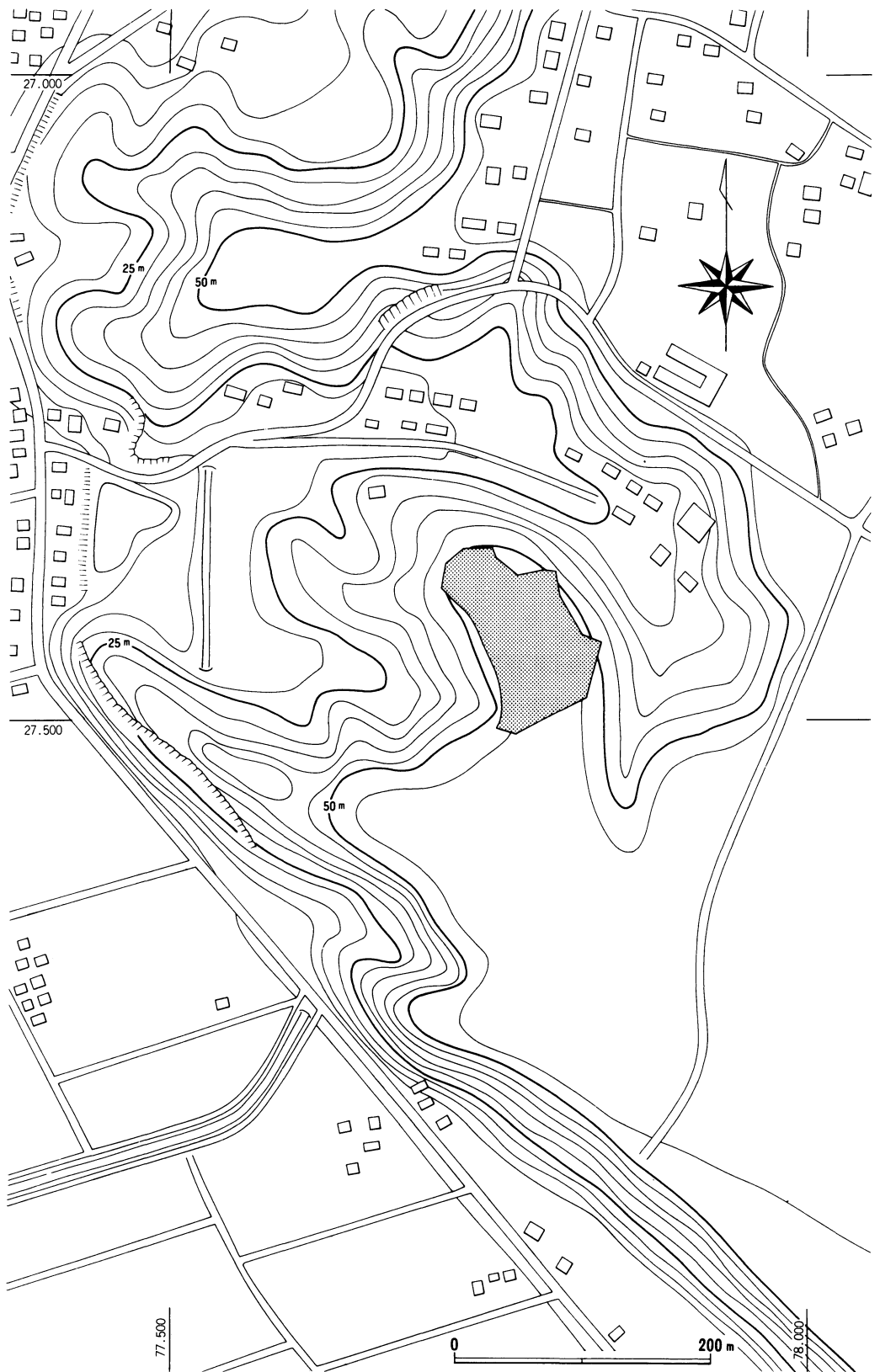
基本層序 遺跡が立地する台地上の基本土層は第2図のようであった。立川ローム層の層厚は東京湾岸の層厚に比べやや薄い。各層の特徴とりわけ色調等の類似点が多い。また、台地全体で表土直下の漸移層中に新期テフラ層の遺存する部分が多かった。以下に本遺跡で確認した各層の説明を行う。

I 層 表土である。本台地ではキャンプ場の整地のために客土された部分が多く、II a 層を攪乱している。

II b 層 褐色から茶褐色土である。新期テフラ層と考えられる。北総台地で一般的にみられる新期テフラ層に比



第2図 基本土層図



第3図 周辺地形図 (1/5,000)

べ、やや赤味がある。遺物包含層である。

II c 層 暗褐色土である。褐色土斑を若干含む腐食土層。下部はロームに漸移する。遺物包含層である。

III 層 黄褐色軟質ローム、いわゆるソフトローム層。

IV 層 明褐色硬質ローム。特徴的な赤色スコリア粒を含むのが普通だが、次のV層との分層は困難であった。

V 層 褐色硬質ローム。第1黒色帯に相当する。黒色スコリア粒等を含むが上のIV層との分層は困難であった。

VI 層 明黄褐色硬質ローム。A.T.を含む層。

VII 層 褐色硬質ローム。第2黒色帯の上部に相当する。東京湾岸の層厚に比べやや厚い。

IX 層 暗褐色硬質ローム。第2黒色帯に相当する。県内東京湾岸のIX層に比べ、層厚が薄く、分層は難しい。色調も明瞭な黒色ではない。

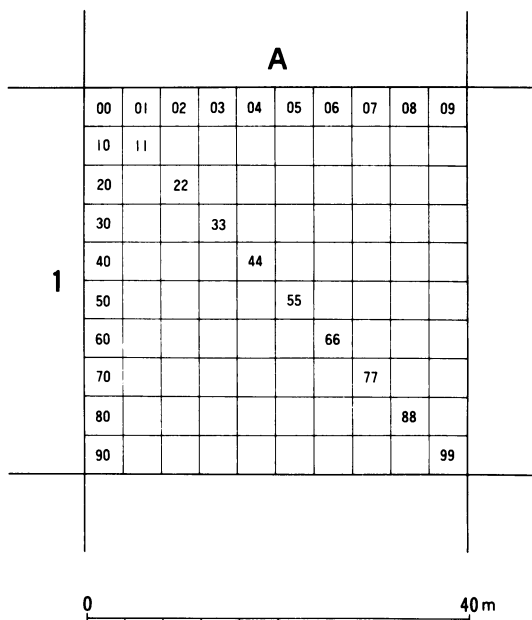
X a 層 茶褐色ローム。赤色、黒色、暗緑色スコリア粒を含む。X b 層に比して明色。

X b 層 暗茶褐色ローム。立川ローム最下層。やや軟質でスコリア粒をほとんど含まない。

4 調査の方法

調査区の設定 調査対象の全域を公共座標に合わせて覆う40m×40mの方眼網を設定し、大グリッドとした。呼称は北西に起点をおき、西から東へA, B, C…、北から南へ1, 2, 3…の名称をつけた。それをさらに4m×4mの小グリッド100個に分割した。小グリッドは北西隅を起点に00~99の番号をふり、大小グリッドを組み合わせて例えばA1-00のような呼称とした(第4図)。

確認調査 上層確認調査については、調査区全域に2m×4mのグリッドを全対象面積の10%設定し(第5図)、遺構・遺物の分布を確認し、本調査に移行している。なお本調査範囲は施設の改築が行われる場所のみに限られた。下層(ローム層)については、本調査が実施された範囲について2m×2mのグリッドを4%設定し、石器等の遺



第4図 グリッド分割図



第5図 確認調査グリッド配置図 (1/1,000)

物の確認調査を実施し、遺物の出土があった地点について周囲を拡張し調査を実施した。

調査となった遺構のうち、竪穴建物跡については4分割し土層観察用のベルトを設定して調査を行った。遺物の取り上げは、必要に応じて個別に番号を付し、ポイントとレベルを記録した。それ以外は遺構ごと一括して取り上げた。グリッド出土のものについては、基本的に小グリッド一括で取り上げた。

遺構番号 基本的に遺構の内容にかかわらず通し番号を使用し、3桁の番号を付した。番号は001号から始まる。整理段階で欠番が生じた場合でも、調査時につけられた番号をそのまま使用している。

参考文献

寺村光晴ほか『海上町キャンプ場用地内遺跡発掘調査概報』1973年 海上町教育委員会

『角川日本地名大辞典』12 千葉県 1978年 角川書店

『海上町埋蔵文化財分布地図』 1985年 海上町教育委員会

『海上町史 史料編 I』 1985年 海上町史編纂委員会

『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報－平成2年度－』1992年 千葉県教育庁生涯学習部文化課

(財)東総文化財センター「遺跡発表会資料」 1993年

島立桂・新田浩三・渡辺修一「下総台地における立川ローム層の層序区分」『研究連絡誌』第35号

1992年 (財)千葉県文化財センター

第1章 旧石器時代

1. 概要

旧石器時代の確認調査は上層本調査を実施した部分についてのみ行われ、第6図に示すようにC区およびD区で実施された。確認調査の結果、一つのグリッドから遺物が検出され、その部分について、周囲を拡張し遺物の検出に努めた。

確認調査によって検出された遺物集中は一か所である。上層確認調査と同じく、台地全面にわたる下層の確認調査が行われれば、さらに旧石器時代の遺物が検出された可能性は十分にあると考えられる。

2. 第1ブロック（第7・8図）

出土状況 2C-50グリッドにおいて検出したブロックである。周辺を拡張し、遺物の検出に努めたが、遺物総数はわずか2点にすぎない。出土層位はVI～VII層であるが、同一レベルで出土しているわけではない。石材は2点とも水晶である。接合はしないが石材の特徴から同一母岩の可能性が高い。

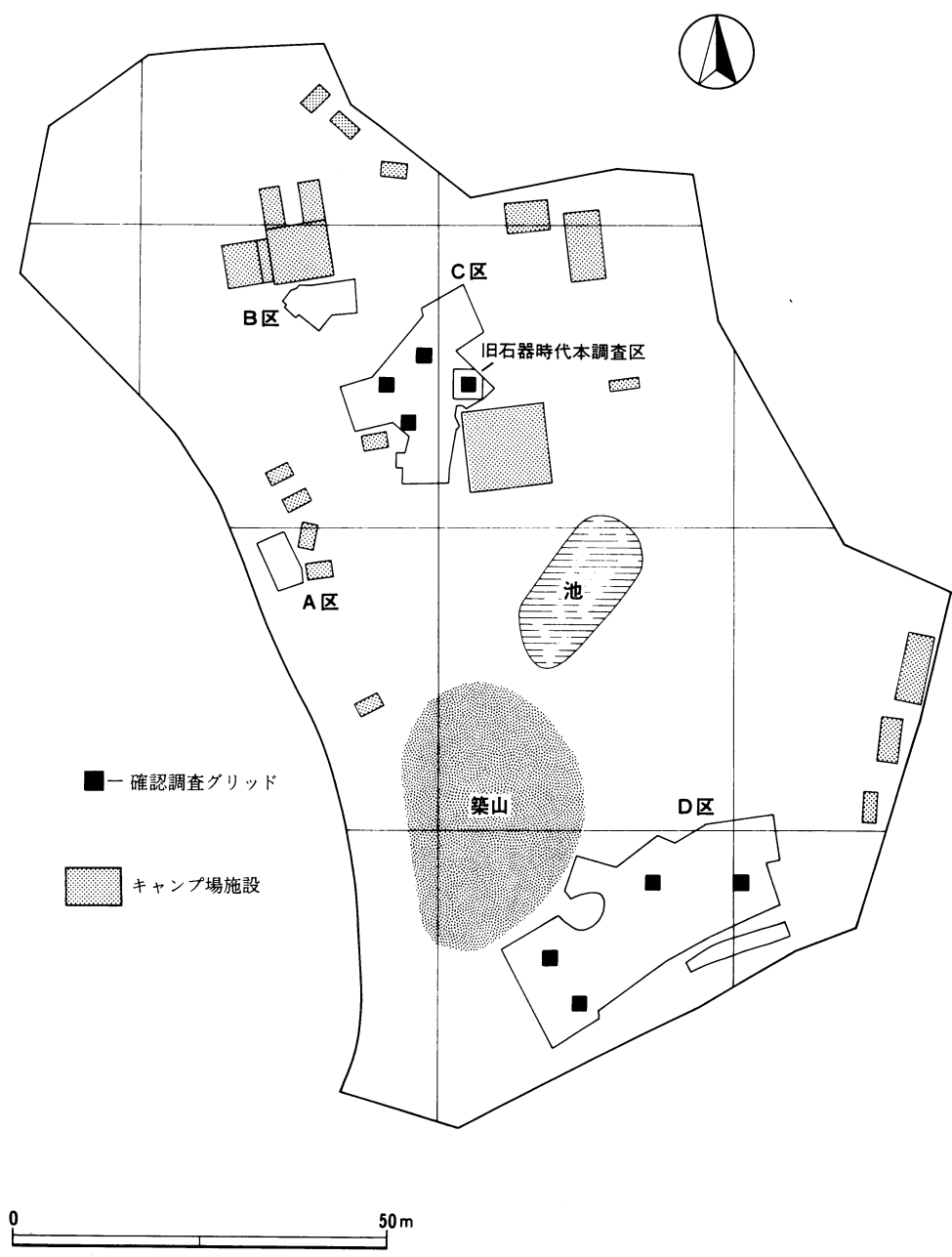
出土遺物 1は二次加工のある剝片である。素材の剝片は、打面調整が行われており、節理面にそって剝離された縦長の剝片を素材としている。調整加工は、左側辺に平坦な加工が連続的に施されている。2は剝片である。打面は線状を呈する。腹面の末端部には素材の底面が残っている。

第1ブロックから出土した石器は2点のみであるが、石器製作技術の特徴は頭部調整は行われず、打面調整が頻繁であること、背面構成から打面転移が頻繁な剝片生産技術が想定される。石器製作技術と石材の特徴からみても、出土点数が少ないながらもVI層の石器群の特徴が観察される。

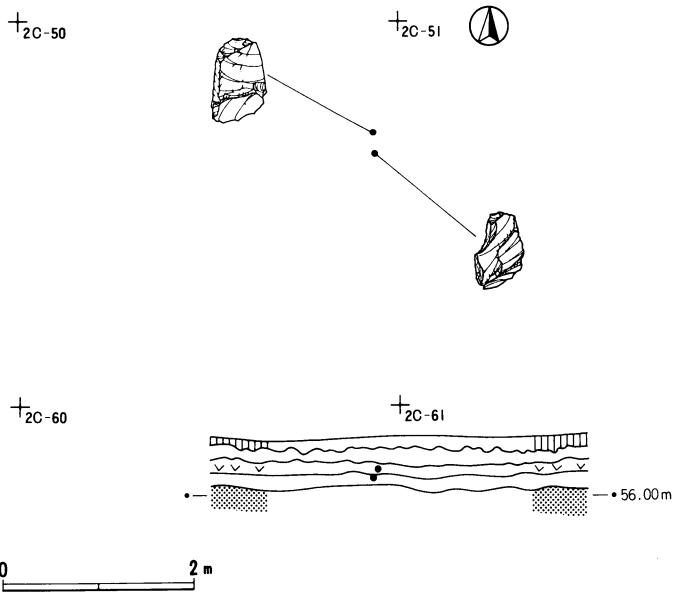
当該地域において、同一段階と思われる石器群のうち同様の石材構成をもつものは、石英製の石器を多産する茨城県日立市鹿野場遺跡があげられる。両極剝離を多用し楔形石器を主体とする。当該地域の石材入手経路や石器群の関連を考える上で茨城県が重要な地域といえよう。

第1表 第1ブロック出土遺物計測表

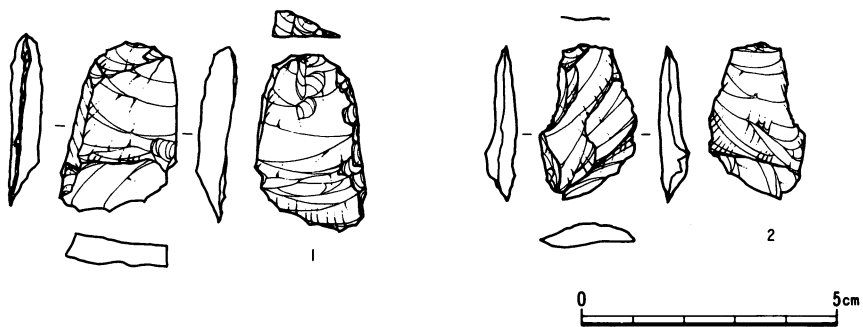
挿 番 号	個 体 番 号	遺物番号	器 種	石 質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量(g)	欠損の 有 無	二次加 工有無
第8図	1	2C-50.3	剝片	水晶	33.5	23.0	6.5	5.5	無	有
	2	2C-50.2	剝片	水晶	30.0	19.5	6.5	1.8	無	無



第6図 旧石器時代調査区 (1/1,000)



第7図 第1ブロック遺物出土状況 (1/80)



第8図 第1ブロック出土石器 (2/3)

第2章 縄文時代

1. 概要

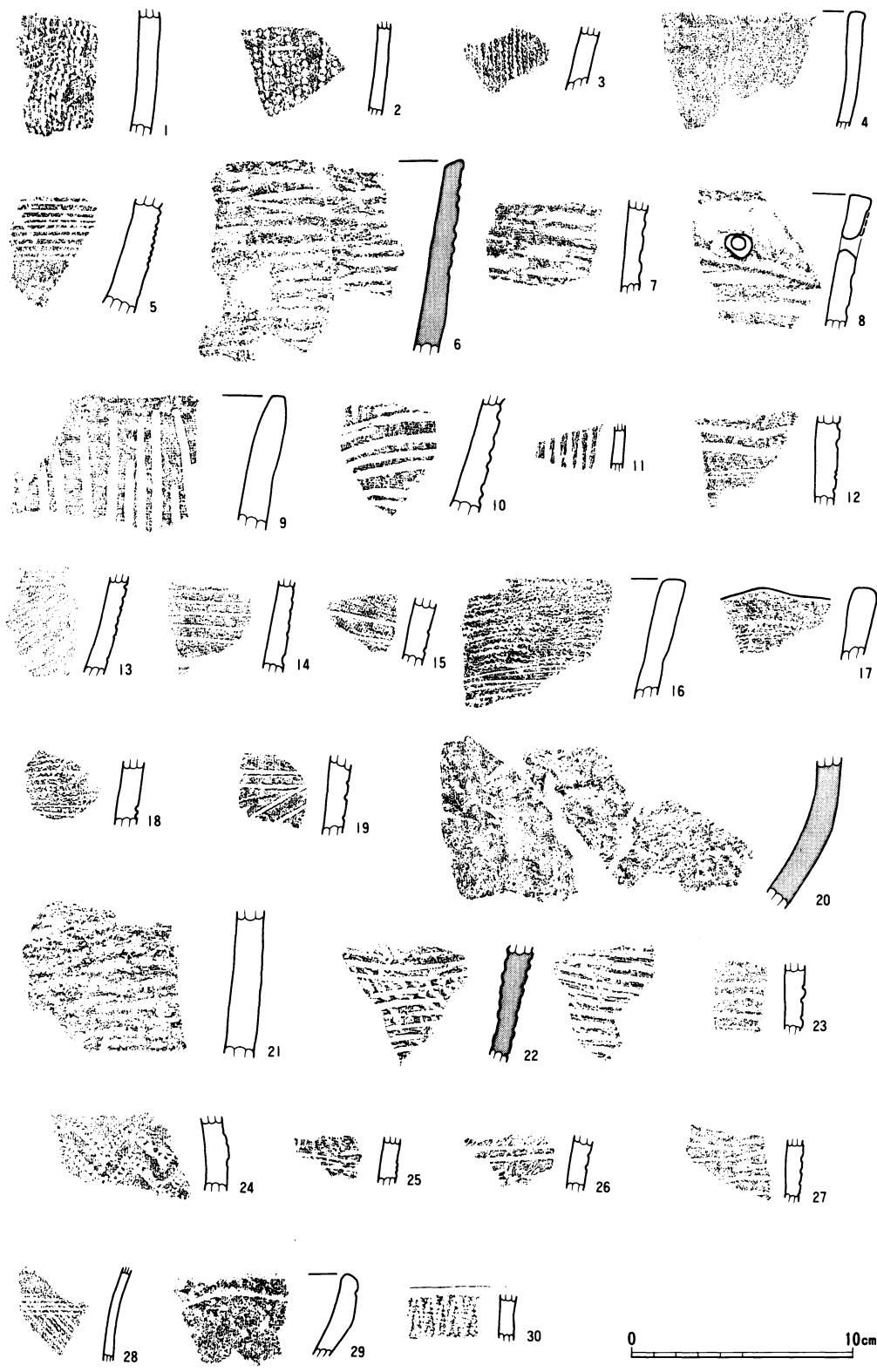
確認調査および本調査によって検出された縄文時代の遺構はない。遺物については縄文時代早期、前期の土器片が出土しているが、全部でわずか45点にすぎない。石器も6点と少なく、当遺跡における縄文時代の活動の希薄さを示している。また、平成3年に行われたキャンプ場に隣接する公園部分の調査でも縄文時代の遺構が検出されていないことは、今回の調査結果を肯定し得るものである。土器の出土分布は、中央西斜面に向いた台地縁辺にその主体があり、しかも散漫に出土しているのではなく、特定のグリッドからまとまって出土している。遺物のほとんどは確認調査のグリッドから出土しており、時期的にはまとまりがある。しかし、点数がきわめて少ないこともあり、特定時期の遺物包含層を形成しているとは認めがたい。確認調査の結果からも調査区内での縄文時代の遺構の存在はきわめて薄いと考えられる。

2. 縄文土器（第9図）

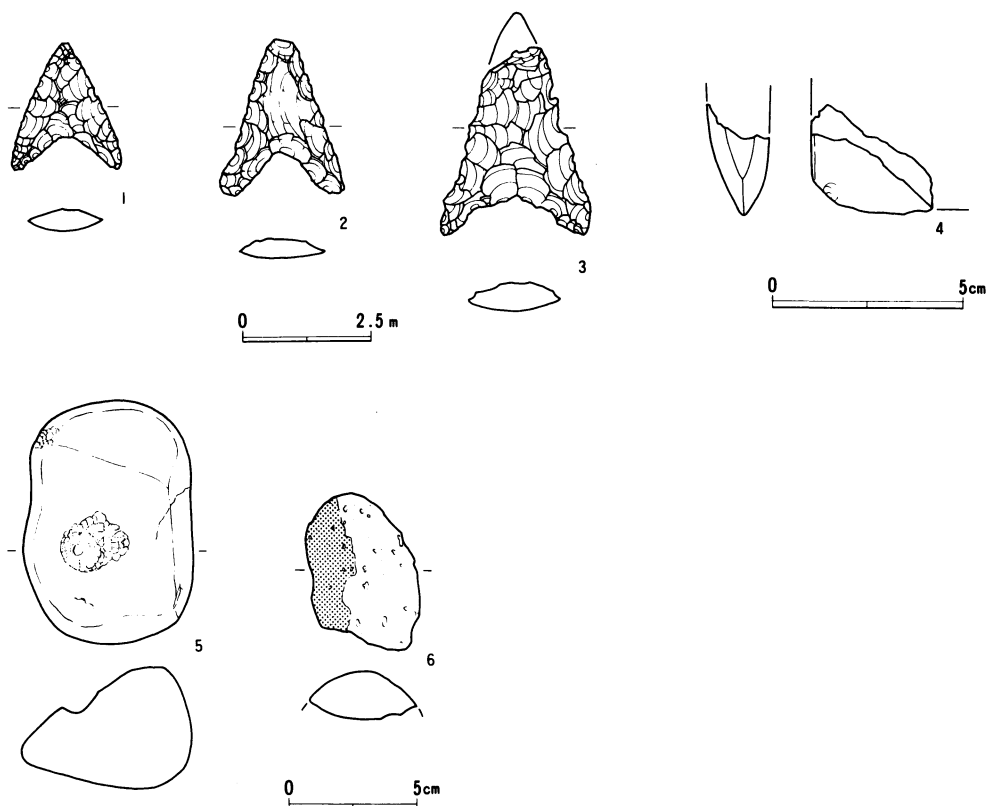
図示し得る土器片は少なく、第9図に示したものがそのほとんどである。1～4が縄文時代早期擦糸文系土器、5～21が早期沈線文系土器、22が早期条痕文系土器、23～30が縄文前期諸磯式土器および浮島式土器に比定される。

1～3はRの擦糸を施文している。1・3の擦糸は密であるが、2の擦糸は非常にゆるくまばらである。4は無文の口縁部である。口端が平らで、内外面の調整はほぼ同じである。器厚はやや薄い。1～4の胎土はいずれも良好で、焼成もよい。4点とも夏島式に比定される。

5～21は三戸式から田戸下層式に比定される。5は底部近くの破片である。横位の平行細沈線文が施される。胎土は砂粒を含まず良好で、焼成もよい。6～8は外面に横位の器面調整とも言い得る太沈線を施すものである。棒状工具によって器面をナデたような施文で、いわゆる凹線文と呼ばれるものであろう。口縁部は角頭状を呈し、キザミは認められない。胎土は細砂粒をやや多く含み、6は繊維を混入する。8の貫通孔は焼成後につくられたもので、外面からの穿孔である。9～12は太沈線を施すものである。12には細沈線も伴う。棒状工具によって雑に施文している。9・10・12の胎土にはやや大粒の砂粒を若干含む。13～15は細沈線を施すものである。細い棒状工具で比較的等間隔に施文している。胎土は良好で焼成もよい。16～19は貝殻腹縁文を施すものである。16・17は同一個体である。17を除いては細沈線を伴う。胎土は比較的良好で、焼成も悪くはない。20・21は無文である。20は胎土に多量に繊維を含む。やや焼成もあまい。21は胎土が粗く、砂粒を多量に含む。外面は横位の調整が行われ、砂粒が移動し



第9図 縄文土器 (1/3)



第10図 縄文時代石器 (1~3 $\frac{2}{3}$ 、4 $\frac{1}{2}$ 、5・6 $\frac{1}{3}$)

た痕跡を残している。あるいは表面の粗さで太沈線が不明瞭になっている可能性もある。22は条痕文系土器で内外面に深い条痕を施す。胎土に繊維を混入する。23~26・28は半截竹管によって沈線が施されている。24は隆帯の両脇に半截竹管による押し引きの連続刺突文を伴う。胎土には粗い砂を多く含む。26・27は地文に撚糸を施す。28は細かなRL縄文に平行する横位の沈線文を施す。器厚は薄い。29は無文である。口縁部に輪積痕を残している。30は貝殻腹縁文を施している。

3. 石器 (第10図)

石器の出土量も土器同様きわめて少ない。石鏃3点、磨製石斧1点、凹石1点、磨石1点他に若干の剥片がある。1~3は石鏃である。1・2の基部の抉りは比較的強い。2・3の調整は粗い。4は磨製石斧の刃部である。表裏ともによく研磨されている。5は凹石である。加工の痕跡のない円礫に凹みが一つ施されている。凹みはやや深い。6は磨石の破片と思われる、スクリーントーンの部分がよく使用され、滑らかである。

第3章 古墳時代以降

1. 概要

調査区内のほぼ全域に配置された確認グリッド（第5図）で検出された遺構数は多く、古墳時代以降と推定される竪穴建物跡は57棟におよんでいる。このことから台地上には比較的規模の大きな古墳時代以降の集落跡の存在をうかがうことができる。本調査の範囲が限られていることもあり、集落跡の一部が明らかにされたにすぎない。

本調査によって検出された古墳時代以降の遺構は、竪穴建物跡11棟、掘立柱建物跡2棟、土坑6基、溝状遺構2条である。竪穴建物跡については、古墳時代後期の竪穴建物跡が1棟、奈良・平安時代の竪穴建物跡が10棟である。掘立柱建物跡は奈良・平安時代以降と考えられる。土坑6基のうち、平安時代と考えられるものが1基、ほかは時期不明である。2条の溝状遺構については時期不明である。

1. 竪穴建物跡

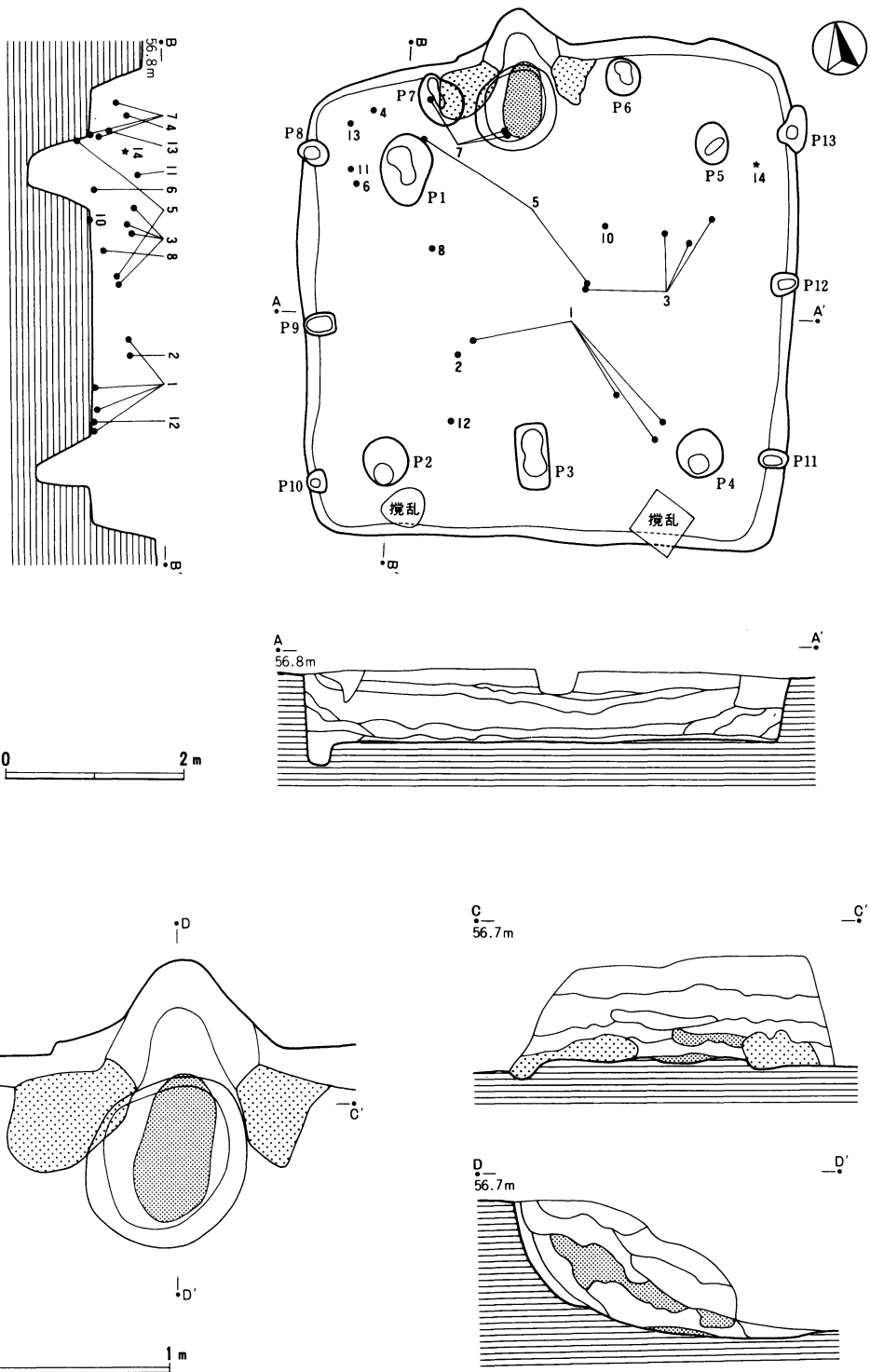
本調査によって検出された竪穴建物跡は11棟である。本来なら、時代別にすべきところであるが、古墳時代後期の竪穴建物跡が1棟であるため、本項でまとめて扱い、遺構番号順に説明していくことにする。検出した11棟の竪穴建物跡はすべてカマドを伴う。カマドの位置はおおむね竪穴の北辺にあり、煙道部の突出はあまり大きくない。以下、各遺構・遺物について説明する。

006号跡 （第11・12図）

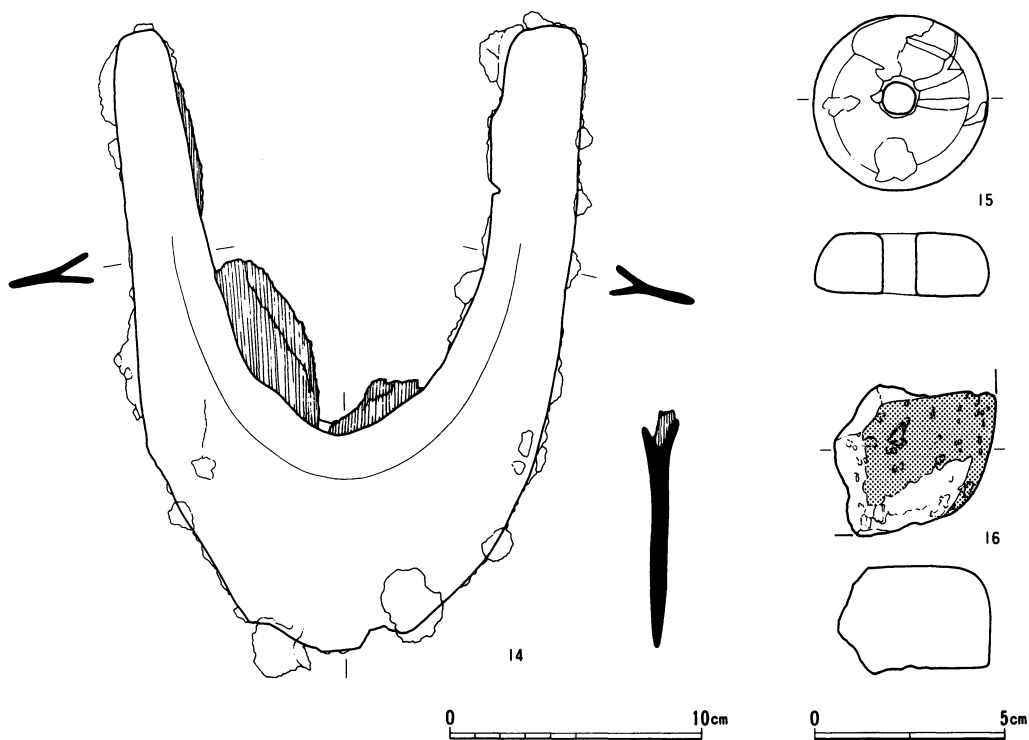
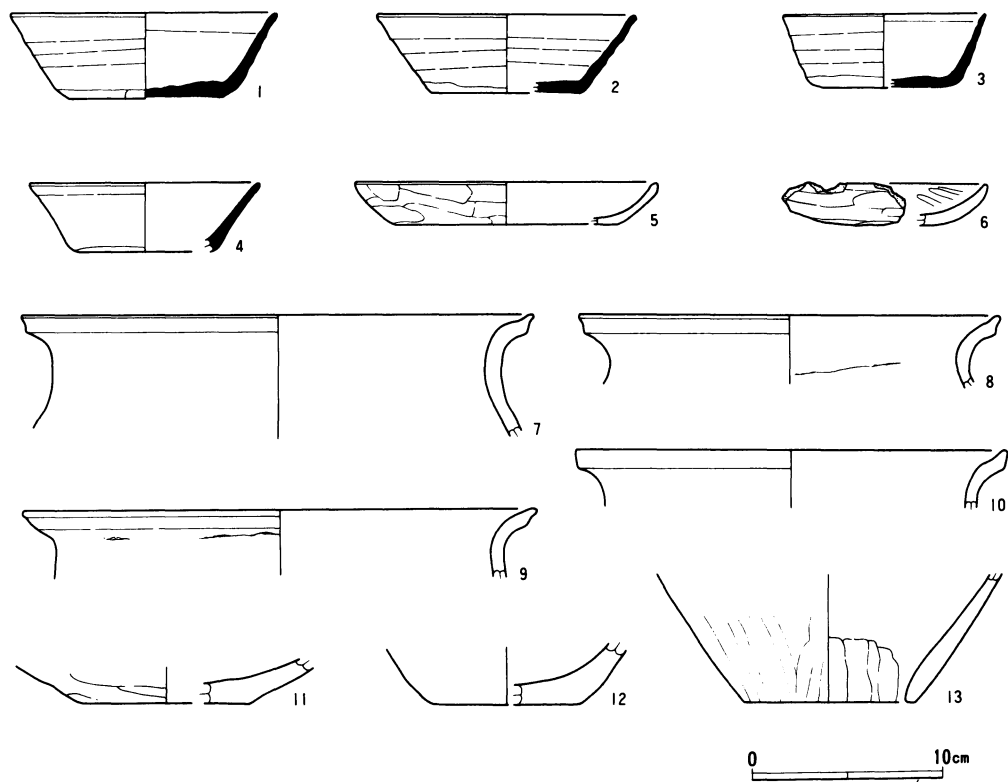
位置・形態 調査区中央のC区で検出され、2B-79グリッドを主体とする。北側に011号跡が隣接する。平面の形態はやや歪みのある方形を呈し、北辺5.3m、西辺4.2m、南辺5.0m、東辺5.4mを測る。主軸方向はN-9°-Eで検出面からの深さは、46cm～69cmと深い。カマドの位置は北側にあり、わずかに西側に寄っている。床面積は27㎡である。

覆土 暗褐色土を主体とし、全体に炭化物と焼土の混入が少量だが認められた。覆土の上位が攪乱されているが、遺構を大きく壊すほどのものではなかった。

施設等 主柱穴と考えられるピットは4つ検出されており、床面からの深さはP1が55cm、P2が51cm、P4が41cm、P5が42cmでほぼ同様に深いピットである。P3は入口の梯子ピットである。形態から2つのピットからなるものと思われる。床面から31cmの深さがある。カマドの両



第11図 006号跡 (1/40・カマド1/40)



第12図 006号跡出土遺物 (1~13 $\frac{1}{4}$ ・14 $\frac{1}{3}$ ・15、16 $\frac{1}{2}$)

脇からもピットが検出されており、径は主柱穴に比べやや小さいが、P6・P7ともに約40cmの深さがある。P8～P13は東西の壁面につくられた支柱穴であろう。径は小さく床面からの深さは10～26cmと浅い。周溝は検出されなかった。カマドの遺存はやや悪く、カマド構築材の粘土の残りは少ない。煙道部の突出は大きい。火床部の焼土はよく残っている。

遺物出土状況 出土点数は約150点である。遺構の規模が比較的大きいものの、出土した遺物量はあまり多くない。散布の状態は、竪穴内からまんべんなく出土しており、覆土の中位から床面にかけてが最も多い。完形の鉄製鋤先が北東隅の覆土中位から出土しているが、横に立った状態で出土している。

出土遺物 図示できた遺物は須恵器坏3点、土師器盤2点、甕6点、甗1点、鉄製鋤先1点、石製紡錘車1点、軽石1点である。

1～4は須恵器坏である。1・2はほぼ口径を同じくするが、3は口径がやや小さく箱形を呈する。4の胎土には雲母が微量混入する。5・6の坏は外面ヘラケズリ、内面はミガキである。13は甗の底部である。内外面ともにヘラケズリ。14は完形の鉄製鋤先である。木質部を残している。最大長24.0cm、最大幅18.4cm、最大厚0.6cmを測る。15は石製紡錘車である。表面に新しい傷を残している。直径46.2mm、厚さ16.2mm、重量53g、孔径8.9mmである。16は軽石製の磨石である。表面はよく使用され、滑らかである。

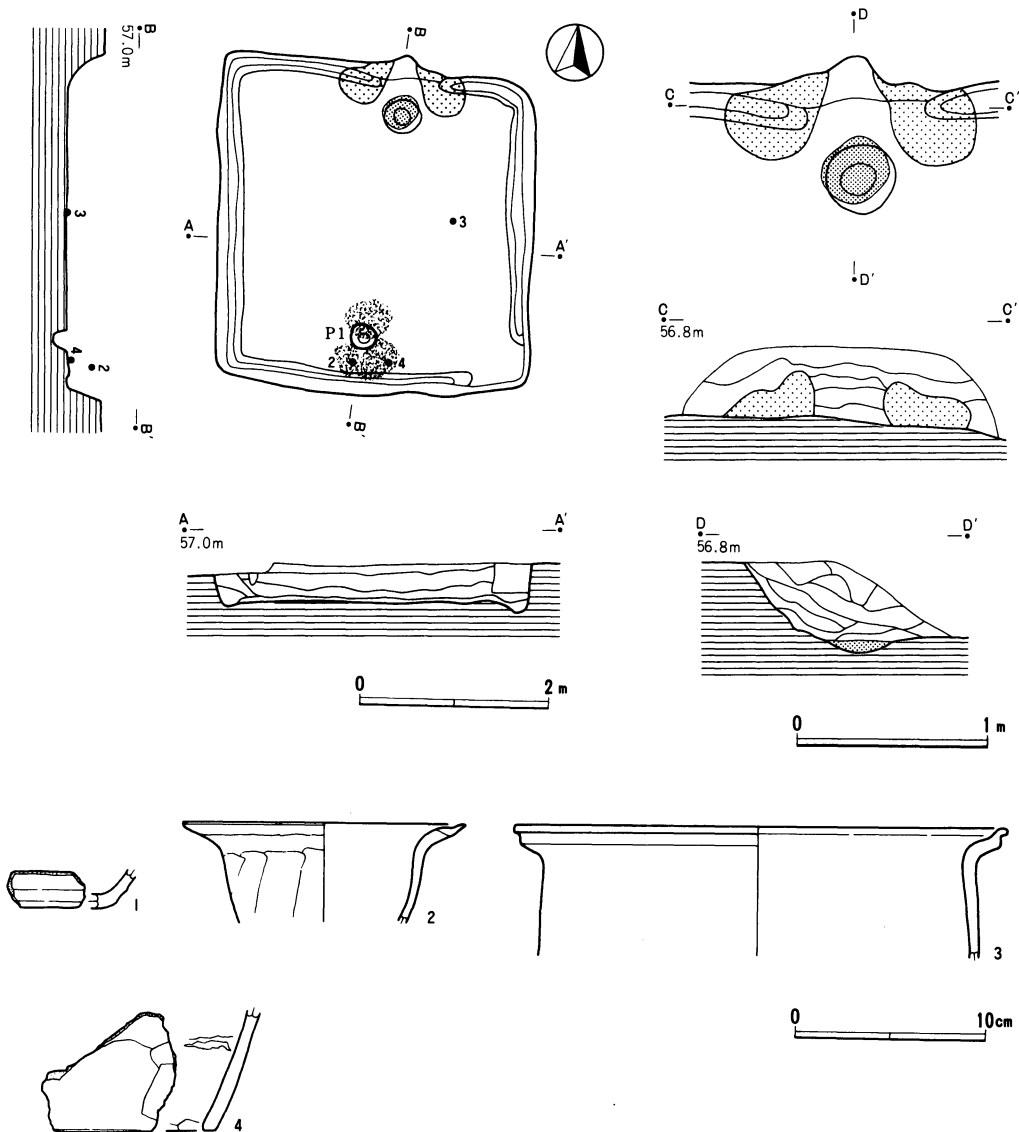
010号跡 (第13図)

位置・形態 調査区北側のB区で検出され、2B-26グリッドを主体とする。平面の形態はやや歪みのある方形を呈し、北辺3.2m、西辺3.3m、南辺3.2m、東辺3.0mを測る。主軸方向はN-3°-Wで検出面からの深さは、25cm～39cmとやや浅い。カマドの位置は北側にあるが、わずかに東側に寄っている。床面積は9㎡である。

覆土 暗褐色土を主体とし、全体に炭化物と焼土の混入が微量認められた。床面近くの覆土からは部分的に灰白色粘土が検出された。覆土の上位が攪乱されているが、遺構を大きく壊すほどのものではなかった。

施設等 支柱穴と考えられるピットは検出されておらず、南側中軸線上に浅い入口ピットが検出されたにすぎない。床面からの深さは13cmで、ピットの周囲には灰白色粘土が最高で15cmあり、梯子から床面におりる間に段を形成していたものと思われる。周溝はほぼ全周するが、南東隅で一部検出されなかった。カマドの遺存は比較的よいが、火床部の位置から焚口部分の両袖が消失しているのではないかと思われる。煙道部の突出は小さい。火床部の焼土量は多い。

遺物出土状況 出土点数はわずか9点である。竪穴内から散漫に出土しており、接合資料は皆無である。



第13図 010号跡及び出土遺物 ($\frac{1}{80}$ ・カマド $\frac{1}{40}$ ・1~4 $\frac{1}{4}$)

出土遺物 図示できた遺物は土師器坏1点、甕2点、甑1点である。1の坏は底部近くの破片である。図示できた坏はこれ1点のみである。2の胎土は砂が多い。4は甑で、体部ヘラケズリ、内面に輪積痕を残す。胎土は砂が多く粗い。

011号跡 (第14図～第16図)

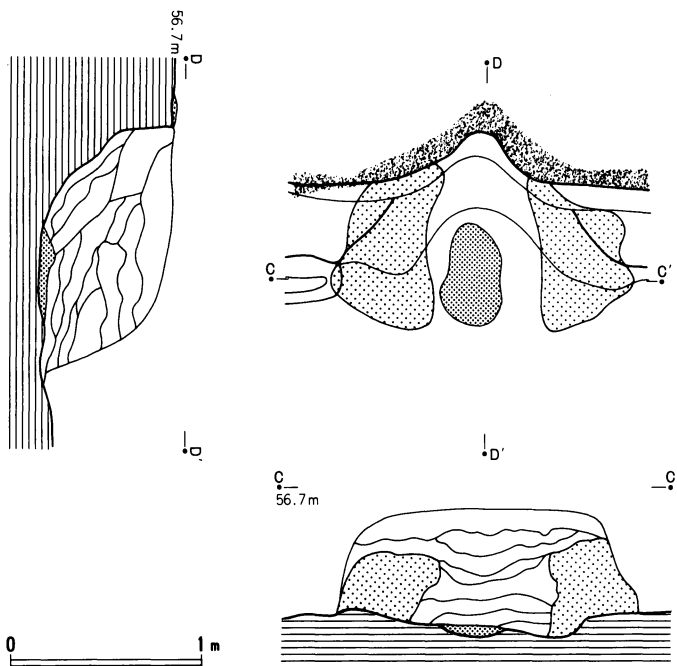
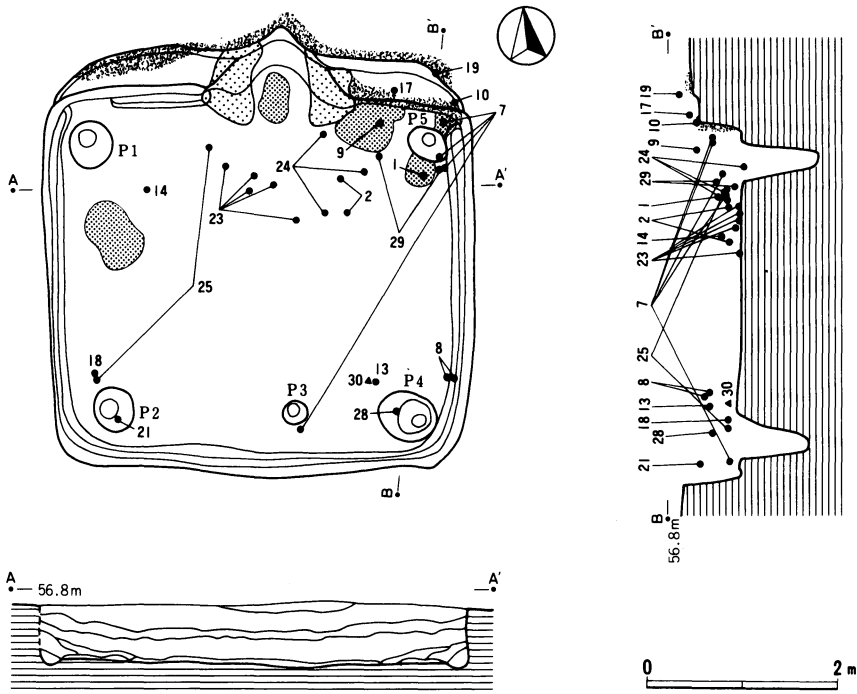
位置・形態 調査区中央のC区で検出され、2B-59グリッドを主体とする。北側に012号跡、南側に006号跡が隣接し、掘立柱建物013号跡と切り合っている。平面の形態は、方形を呈し、北辺4.4m、西辺3.6m、南辺4.1m、東辺3.5mを測る。本竪穴は、北側に張り出した特殊な段を伴う。主軸方向はN-6°-Eで、検出面からの深さは56cm～59cmと深い。カマドは北側中央に位置している。床面積は15㎡である。

覆土 暗褐色土を主体とし、覆土中位から床面までの間で焼土と炭化物が検出されている。特に床面上には焼土およびブロック状の焼土、炭化物が多量に検出された。

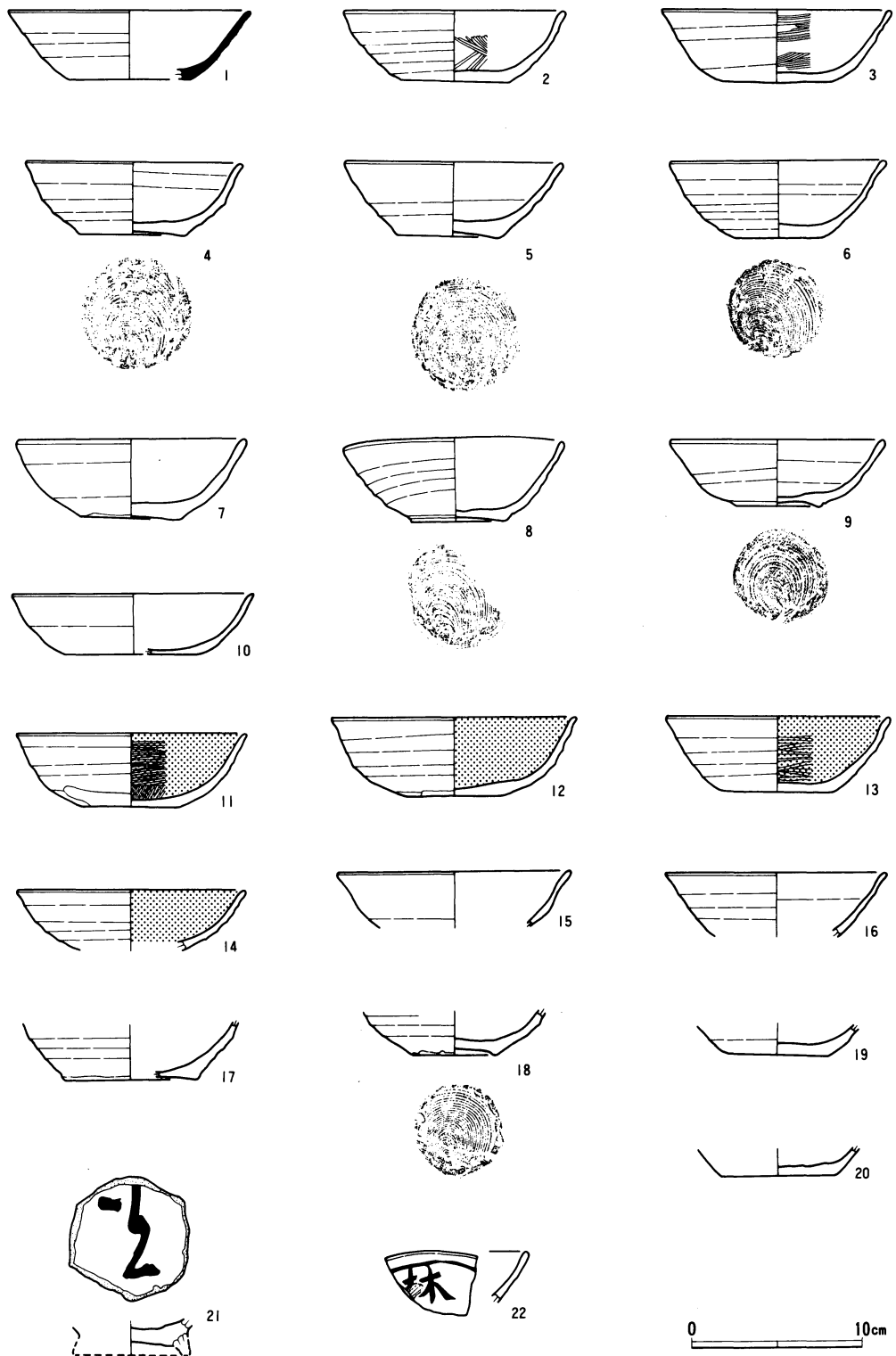
施設等 カマドのある北側にテラス状の特殊な段がある。本来の竪穴から約40cmほど張り出しており、検出面からの深さは、約10cmと浅いものである。平面図の北側にスクリーントーンで示すように竪穴の北側肩の部分と浅い段の肩の部分に灰白色の粘土が貼りつけられていた。粘土の量はそれほど多くはないが、人為的に施されたものであると判断される。支柱穴と考えられるピットは4つ検出されており、床面からの深さはP1が72cm、P2が73cm、P4が73cm、P5が76cmでほぼ同様の深いピットである。P3は入口の梯子ピットである。主軸からやや東側に寄っている。床面からの深さは12cmでわずかに中央に向かって斜めに掘り込まれている。周溝はほぼ全周する。カマドの遺存はよく、カマド構築材の粘土の残りは顕著である。煙道部の突出は大きく、火床部の焼土はやや少ない。

本竪穴内からは焼土および炭化物・炭化材が多量に検出されており、焼失によるものと考えられる。良好な形状を残す炭化材は多くないが、P5からは柱径をほぼとどめていると思われる炭化材が立った状態で検出された。残存長約30cm、最大径約15cmを測り、ピット内の床面より下の部分には炭化材は残っていなかった。たぶん埋まっていた柱材の部分は、焼失時に炭化しなかったために腐食してなくなってしまったものと考えられる。この炭化材の検出状況および実測図は第42図に示した。遺存状態は硬く焼きしまっており年輪も認められるが、ねじれたような状態で炭化しており、生木の状態の時からそうだったのか、あるいは焼失時に上屋の倒壊に伴いねじれたものかは不明である。いずれにしても柱の径が15cmを上回るものが使用されていたことは間違いなからう。このほかにP3から1点、P4から2点の炭化材を樹種同定のサンプルとして採取した。P3は入口の梯子ピットであることから、炭化材は梯子材の可能性が高い。P4の2点は近接していることから同一部材の可能性が高い。これら4つのサンプルの樹種同定については第4章で詳述する。

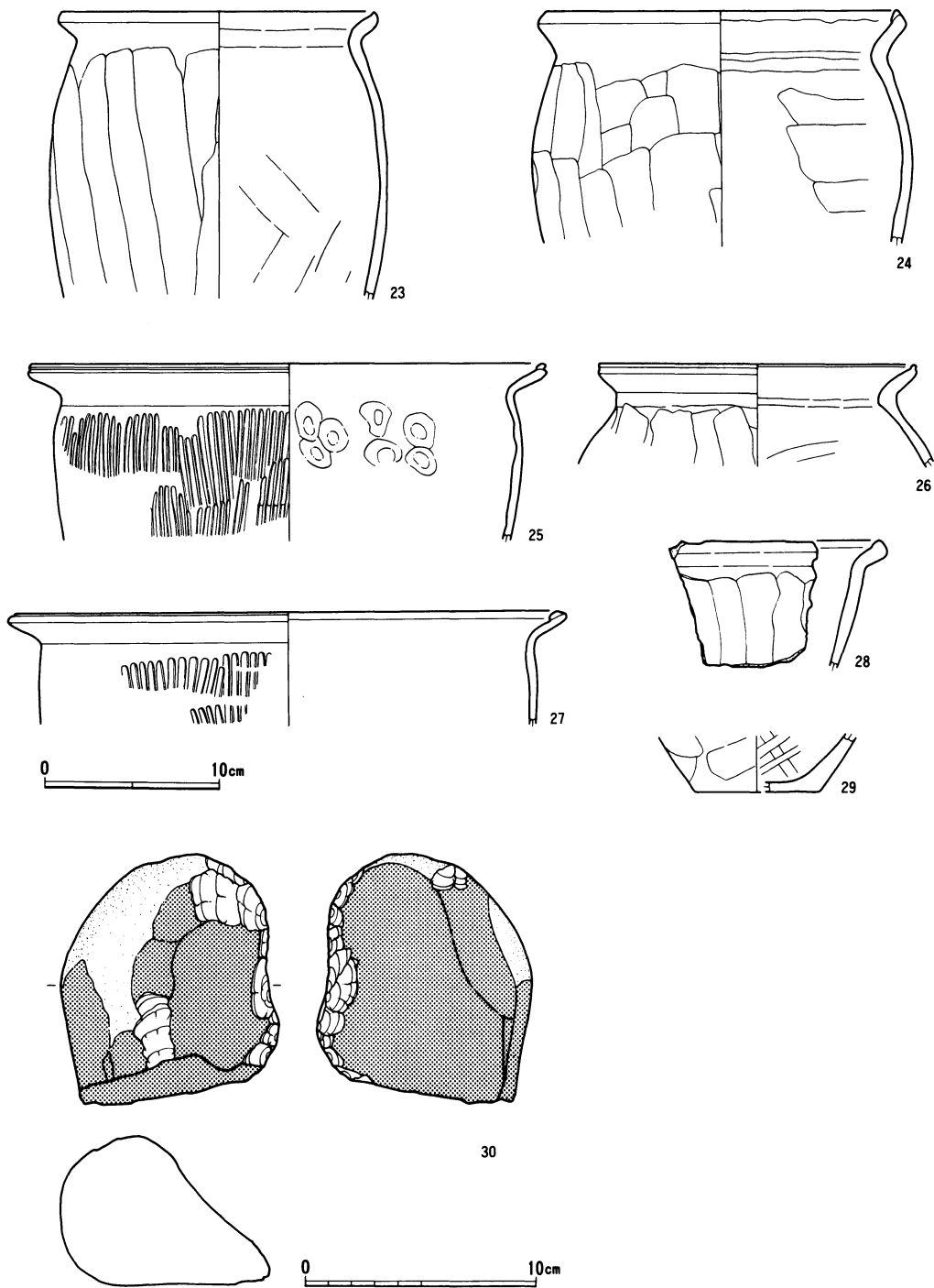
なお、焼土および炭化物・炭化材の検出状況などから、言うまでもなく何らかの原因で出火し、焼失したものと考えられるが、本竪穴が廃棄に伴って意図的に焼却されたのか、または不慮の出火によって使用途中で焼失したのかは十分な検討が必要である。特にカマド内から多量



第14図 011号跡 (1/80・カマド1/40)



第15图 011号跡出土遺物 1 (1~22¼)



第16图 011号跡出土遺物 2 (23~29¼・30⅓)

に坏が出土していることから、意図的な焼却の可能性は指摘し得るであろう。

遺物出土状況 出土点数は約110点である。散布の状態は、北側半分特にカマド内とカマド周辺に集中しており、覆土の中位から床面にかけてが最も多い。図示した22個体の坏のうち9個体がカマド内出土であり、集中していると言ってよいであろう。

出土遺物 図示できた遺物は須恵器坏1点、土師器坏20点、高台坏1点、甕6点、甑1点、磨石1点である。このうち土師器の中に墨書土器2点が含まれる。

1は須恵器坏である。底部ヘラケズリで胎土に小石と雲母を微量混入する。4・5はカマド内出土で熱を受け内外面の剝落が著しい。11～14は内面黒色処理の坏である。いずれも内面がミガキ。11は底部がヘラケズリ。胎土に微量の雲母を含む。12は回転糸キリの後ヘラケズリ。13は底部がヘラケズリ。内面ミガキ。21・22は墨書土器である。21は回転糸キリ後高台貼り付け、内面に墨書。字体は「足」か。22は坏の外面に墨書。字体は「林」と口縁部に沿った横線である。25・27の甕は体部に縦のタタキを伴う。器厚は薄く、25の内面は指のオサエを明瞭に残す。ともに焼成は良好。28は甑か。体部は縦のヘラケズリ。器厚はやや厚い。30は砂岩の転石を砥石として利用したものと思われる。叩く道具としても使用したらしく、一辺に剝離痕を残している。

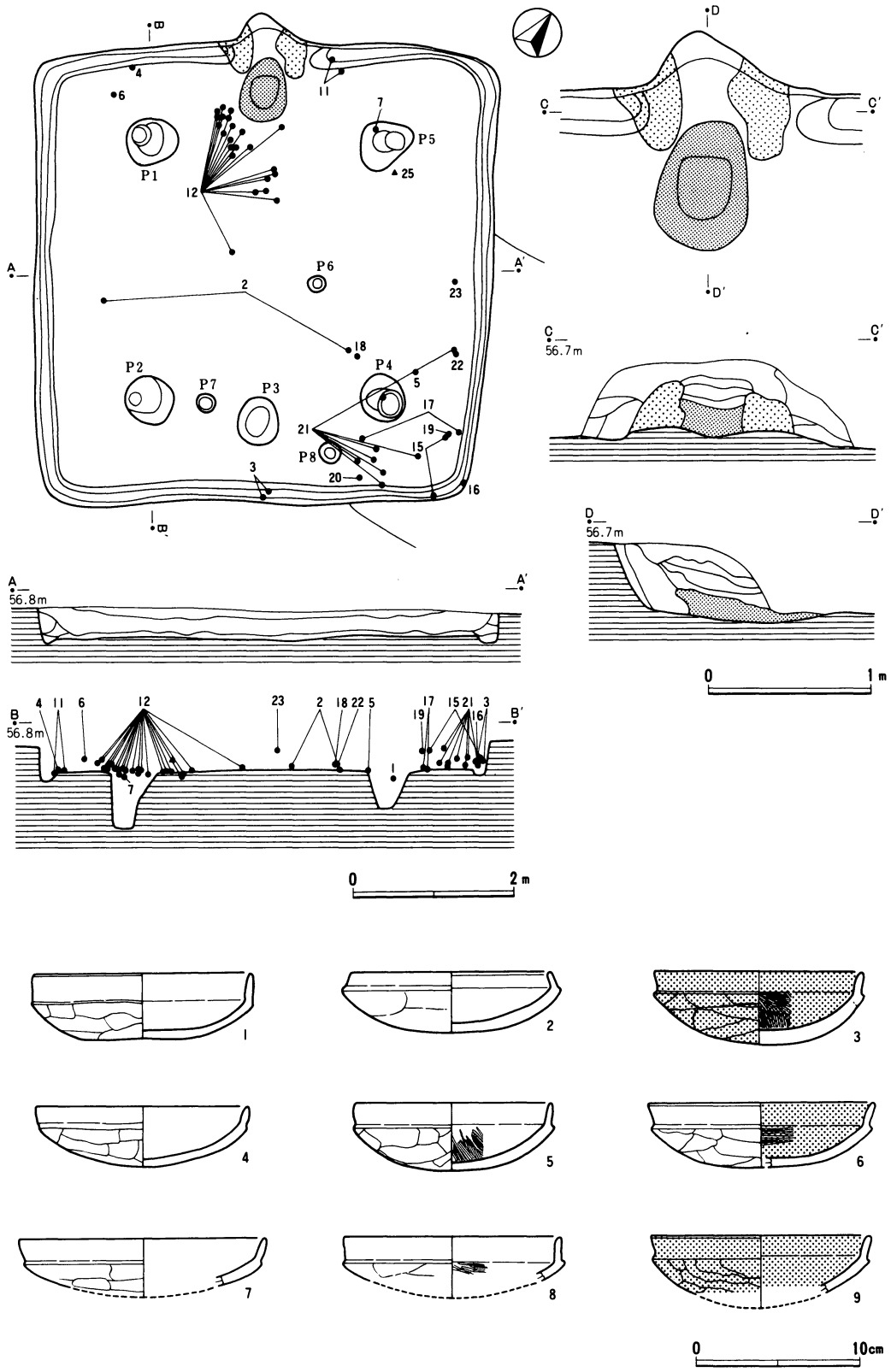
012号跡 (第17図～第19図)

位置・形態 調査区中央のC区で検出され、2C-30グリッドを主体とする。南側に006号跡および011号跡が隣接する。平面の形態は正方形を呈し、北西辺5.6m、南西辺5.2m、南東辺5.1m、北東辺5.2mを測る。主軸方向はN-29°-Wで検出面からの深さは、26cm～43cmである。カマドの位置は主軸上の北西に位置する。床面積は26㎡である。なお、出土遺物の中に本竪穴よりも新しい時期の遺物があることから、竪穴の一部に新しい時期の竪穴建物跡が切り合っている可能性が高く、調査中に検出できなかった。本調査区外にその主体があるものと考えられる。

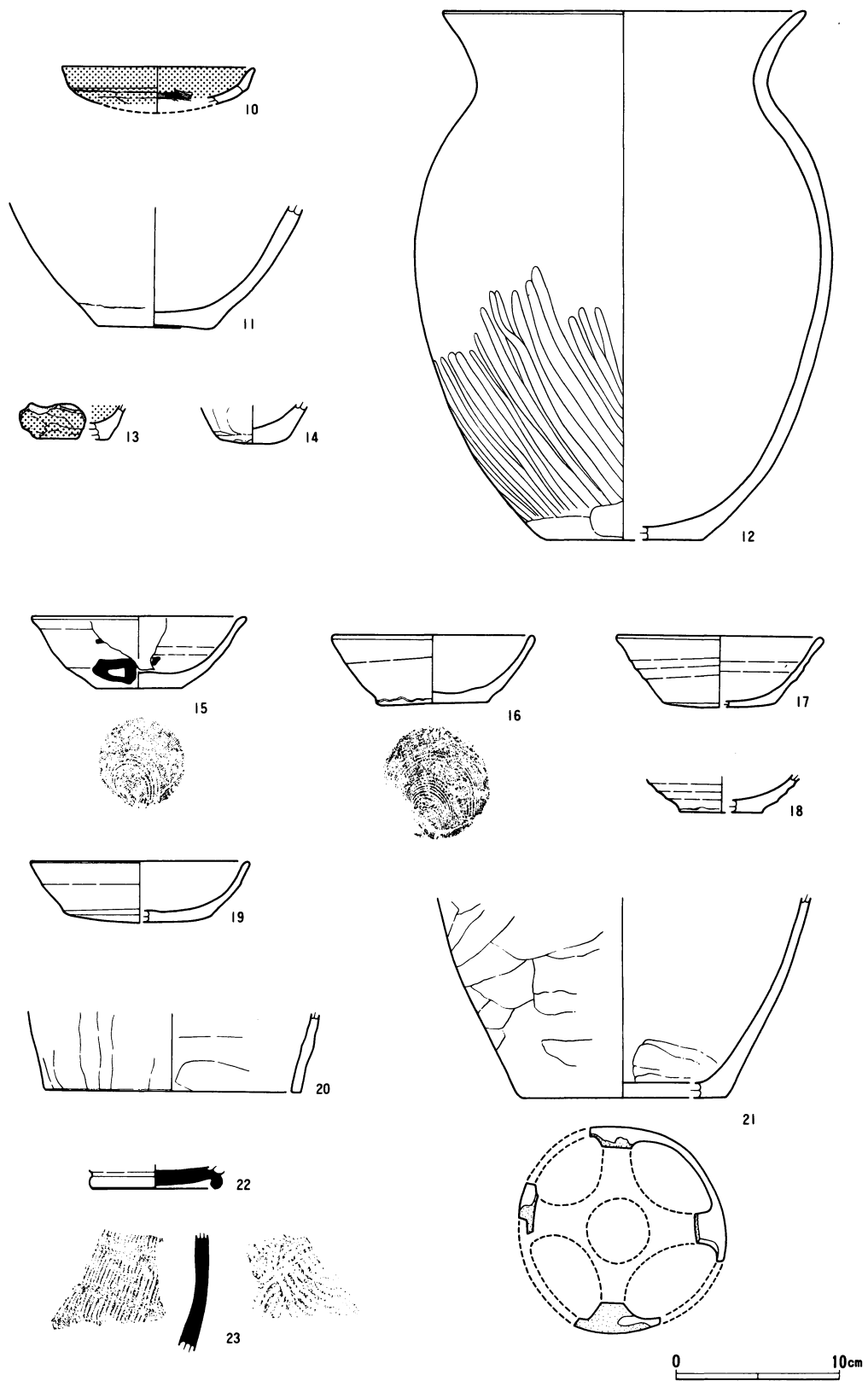
覆土 暗褐色土を主体とする。床面上に薄く堆積する層がロームを多く含む。

施設等 主柱穴と考えられるピットは4つ検出されており、床面からの深さはP1が68cm、P2が42cm、P4が59cm、P5が68cmでほぼ同様に深い。P3は入口の梯子ピットである。深さは47cmである。周溝は全周するが、カマドの下には掘られていない。カマドは主軸上にある。火床部は遺存した袖部よりも前面にあることから、袖部の遺存がやや悪いと思われる。カマド内の焼土量は多い。

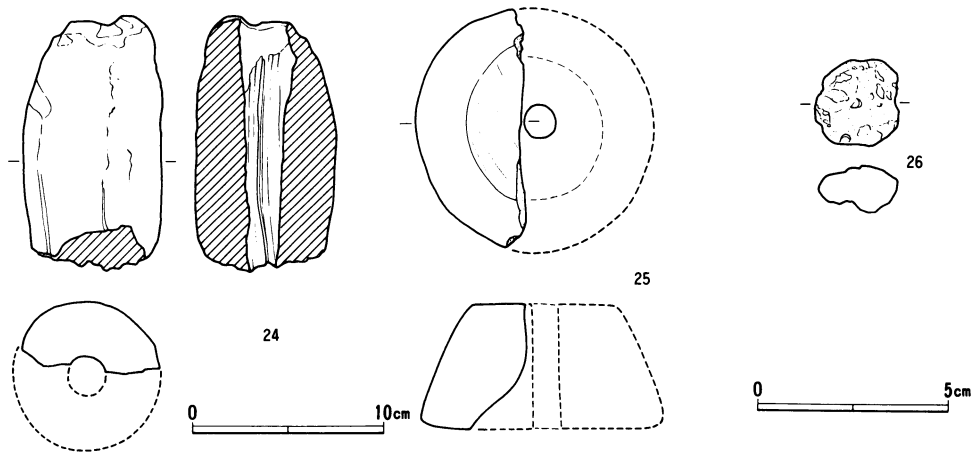
遺物出土状況 遺物点数は約170点である。散布の状態は中央および南側コーナーではほとんど見られず、カマド周辺と東側コーナーに集中している。床面からの出土が主体である。なお、東側コーナーから出土した遺物は8世紀代の遺物が多く覆土中位に集中していることからこの



第17図 012号跡及び出土遺物1 (1/80・カマド1/40・1~9/4)



第18図 012号跡出土遺物 2 (10~23¼)



第19図 012号跡出土遺物 3 (24¼・25、26½)

東側コーナーに別の竪穴建物跡が切り合っていたものと考えられる。一応本竪穴出土遺物として掲げたが、本来は分けて扱うべきものである。

出土遺物 図示できた遺物は須恵器甕1点、灰釉陶器1点、土師器坏16点、甕2点、甑2点、手捏土器1点、支脚1点、土製紡錘車1点、軽石1点である。

1～14、24～26が本竪穴に伴うもので、15～23は別の竪穴の遺物として区別される。1～10の坏は底部ヘラケズリ、口縁部の内外面ヨコナデ、一部を除き内面ミガキである。6は内面黒色処理、3・9・10は内外面黒色処理されている。13・14は手捏土器の底部である。やや胎土が粗い。13は内外面黒色処理されている。15の坏は外面に墨書がある。字は太く、欠損のため字体は不明である。20・21は甑である。ともに胎土には砂が多い。22は灰釉の高台底部で、図示しなかったが、外側から内側に向かって打ち欠いたあとがある。底面が平滑で硯として使用されたのではないかと思われる。24は支脚である。中心が空洞である。カマド内出土。25は土製紡錘車と思われる。中央の貫通孔が残存していないが、あったものと考えられる。胎土は砂がやや多い。26は軽石である。加工の痕跡はない。

020号跡 (第20図～第22図)

位置・形態 調査区南側のD区で検出され、4C-38グリッドを主体とする。北側の021号跡と西側の018号跡と重複している。平面の形態はやや歪みのある方形を呈し、北辺2.9m、西辺3.1m、南辺2.6m、東辺2.6mを測る。主軸方向は真北で、検出面からの深さは、25cm～31cm浅い。カマドの位置は北側にあり、わずかに西側に寄っている。床面積は6㎡である。

覆土 暗褐色土を主体とし、全体に炭化物・焼土を少量だが混入する。

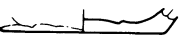
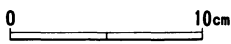
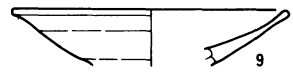
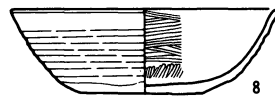
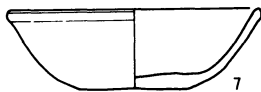
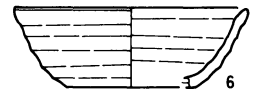
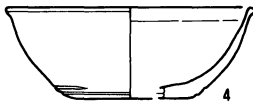
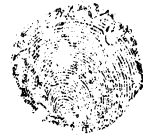
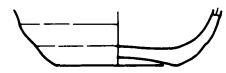
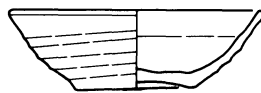
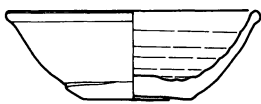
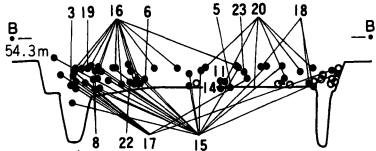
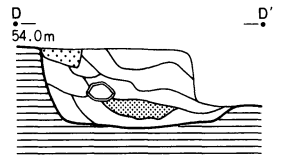
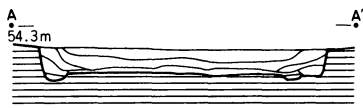
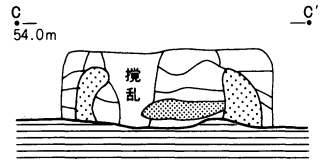
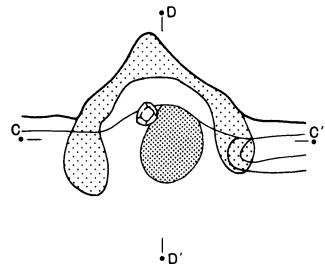
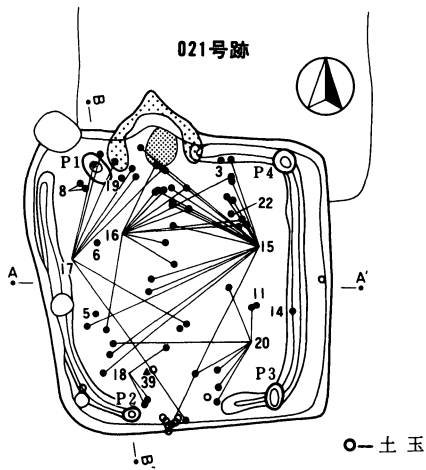
重複関係 021号跡と重複し、セクションおよびカマドが遺存していることから、明らかに本堅穴の方が新しいと判断し得る。また西側には018号跡のピットが3つ検出されており、本堅穴の方が018号跡よりも古いと考えられる。

施設等 ピットは4つ検出されており主柱穴と考えられるが、壁に近く、3つは周溝内に位置する。床面からの深さはP1が44cm、P2が55cm、P3が58cm、P4が25cmあり、径が小さいにもかかわらず深さがある。入口のピットは検出されなかった。周溝はほぼ全周するが、極めて浅いものである。東側の周溝については壁から離れている。カマドの遺存はよく、カマド構築材の粘土の残りは顕著である。煙道部の突出は大きい。火床部の焼土量は比較的多く、やや奥寄りに支脚が立った状態で検出されている。

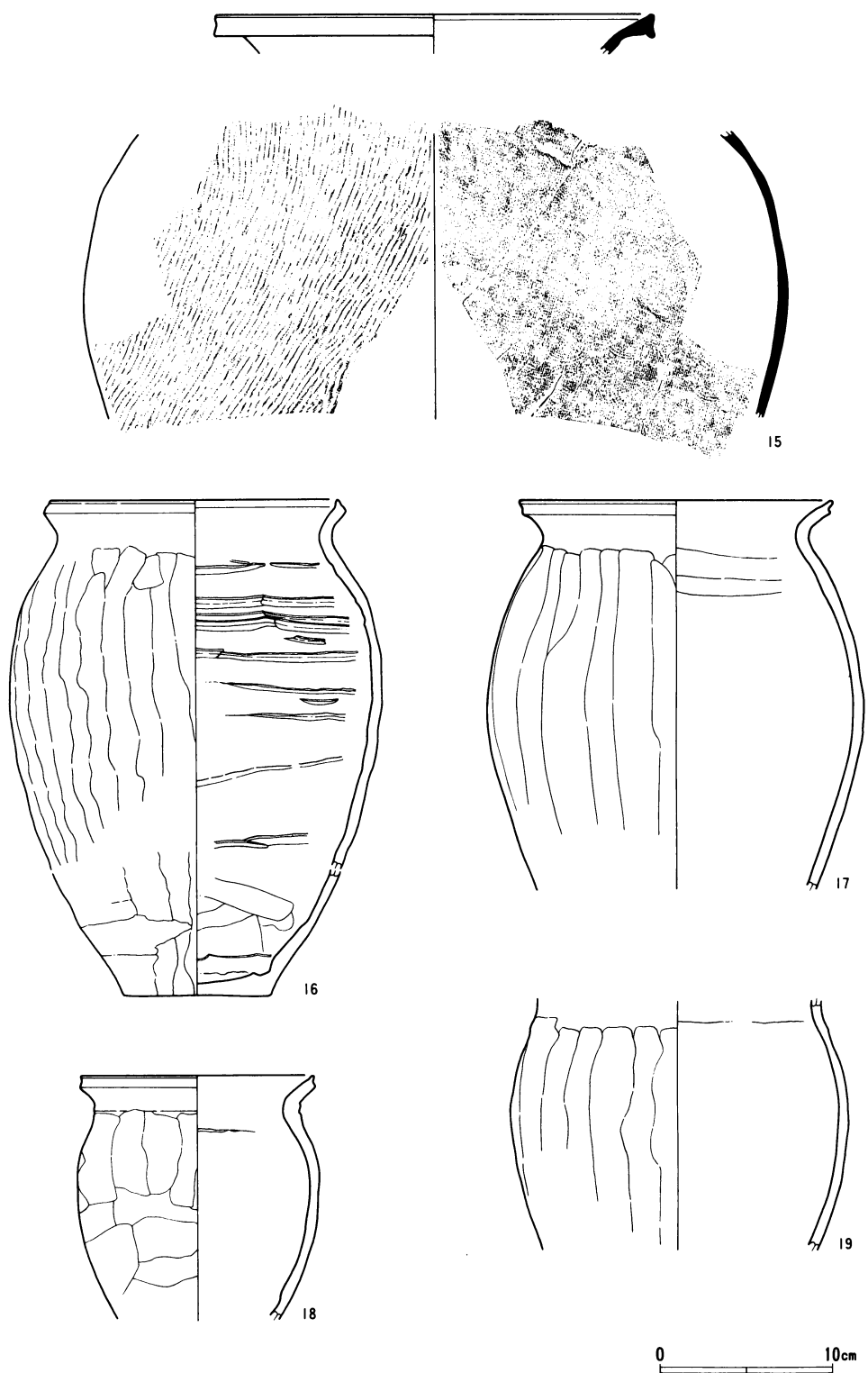
遺物出土状況 出土点数は約220点である。小規模な堅穴であるが遺物量は多い。散布の状態は中央で薄くカマド周辺と南壁寄りやや密であった。カマド内からの遺物量が特に多くやや奥よりで検出された支脚の周辺で集中していた。第20図のカマドセクション図には口縁を合わせた坏が図示されているが下が第20図1の坏、上が2の坏である。たぶん支脚の上に置かれていたのではないかと思われ、埋没中に支脚の上部からずれ込んだようである。特に支脚周囲から出土した土器は、坏が5点、皿が1点、甕が5点と覆土内からの点数を凌駕しており、単純なカマドの廃棄ではないことがうかがわれる。13点出土している土製の玉は南壁ぎわの床面近くで比較的集中して出土している。接合資料は甕が多く、堅穴内に拡散しているものが多い。

出土遺物 図示できた遺物は須恵器甕1点、土師器坏9点、甕9点、甗1点、墨書土器4点、支脚1点、臼状の土玉13点、砥石1点、鉄製鑿1点である。

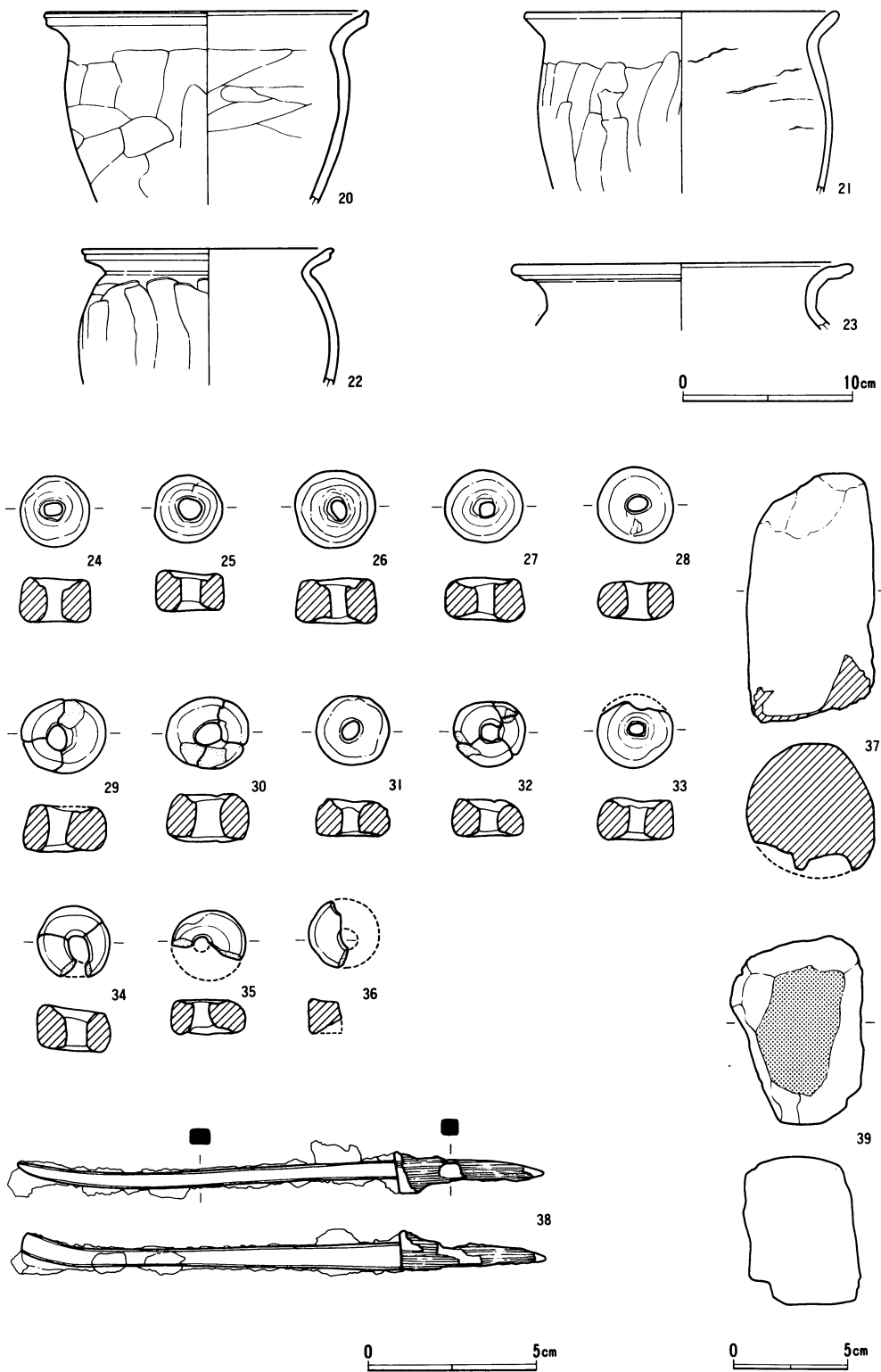
8の坏の胎土には雲母が微量混入する。内面ミガキ。9は高台付の皿と思われる。10～13は坏の外面に墨書を伴う。11の字体は「井」か。15の須恵器甕は内外面にタタキを伴う。外面は縦方向のタタキ、内面は円形のタタキである。16の甕は黄白色に近い胎土である。24～36は臼状の土玉である。中央の孔は棒を通して造った痕跡を残している。「おもり」として使用されたものではなかろう。胎土は良好だが、小石状の焼土が混入する。37は支脚である。カマド内出土である。38は鉄製鑿と思われる。木質部を残している。刃部先端はサビ脹れがあり、図示したもののやや不明瞭である。39は砥石である。スクリーントーンの部分のみ使用されている。



第20図 020号跡及び出土遺物1 (1/80・カマド 1/40・1~14 1/4)



第21図 020号跡出土遺物 2 (15~19¼)



第22图 020号迹出土遺物3 (20~23 $\frac{1}{4}$ ·24~36、38 $\frac{1}{2}$ ·37、39 $\frac{1}{3}$)

021号跡 (第23・24図)

位置・形態 調査区南側のD区で検出され、4C-28グリッドを主体とする。南側の020号跡と重複する。竪穴の規模は小さい。平面の形態は正方形を呈し、北辺・東辺が2.8m、西辺・南辺が2.9mを測る。主軸方向はN-2°-Eでほぼ北を向いている。検出面からの深さは、36cm～40cmである。カマドの位置は北側にあるが、わずかに東側に寄っている。床面積は8㎡である。

覆土 暗褐色土を主体とし、ロームの混入量が多い。

重複関係 021号跡に切られており、本竪穴の方が古いと判断される。

施設等 021号跡に切られているが、本竪穴の方が深いために床面等は遺存していた。ピットは1つ検出されたにすぎない。P1は入口の梯子ピットと考えられ、床面からの深さは15cmと浅い。他に柱穴らしきピットは検出されなかった。床面は壁に近い部分を除き、硬質であった。周溝は北西側で部分的に検出された。カマドの遺存は悪く、西側の袖部は特に悪い。火床部の焼土量は少ない。煙道部の突出は小さい。

遺物出土状況 出土点数は約80点である。遺物の大半は北側半分で出土しており、覆土中位から床面にかけてが中心である。接合資料は乏しい。

出土遺物 図示できた遺物は須恵器短頸壺1点、土師器坏7点、甕10点、鉄製刀子2点、坏7点のうち2点は墨書土器である。

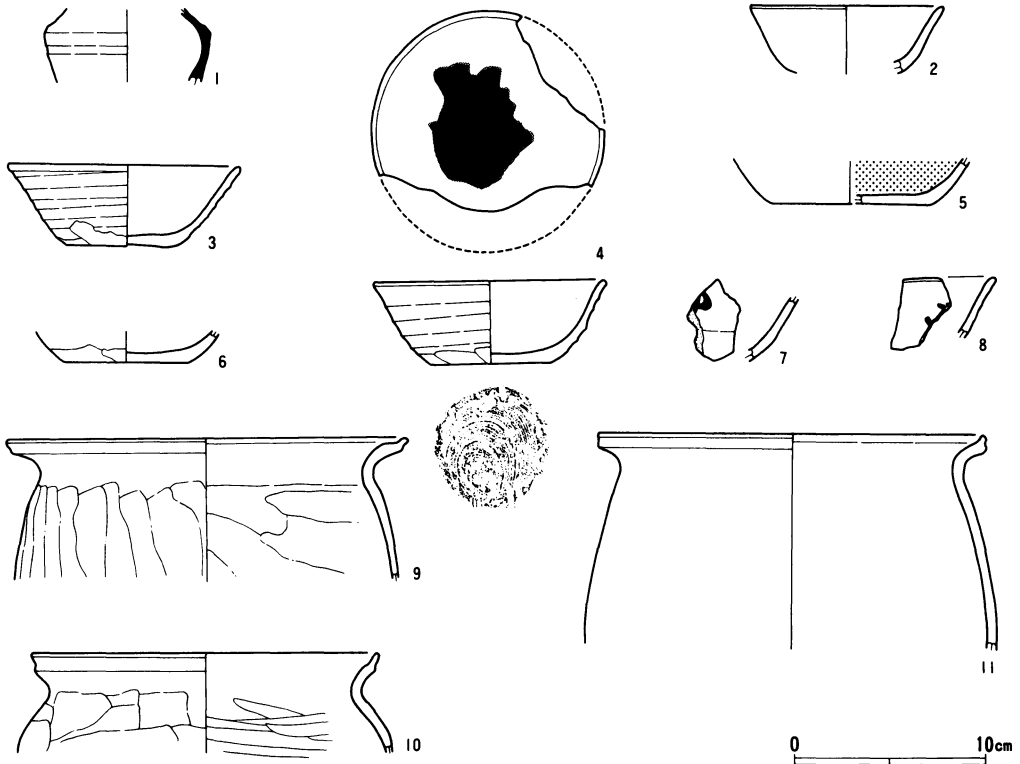
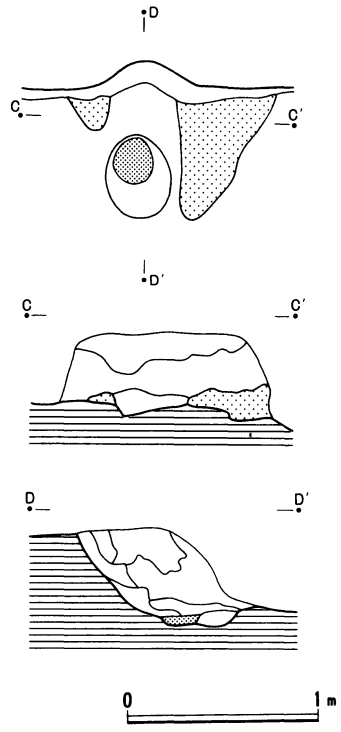
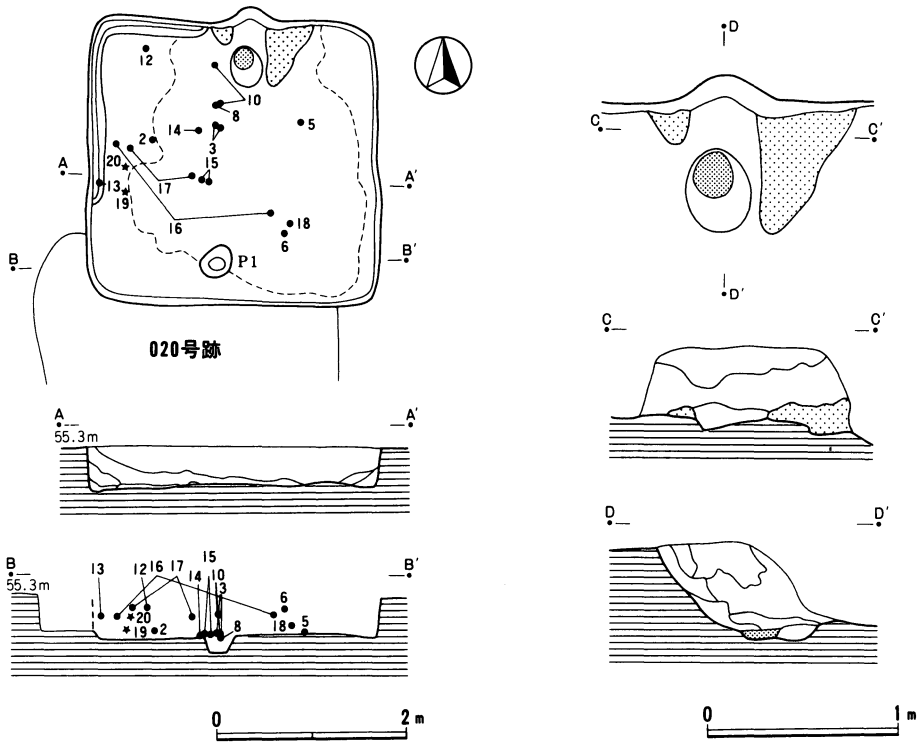
1は小型の壺である。胎土は良好で、色調は灰白色を呈する。4の坏は内面に墨痕を残している。中央にたまっていたらしい墨が明瞭に残っている。7・8は墨書土器である。7の墨書は明瞭だが、字体は不明。8は墨書がわずかに残る。19・20は鉄製刀子である。19は木質部分をよく残しており、表面には幅2mmほどの紐跡が残存している。残存長10.3cm、刃部幅1.0cm、刃部最大厚0.3cm、柄部の幅1.5cmである。20は木質部分を残していない。残存長17.0cm、刃部幅は中央で0.8cm、刃部最大厚0.4cm、柄の幅0.5cm、厚さ0.3cmである。

022号跡 (第25・26図)

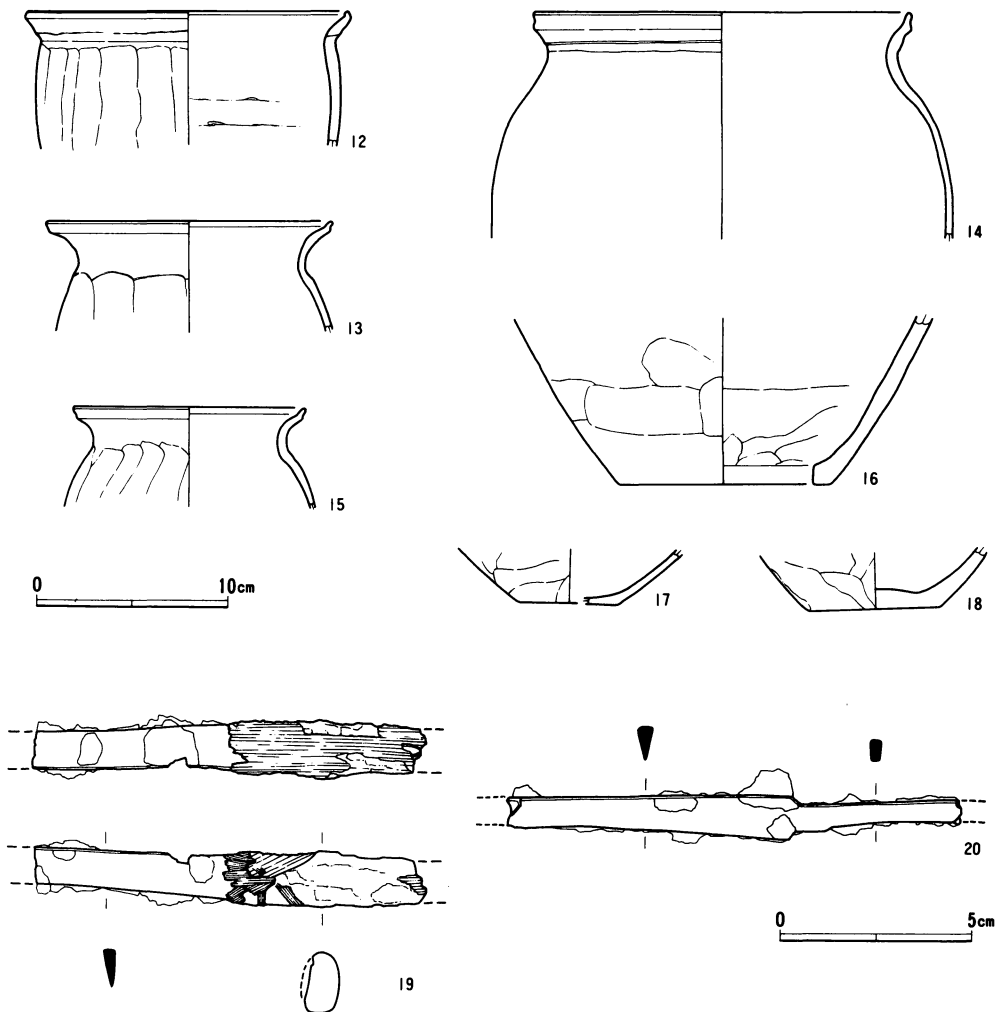
位置・形態 調査区南側のD区で検出され、4C-45および4C-46グリッドを主体とする。北側に023号跡がある。平面の形態はやや丸みのある正方形を呈し、北辺3.2m、西辺3.3m、南辺3.5m、東辺3.0mを測る。主軸方向はN-17°-Wで検出面からの深さは、50cm～62cmと深い。カマドの位置は主軸上の北西にある。床面積は11㎡である。

覆土 暗褐色土を主体とし、覆土中位にはカマド構築材の粘土が多量に混入している。

施設等 主柱穴と考えられるピットはP1・P2・P4・P5である。いずれも2つのピットからなり、床面からの深さはP1の北側43cm・南側20cm、P2の東側58cm・西側43cm、P4の東側51



第23図 021号跡及び出土遺物1 (1/80・カマド 1/40・1~11 1/4)

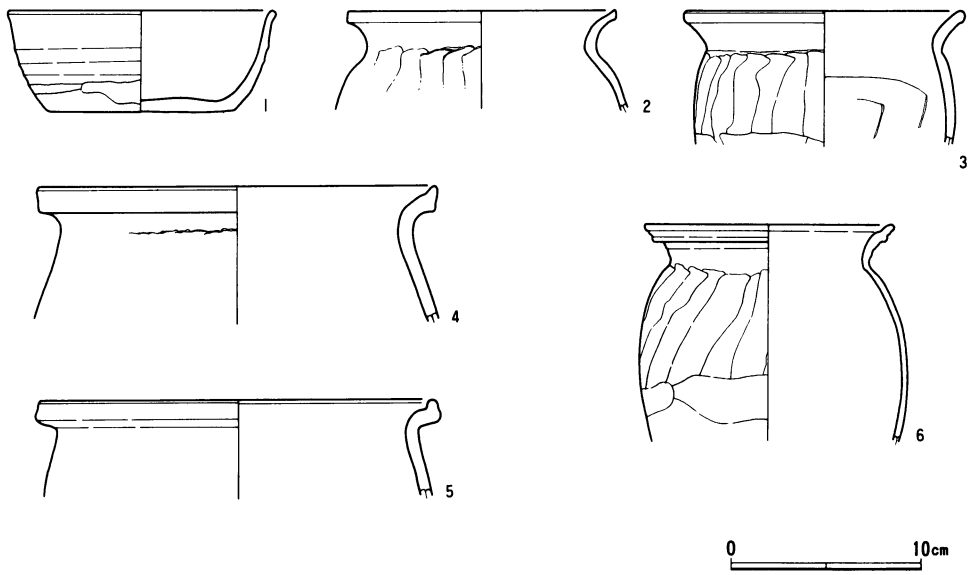
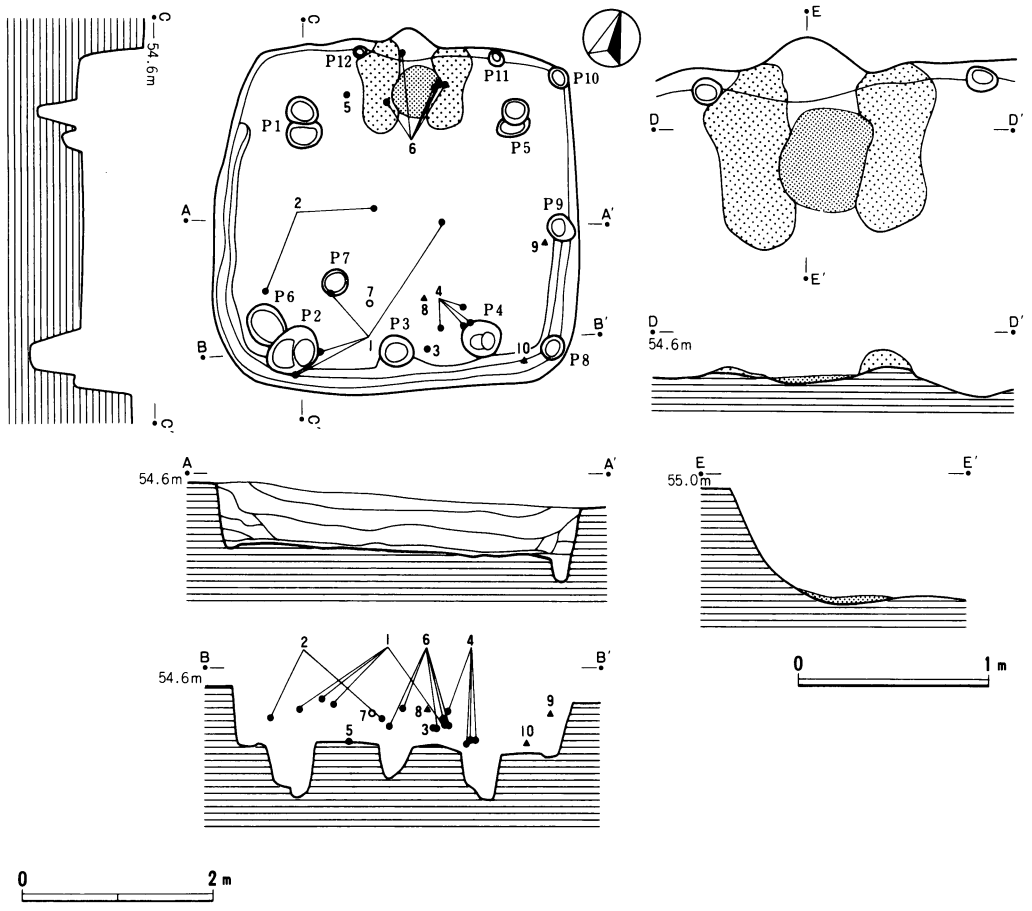


第24図 021号跡出土遺物 2 (12~18¼・19、20½)

cm・西側38cm、P5の北側34cm・南側18cmを測る。いずれも浅い方のピットが古いと考えられ、改築により柱の位置がやや広がったものと考えられる。P3が入口の梯子ピットである。深さは36cmを測る。他のピットの深さはP6が3cm、P7が5cmと浅く、P8~P12は壁柱穴と考えられ、20cm前後の深さを測る。周溝は北辺をのぞいて検出された。カマドの遺存は悪く、袖部はほとんど残っていない。両袖部の基礎は地山のロームを袖状に造り出している。火床部はよく焼土化している。

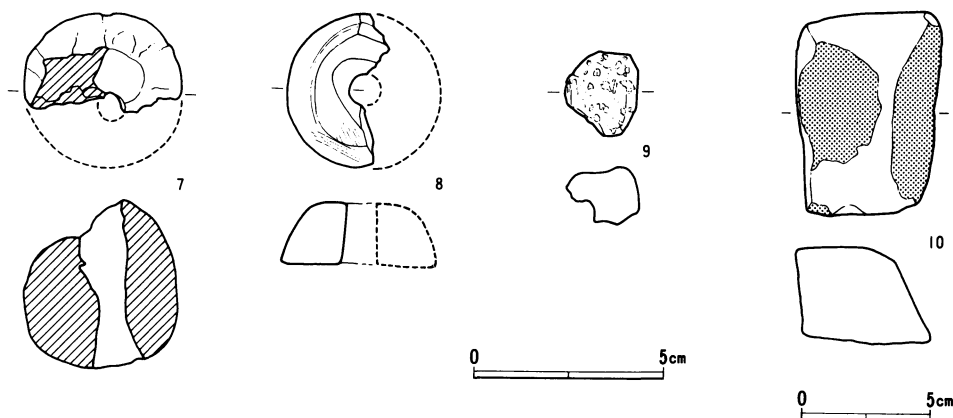
遺物出土状況 出土点数は約120点である。散布の状態は竪穴内にまばらに分布しており、覆土中位が主体である。接合資料の点数は少ない。

出土遺物 図示できた遺物は土師器坏1点、甕5点、土玉1点、石製紡錘車1点、軽石1点、砥石1点である。



0 10cm

第25図 022号跡及び出土遺物1 (1/40・カマド1~6 1/4)



第26図 022号跡出土遺物2 (7~9½・10⅓)

1は回転糸キリ後ヘラケズリ、胎土は良好である。6の甕は頸部のくびれが強い。体部上半は縦方向のヘラケズリ、下半は横のヘラケズリである。7は半分欠損している土玉である。中心に貫通孔があり、焼成はあまい。表面が黒味をおびている。8は石製紡錘車である。半分欠損している。表面はきれいに仕上げられている。9は軽石である。加工の痕跡はない。10は砥石と考えられる。やや欠損部分がある。全体を使用したらしいが程度はかるくスクリーントーンの部分がよく使用され滑らかである。

023号跡 (第27図)

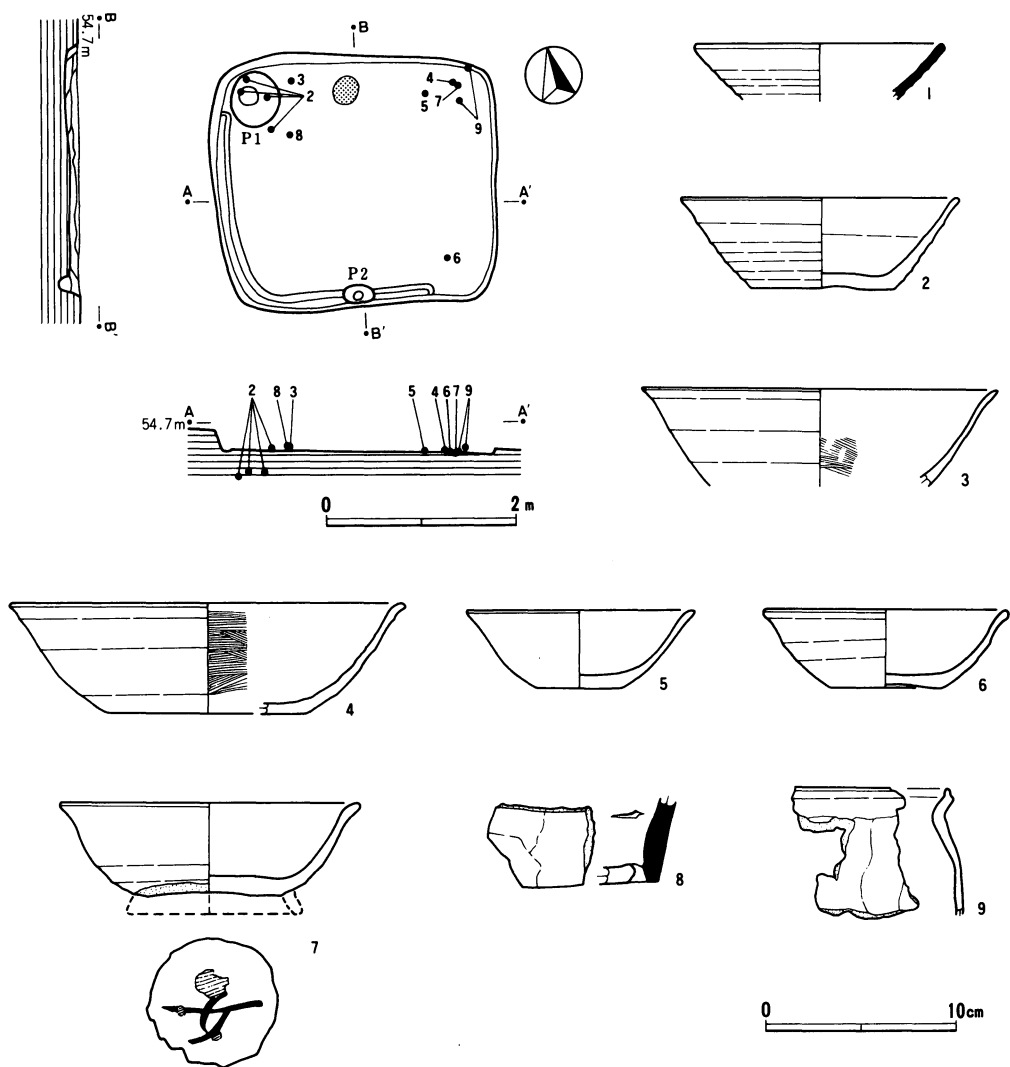
位置・形態 調査区南側のD区で検出され、4C-15グリッドを主体とする。D区内の他の竪穴とは少し離れた位置にある。平面の形態はやや歪みのある方形を呈し、北辺2.8m、西辺2.4m、南辺2.6m、東辺2.3mを測る。主軸方向はN-6°-Eで検出面からの深さは、5cm~20cmと浅い。カマドの位置は主軸上の北側にある。床面積は7㎡である。

覆土 竪穴が浅く、覆土量は少ない。暗褐色土を主体とする。全体にロームブロックの混入が認められる。

施設等 柱穴と思われるピットは検出されていない。P1は貯蔵穴と考えられる。直径54cm、床面からの深さは54cmを測る。P2は入口の梯子ピットと考えられる。深さは13cmを測る。周溝は西辺から南辺にかけてのみ検出された。カマドは構築材の粘土が遺存しておらず、火床部の焼土が検出されたにすぎない。

遺物出土状況 出土点数は約40点である。竪穴が浅いこともあり、遺物量は乏しい。接合資料は、貯蔵穴から出土した坯をのぞき、ほとんどないといってよい。

出土遺物 図示できた遺物は須恵器甕1点、土師器坏5点、鉢1点、高台付坏1点、甕1点



第27図 023号跡及び出土遺物 (1/10・1~9 1/4)

である。

1の須恵器坏の胎土は良好。口縁の広がりには直線的である。2はやや大型の坏である。口縁部がやや外反する。3・4は口径がともに大きく4は口径20cmを超えており、一応鉢とした。ややふくらみのある立ち上がりで内面はミガキ。7は高台坏であるが、高台を欠損している。回転糸キリ後高台を貼り付けている。外面底部に墨書がある。やや薄い剥落もあるため不明瞭だが字体は「女」と思われる。8は須恵器甗である。

024号跡 (第28図～第30図)

位置・形態 調査区南側のD区で検出され、4C-18・19グリッドを主体とする。北側の025号跡と重複する。平面の形態はほぼ正方形を呈し、北辺4.0m、西辺3.6m、南辺3.8m、東辺3.6mを測る。主軸方向はN-5°-Eで検出面からの深さは、48cm～64cmと深い。カマドの位置は北側にあり、わずかに西側に寄っている。床面積は13m²である。

重複関係 検出状況及び本竪穴のカマドが025号跡に壊されていない点から本竪穴の方が新しいと判断される。

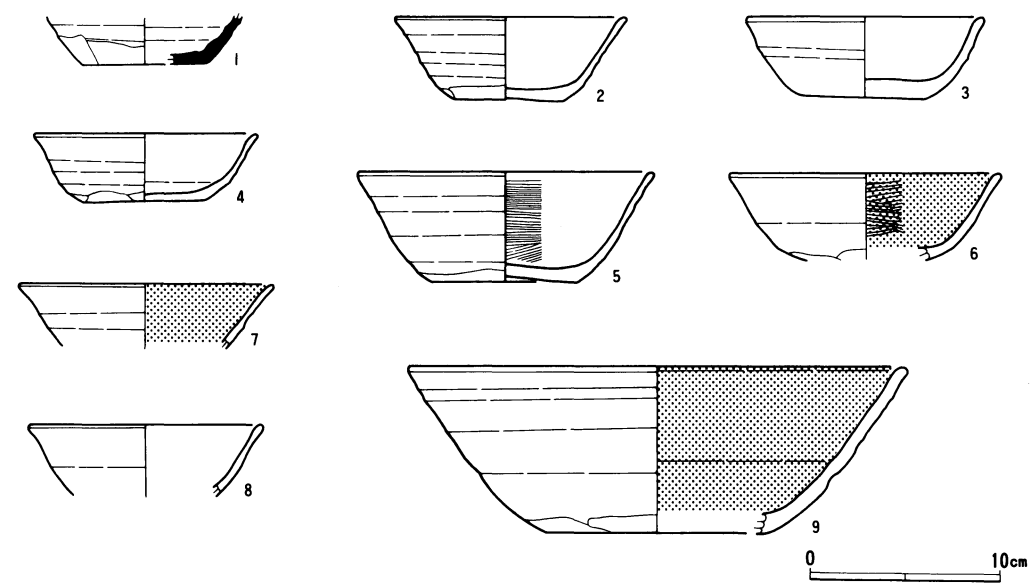
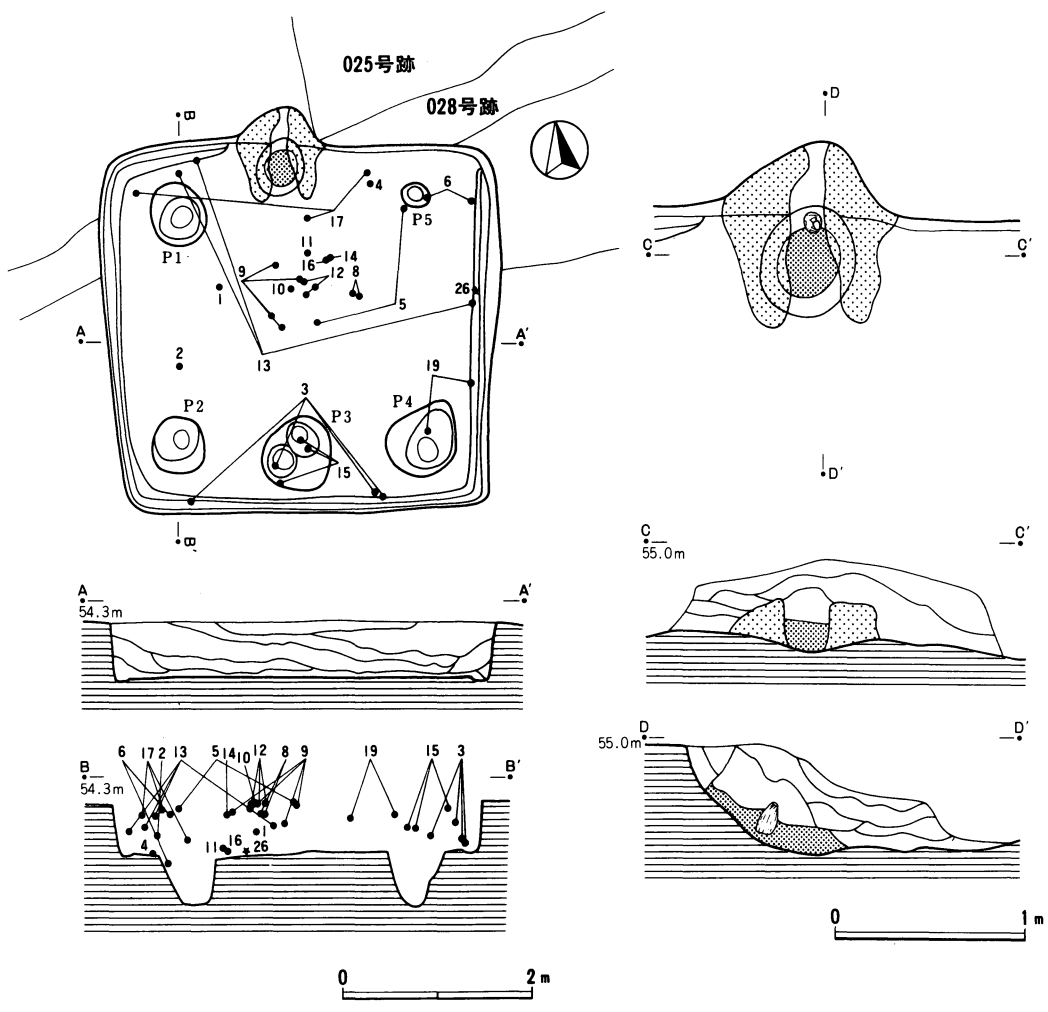
覆土 暗褐色土を主体とし、ロームおよびロームブロックの混入量が多い。カマド近くでは構築材の粘土および焼土・炭化物が混入する。

施設等 支柱穴と考えられるピットは4つ検出されており、床面からの深さはP1が48cm、P2が62cm、P4が72cm、P5が46cmを測る。いずれもやや壁に近く、深いものである。P3は入口の梯子ピットである。2つのピットからなり、2つとも48cmを測る。周溝は北辺を除き検出された。カマドの遺存はよく、両袖ともよく残っている。火床部の焼土量は多い。中央のやや奥でかろうじて形態を残している支脚が検出されたが、火床面からやや浮いた位置にあるため、本来の位置であるのかは疑問が残る。煙道部の突出は大きい。

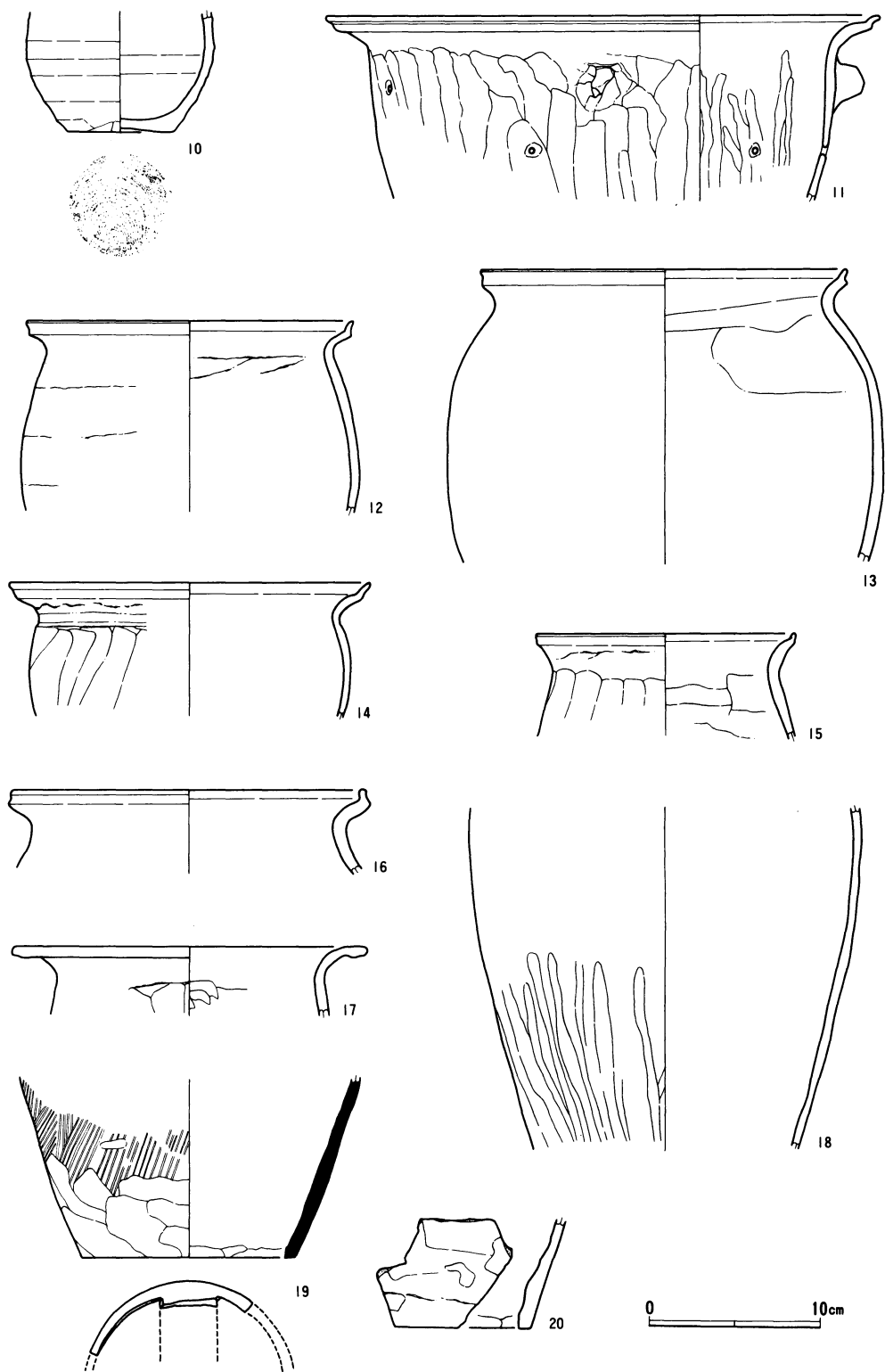
遺物出土状況 出土点数は約260点である。散布の状態は、竪穴内にまばらに出土しており、きわだって集中しているわけではない。遺物は覆土の中位から上位に比較的多く、床面からの出土は少ない。接合資料は遺物量の割りには少ないといってよい。

出土遺物 図示できた遺物は須恵器坏1点、須恵器甗1点、土師器坏7点、鉢1点、甕9点、甗1点、線刻のある甕破片2点、軽石3点、鉄製刀子1点である。なお、カマド内で検出された支脚は遺存状態がきわめて悪く、図示できなかった。

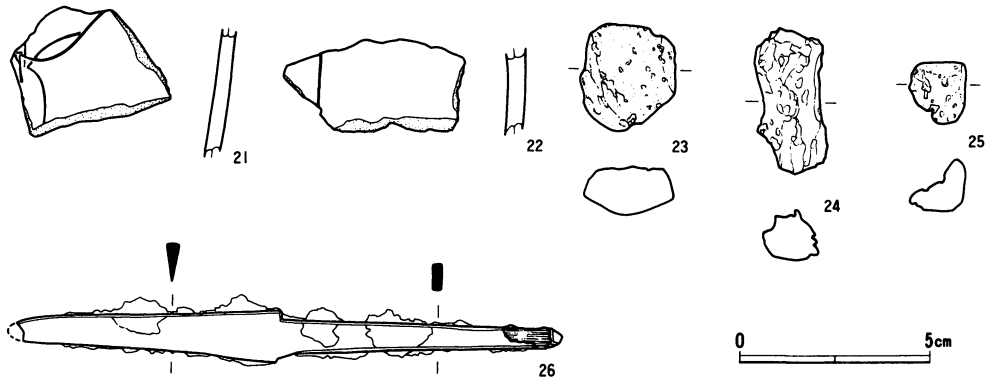
1の須恵器坏の胎土には雲母が微量混入する。5・6・7の坏内面はミガキで、6・7については内面黒色処理されている。9は口径26.6cmの鉢である。内面ミガキで胎土は良好。器厚がある。10は小型の甕である。底部は回転系キリ後ヘラケズリ。11は甗と思われる。焼成はよく赤褐色を呈する。器厚は大きさに比して薄い。体部は縦方向のヘラケズリ、内面はミガキ。焼成後に外側から穿孔されている。残存する孔は3個認められる。19は須恵器甗である。体部タタキで底部近くはヘラケズリ。20も甗である。21・22は甕の同一個体と思われる、外面に細い線刻が施されている。破片はともに小さく5cmほどしかなく、どのようなものが描かれているかは不明である。施工工具には先端が細く尖ったものを使用している。他に線刻のある破片は発見できなかった。23～25は軽石である。いずれも加工の痕跡はない。26はほぼ完形の鉄製刀子である。柄の末端に木質部をわずかに残している。全長14.4cm、刃部中央での幅は1.0cm、厚さ0.3cm、柄は中央で幅0.7cm、厚さ0.2cmである。



第28図 024号跡及び出土遺物1 (1/80・カマド 1/40・1~9 1/4)



第29图 024号跡出土遺物 2 (1/4)



第30図 024号跡出土遺物3 (1/2)

025号跡 (第31・32図)

位置・形態 調査区南側のD区で検出され、4C-09グリッドを主体とする。南側の024号跡と重複する。平面の形態はやや歪みのある方形を呈し、北辺4.0m、西辺約4.1m、南辺約4.1m、東辺3.9mを測る。主軸方向はN-4°-Wで検出面からの深さは、50cm~59cmと深い。カマドの位置は主軸上の北側にある。床面積は16㎡である。

重複関係 024号跡に切られており本竪穴の方が古いと判断される。

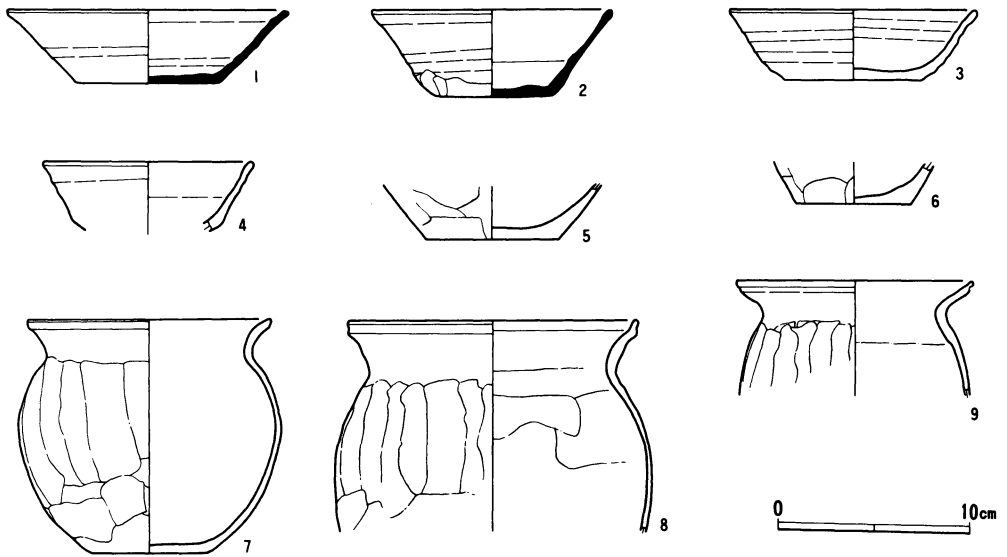
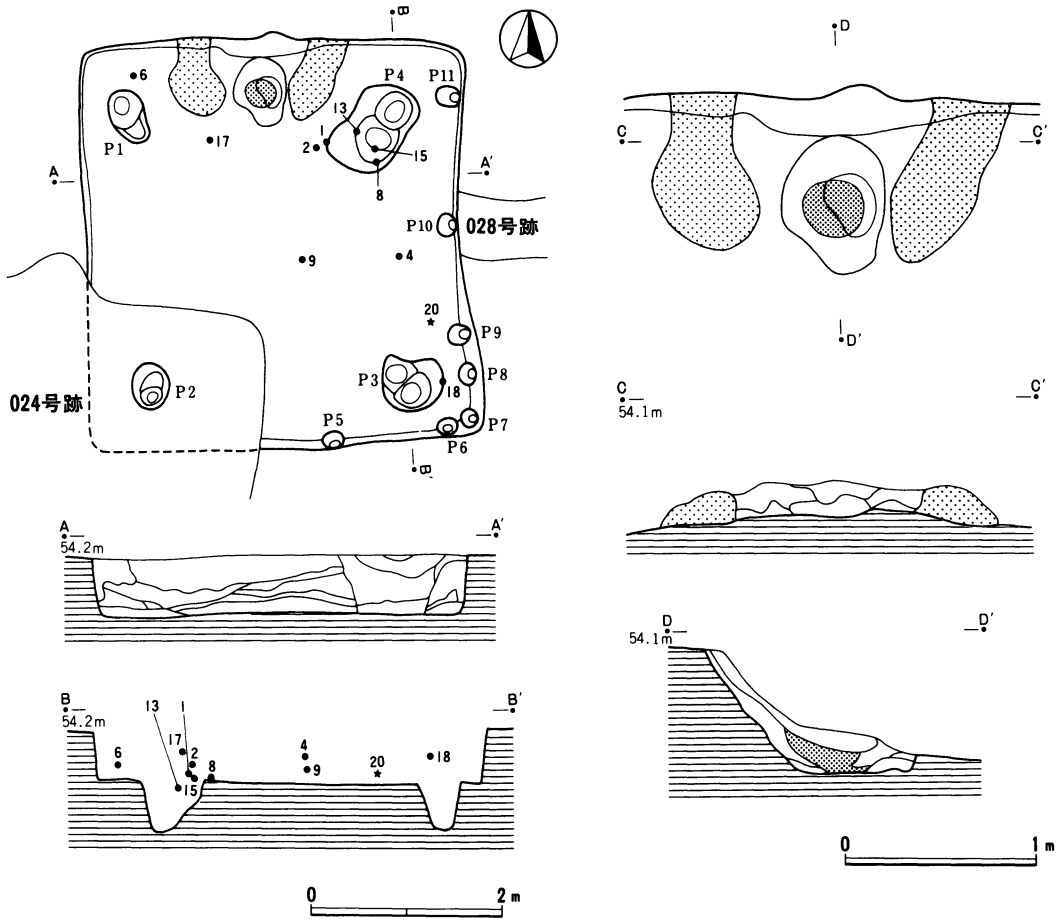
覆土 暗褐色土を主体とする。一部に攪乱が認められたが、遺構を壊すほどのものではない。

施設等 主柱穴と考えられるピットは4か所で検出されたが、うち2か所は2つのピットからなる。床面からの深さは、P1が48cm、P2が33cm、P3の内側が62cm・壁側が49cm、P4の内側が52cm・壁側が43cmを測る。調査の所見では、P3・P4の内側ピットの方が外側ピットよりも古いことから、本竪穴は当初に建てられたものから途中で竪穴の規模を大きくする改築が行われたと考えられる。入口ピットは検出されなかった。P5~P11は壁柱穴である。径は20cm前後、深さは14cmから36cmとばらつきがある。床面は主柱穴で囲まれた中央部分が硬化していた。カマドの遺存はやや悪く火床部の焼土もわずかであるが、袖のひらきが大きく規模は大きなカマドである。煙道部の突出はほとんどない。

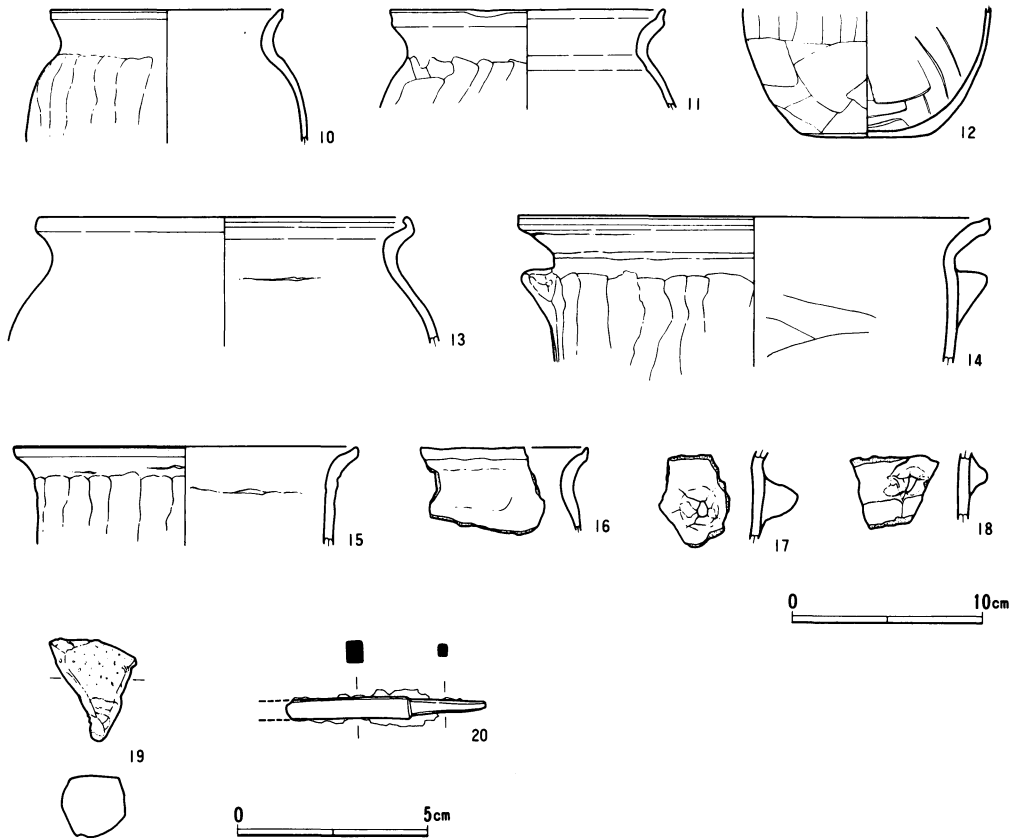
遺物出土状況 出土点数は約90点である。カマド内から坏・甕などが集中して出土しているほかは竪穴内からまばらに出土している。接合資料もわずかである。

出土遺物 図示できた遺物は須恵器2点、土師器坏2点、甕10点、甗4点、軽石1点、鉄鏃1点である。

1・2の須恵器坏の胎土には雲母が微量混入する。1の底部は回転ヘラキリ、2はヘラケズリである。7~12は小型の甕である。本竪穴ではやや多く出土している。14は甗である。17・



第31図 025号跡及び出土遺物1 (1/80・カマド 1/40・1~9 1/4)



第32図 025号跡出土遺物2 (10~18¼・19~20½)

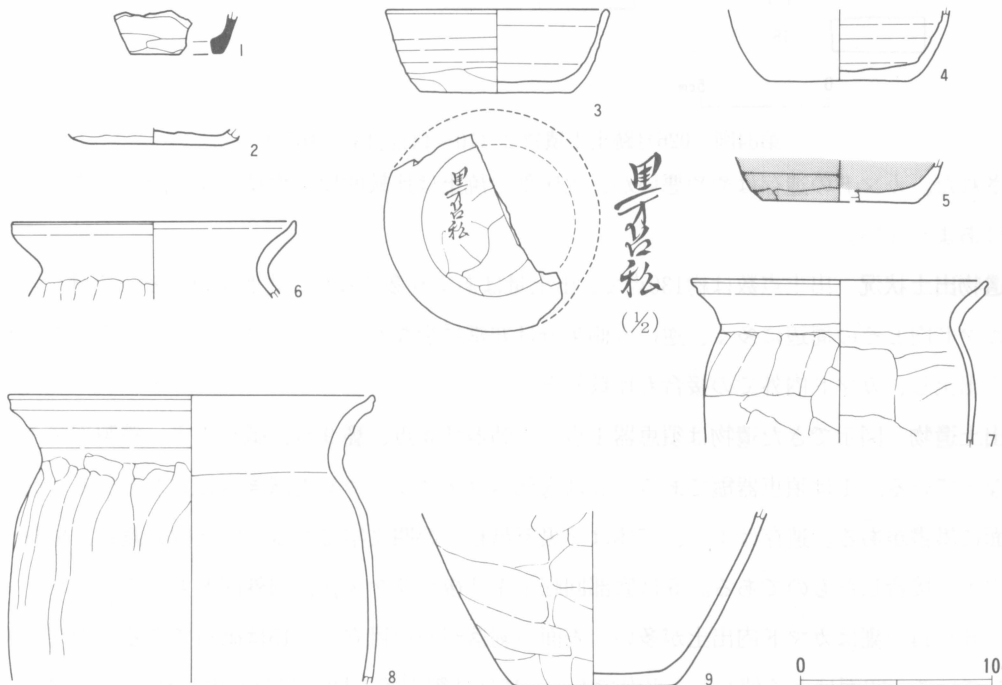
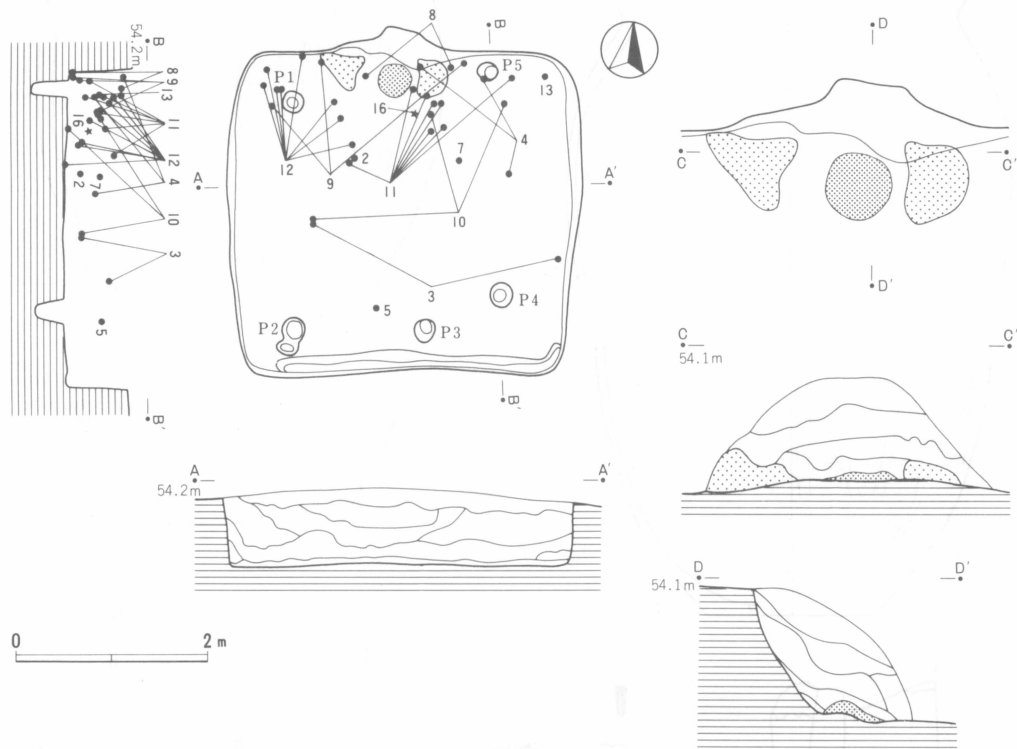
18の把手とは別個体である。体部は縦方向のヘラケズリ、内面はナデ。15も甑ではないかと思われる。19は軽石である。加工の痕跡は認められない。20は鉄鏝であろう。残存長5.3cmで、断面は正方形に近い。身の幅は0.5cm、厚さ0.4cm、柄の幅0.3cm、厚さ0.2cmである。

026号跡 (第33・34図)

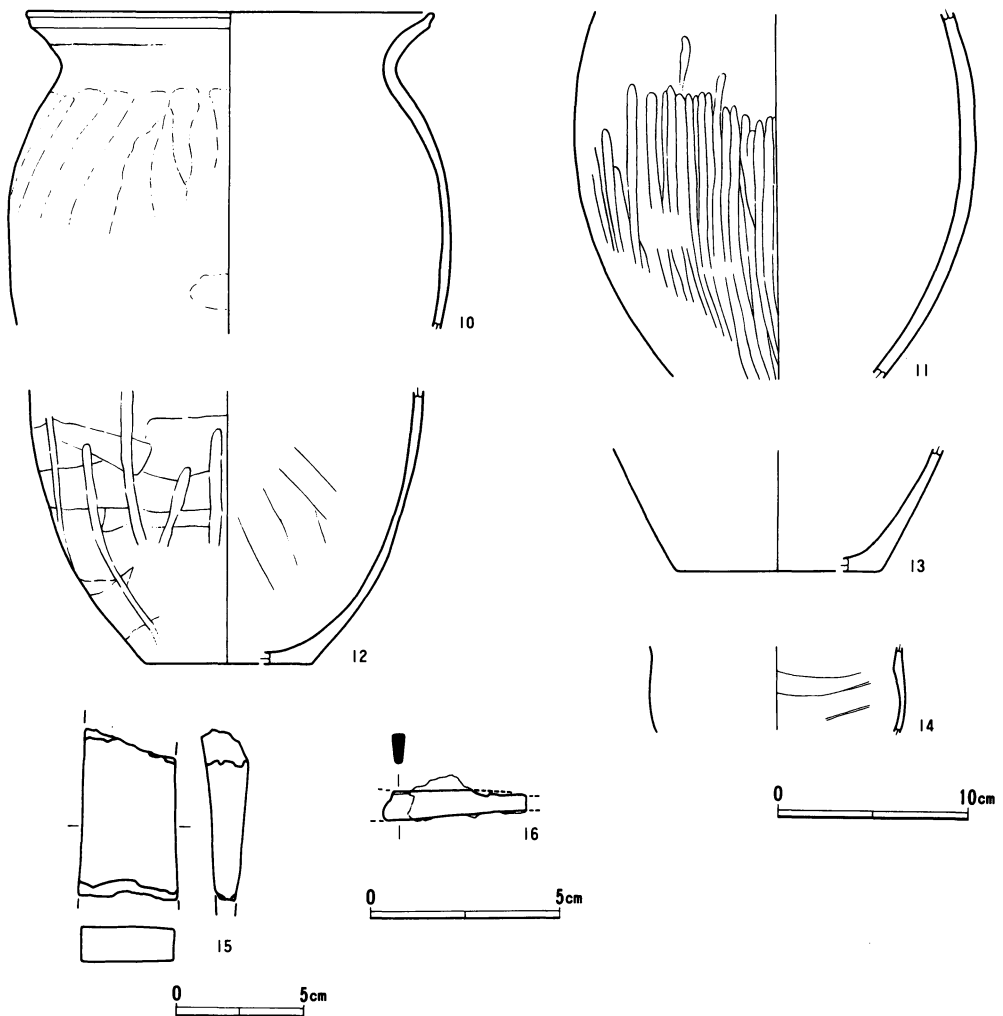
位置・形態 調査区南側のD区で検出され、4D-00・01グリッドを主体とする。西側に025号跡が隣接する。平面の形態は方形を呈し、北辺3.3m、西辺3.3m、南辺3.2m、東辺3.2mを測る。主軸方向はN-6°-Wで検出面からの深さは、43cm~71cmと深い。カマドの位置は主軸上の北側にあるが、わずかに西側に寄っている。床面積は11㎡である。

覆土 暗褐色土を主体とし、カマド近くで構築材の山砂が混入する。

施設等 主柱穴と考えられるピットは4つ検出されているが、その配置は壁寄りで規則的でない。P1が33cm、P2は2つのピットからなり壁寄りが27cm、中央寄りが35cm、P4が32cm、P5が37cmを測り、類似した深さである。P3は入口の梯子ピットである。深さは30cmで中央に向かって若干傾斜している。床面は主柱穴で囲まれた部分が硬かった。周溝は南壁部分にのみ検



第33図 026号跡及び出土遺物 1 ($\frac{1}{80}$ 、カマド $\frac{1}{40}$ 、1~9 $\frac{1}{4}$)



第34図 026号跡出土遺物2 (10~14 $\frac{1}{4}$ 、15 $\frac{1}{3}$ 、16 $\frac{1}{2}$)

出された。カマドの遺存はやや悪いが、火床部の焼土は比較的厚く堆積していた。煙道部の突出はあまりない。

遺物出土状況 出土点数は約130点で、出土量はあまり多くない。北側半分がその主体で、特にカマド内とその周辺に多く、逆に南側半分は非常に少なかった。カマド内からは甕の破片が多く出土し、カマド内外での接合も比較的多い。

出土遺物 図示できた遺物は須恵器1点、土師器坏4点、甕9点、砥石1点、鉄製刀子1点となっている。1は須恵器甕である。3は底部ヘラケズリ、やや内湾ぎみに立ち上がる。底部外面に墨書がある。遺存はよく、字体は「黒万呂私」の四文字である。竪穴内の離れた位置から出土し接合したものである。5は底部回転糸キリ後ヘラケズリ、内外面ともに赤彩されている。6~14の甕はカマド内出土が多い。表面の剥落がやや目立つ。15は砥石である。両端を欠損している。四面はよく使われ、平滑である。16は鉄製刀子の柄の部分と思われる。残存長3.8cm、幅0.7cm、厚さ0.3cmである。

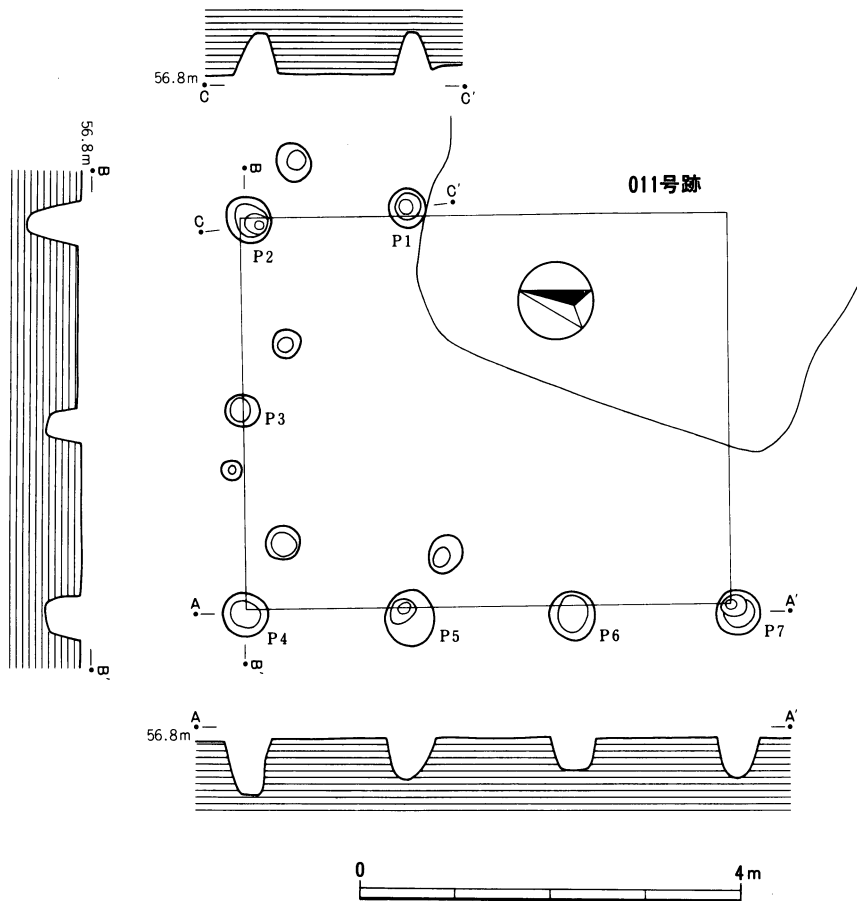
3. 掘立柱建物跡

013号跡 (第35図)

調査区中央のC区で検出され、2B-58・59グリッドを主体とする。南東側に011号跡があり、011号跡の調査では013号跡との新旧関係を確認することができなかった。主軸方向はN-16°-Wである。規模は桁行3間で全長5.3m、P4からP7の間隔はほぼ等間隔の1.7m、梁行は2間で全長4.0m、P2からP4までの間隔は2mを測る。柱穴の規模は32cm~58cmの径をもち、検出面からの深さは40cm前後である。P2およびP4のみ検出面からの深さが58cmと若干深い。

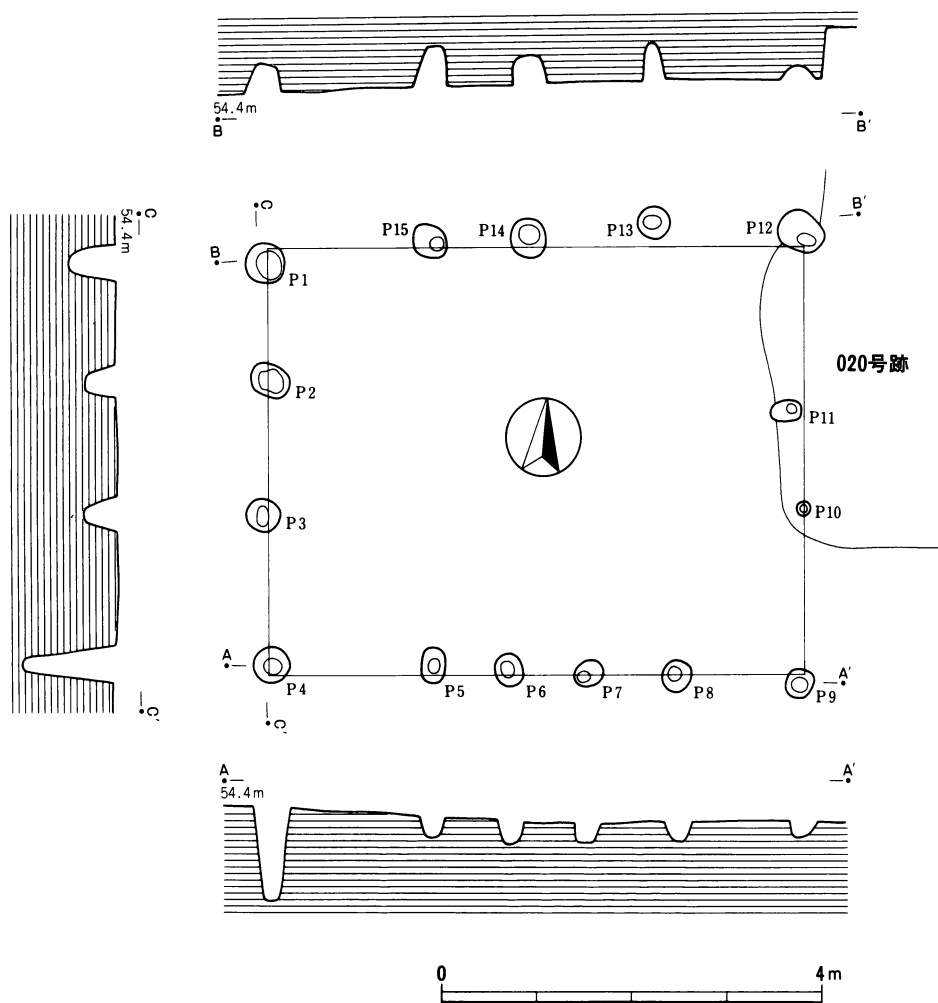
018号跡 (第36図)

調査区南側のD区で検出され、4C-37・38グリッドを主体とする。東側に020号跡があり、020号跡の壁および周溝を切っていることから本跡の方が新しいと判断される。主軸方向はE-W



第35図 013号跡 (1/80)

である。規模は桁行4間で全長5.7m、P1からの北辺の間隔は50cm～90cmでややばらつきがある。また南辺は5間となっており、間隔は均等ではない。梁行は3間で全長4.4m、P1～P4までの間隔は約1.4mであるが、東辺の間隔は均等ではない。柱穴の規模は31cm～40cmの径をもち、検出面からの深さはP4が98cmと深く他は14cm～50cmとばらつきがある。ここでは本跡を一応掘立柱建物跡として掲げたが、柱穴の配列が不均等な点や深さにばらつきがある点などから、掘立柱建物跡とするには疑問が残るところである。



第36図 018号跡 (1/80)

4. 土坑 (第37・38図)

004号跡

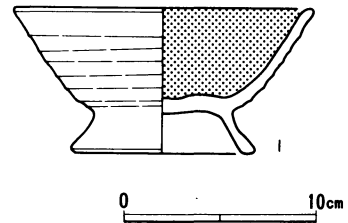
B区2B-25グリッドで検出された。楕円形を呈する。長軸長3.04m、短軸長0.64mを測る。掘り込みは浅く、検出面からの深さは0.38mを測る。平面形は陥穴状を呈するものの、性格は不明である。遺物等は出土しなかった。

005号跡

C区2C-60グリッドで検出された。東側が施設の基礎で攪乱を受けているが不整楕円形を呈すると思われる。長軸長0.94m、短軸長0.64m、検出面からの深さは0.75mを測る。遺物等は出土しなかった。

007号跡

C区2C-40グリッドで検出された。検出面および底部は円形を呈し、形態的には縄文時代の袋状土坑に似通っている。検出面の直径は1.10m、底部直径1.25mを測る。覆土は全体にロームおよびロームブロックが主体で、底部近くの層から炭化物および焼土が若干検出されたにすぎない。出土遺物は覆土中位の壁ぎわから出土した高台付坏1点のみである。破片で出土したが、ほぼ完形に復元することができた。



第37図 007号跡出土遺物 (1/4)

坏部は緩やかに内湾して立ち上がり、高台はハの字状を呈し安定感がある。内面は黒色処理され丁寧なミガキが施されている。高台の貼り付けは丁寧である。焼成は良好だが、胎土に砂粒を多く含む。時期は10世紀後半と考えられる。

008号跡

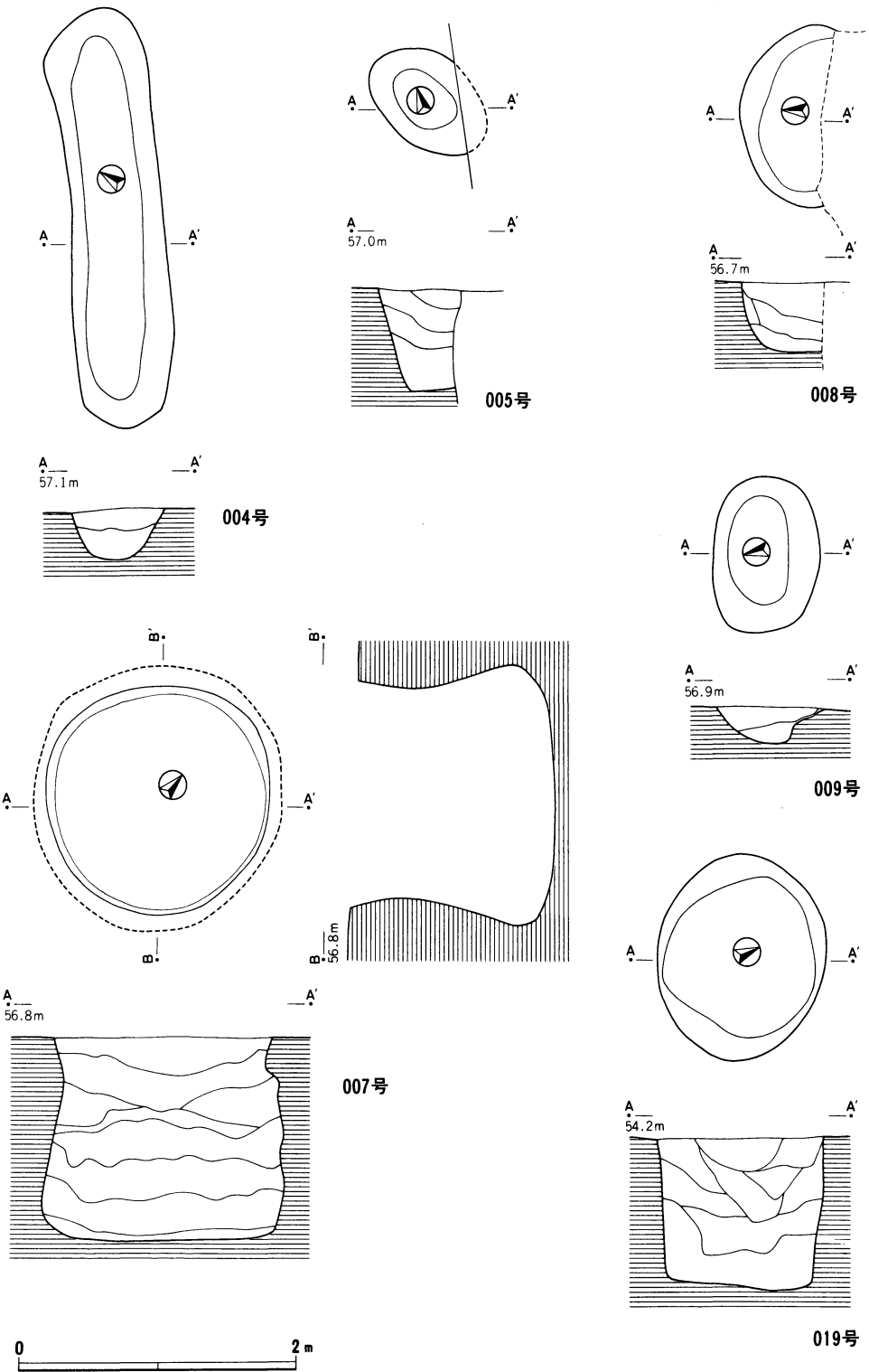
C区2C-50グリッドで検出された。南側半分が攪乱により壊されている。円形を呈すると思われ、直径1.38m、検出面からの深さは0.50mを測る。遺物等は検出されなかった。

009号跡

C区2B-49グリッドで検出された。不整楕円形を呈する。長軸長1.08m、短軸長0.77m、検出面からの深さは0.27mを測る。遺物等は検出されなかった。

019号跡

D区4D-20グリッドで検出された。ほぼ円形を呈し直径1.46m、底部は不整形で最大長1.14mを測る。底面は平らで、壁はほぼ直に立ち上がっている。覆土はロームおよびロームブロックを主体とする。遺物等は検出されなかった。



第38图 004·005·007·008·009·019号迹 (1/50)

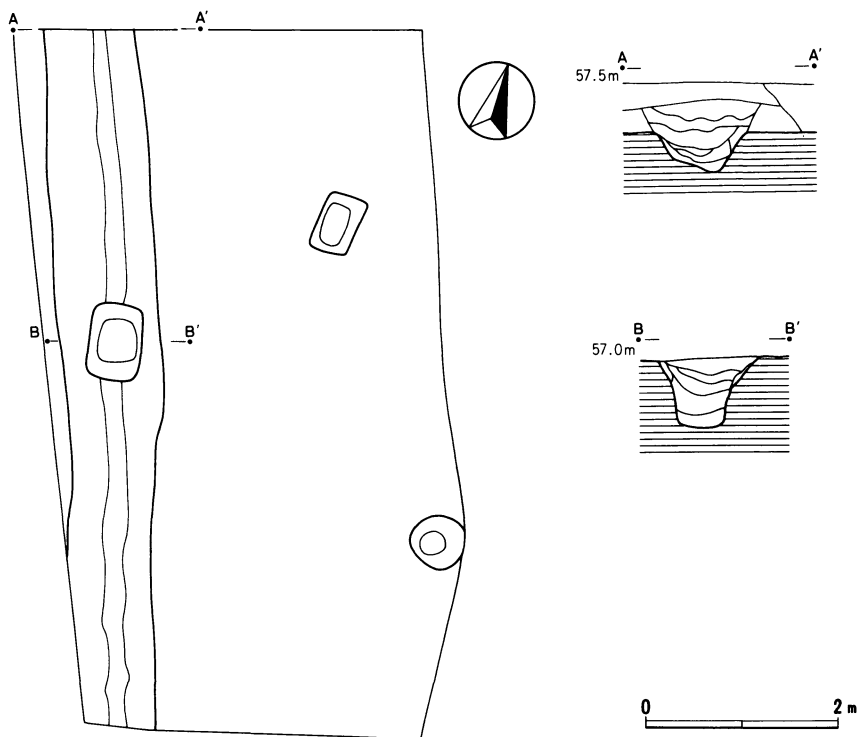
5. 溝状遺構 (第39・40図)

001号跡

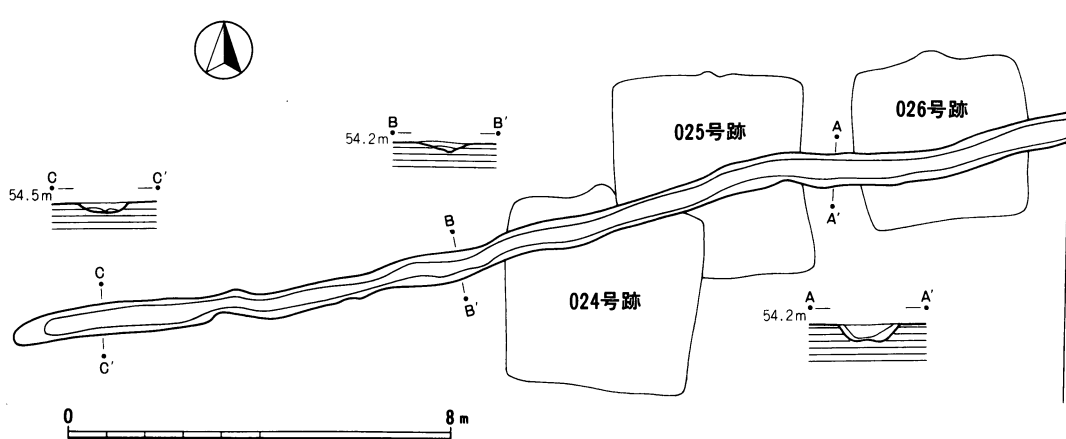
A区3B-04グリッドから3B-14グリッドにかけて北西から南東方向に走る溝状遺構である。台地の縁辺に沿ってのびているものと思われ、幅は1.0m前後で一定している。深さは検出面から0.4m～0.7mと深く、断面は逆台形を呈している。溝の中に長方形のピットが検出され、A区内にも同じ形態のピットが一か所検出されているが、ともに覆土の状態からきわめて新しいものと考えられる。A区内には他に円形のピットが検出されているが、やはり覆土の状態からきわめて新しいものと思われる。溝状遺構の覆土から出土した遺物は土師器片が少量あるが、当該遺構の時期を決定し得るに足るものではない。

028号跡

D区4C-16グリッドから4D-01グリッドにかけてほぼ東西方向に走る溝状遺構である。024号跡・025号跡・026号跡の各遺構を切っている。調査の所見では覆土の状態が、比較的新しい様相を呈しており、時期は近世以降と思われる。幅は0.6m前後で一定し、深さは0.1m～0.2mと浅い。



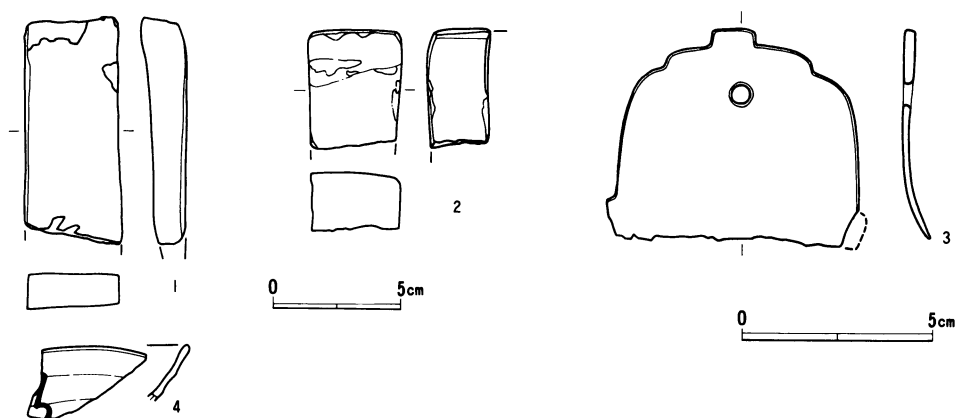
第39図 001号跡 (1/50)



第40図 028号跡 (1/160、セクション1/100)

6. 遺構外出土遺物 (第41図)

前記の縄文時代の遺物をふくめ、遺構外出土の遺物はきわめて少なく、図示できるものは第41図に示した遺物のみである。1・2は砥石である。1は欠損しているものの最大長は8.5cmあり、幅3.8cm、厚さ1.7cmの短冊状を呈する。表裏、側縁ともによく使用され滑らかである。2は1と変わらない幅を持つが、厚さが2.5cmとやや厚い。欠損面をのぞき他の面はよく使用され、滑らかである。3は用途不明の銅製品である。図の上端につまみ状の突出部があり、段を伴って左右に広がっていく。中央やや上寄りに直径0.9cmの孔を造りだしている。厚さは全体に薄く、上端が0.5cmと最も厚く下端になるにしたがって薄くなる。表面の錆の状態があまり進んでいないことから、時期的には新しいものと思われる。4は墨書のある土師器の坏である。墨書の字体は不明だが、残存する墨書は明瞭である。



第41図 遺構外出土遺物 (1・2 $\frac{1}{2}$ 、3 $\frac{1}{2}$ 、4 $\frac{1}{4}$)

第4章 自然科学的分析

011号跡出土炭化材の分析

はじめに

パリノ＝サーヴェイ株式会社

岩井安町遺跡では、7世紀～10世紀にわたる竪穴建物跡が11棟検出されている。このうち、011号跡では焼土等とともに構築材と考えられる炭化材が出土した。炭化材のうち、北東の柱穴から出土した炭化材は立った状態で出土しており、支柱材と考えられる。また、これらの状況から、本竪穴建物跡は焼失住居と考えられるが、カマド内から土器が多く出土していることから単純な廃棄に伴う焼失ではない可能性が指摘されている。

焼失住居跡から炭化材が出土する例は、千葉県内でもこれまでにいくつか知られている。また、住居構築材の用材選択を知るために樹種同定を行った例も、上貝塚、城の腰遺跡、日秀西遺跡、殿平賀向山遺跡等で報告されている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1986；千野，1979，1980，1987）。しかし、本地域周辺では、住居構築材の樹種に関する調査例がなく、過去にどのような用材選択が行われていたのかについては不明な点が多い。そのため、今回の調査では出土した炭化材について樹種同定を行い、過去の住居構築材の用材選択に関する資料を得る。

1. 試料

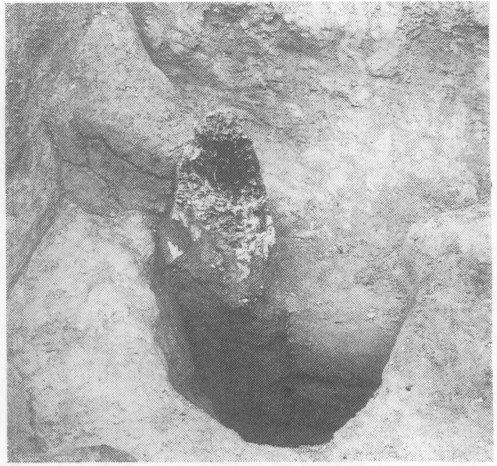
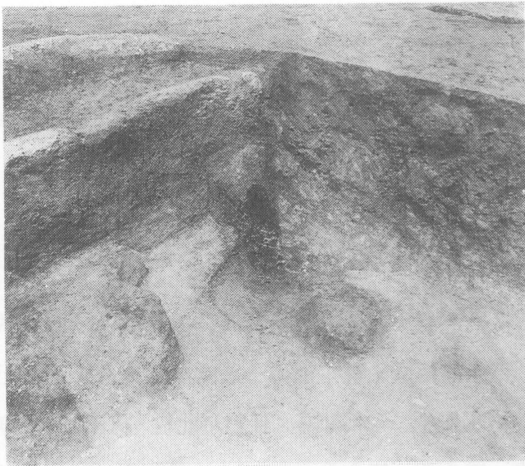
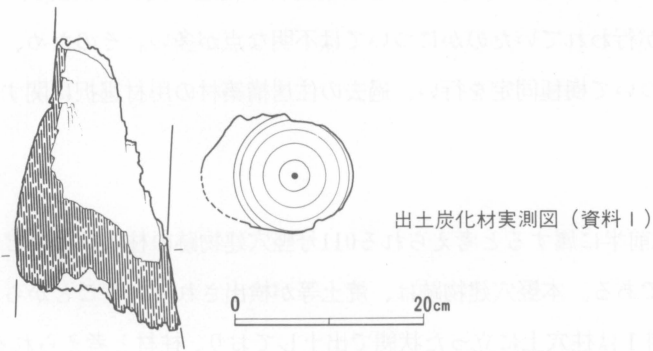
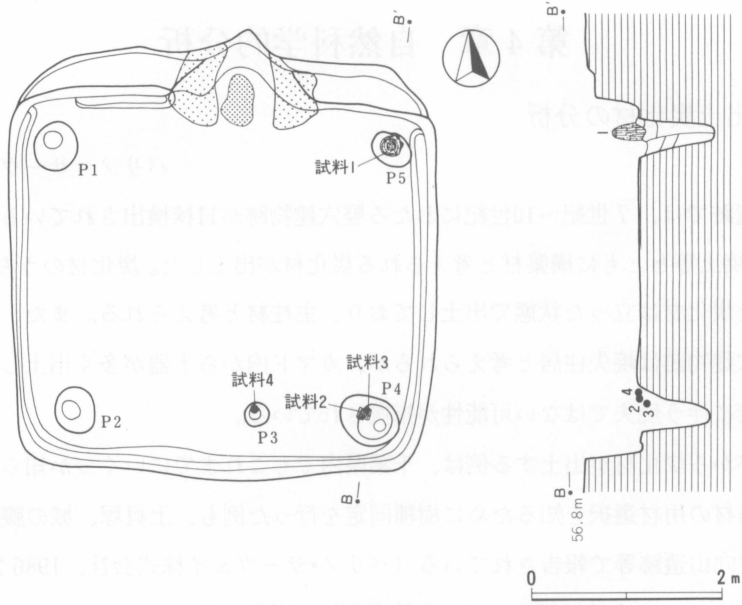
試料は、10世紀前半に属すると考えられる011号竪穴建物跡の柱穴およびピット内から検出された炭化材4点である。本竪穴建物跡は、焼土等が検出されていることから、焼失したものと考えられる。資料1は柱穴上に立った状態で出土しており、柱材と考えられる。また、試料2・試料3は同一か所から採取されており、同一部材の可能性が指摘されている。試料4は入口ピットから出土した炭化材であるが、用途等の詳細は不明である。

2. 同定の方法

試料を乾燥させたのち、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の割断面を製作し、走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）で観察・同定した。

3. 結果

4点の試料は、試料1がクリ、試料2・3の2点がコナラ属コナラ亜属コナラ節の一種、試料4がシキミに同定された。各種類のおもな解剖学的特徴や現生種の一般的な性質を以下に記す。なお、和名・学名等は、主として「原色日本植物図鑑 木本編〈II〉」（北村・村田，1979）に従い、一般的な性質などについては「木の辞典 第2巻～第8巻」（平井，1979-1981）も参考にした。



第42図 011号跡炭化材検出状況

コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp.)

ブナ科

試料番号：試料 2・試料 3

還孔材で孔圏部は 1～2 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと同複放射組織がある。

コナラ節は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるドングリ）が 1 年目に熟するグループで、モンゴリナラ (*Quercus mongolica* Fischer ex Turcz.) とその変種ミズナラ (*Q. mongolica* Fischer ex Turcz. var. *grosseserrata* (Bl.) Rehder et Wilson.)、コナラ (*Q. serrata* Murray)、ナラガシワ (*Q. aliena* Blume)、カシワ (*Q. dentata* Thunberg) といくつかの変・品種を含む。モンゴリナラは北海道・本州（丹波地方以北）に、ミズナラ・カシワは北海道・本州・四国・九州にナラガシワは本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州に分布する。コナラは樹高 20m になる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材等の用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ (*Q. acutissima* Carruthers) に次ぐ優良材である。枝葉を緑肥としたり、虫えいを染料とすることもある。

クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科

試料番号：試料 1

環孔材で孔圏部は 1～4 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単列、横断面では円形～楕円形、小道管は単列および 2～3 個が斜（放射）方向に複列、横断面では角張った楕円形～多角形、ともに管壁は薄い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材・櫓木や海苔粗朶などの用途が知られている。

シキミ (*Illicium anisatum* L.) シキミ科

試料番号：試料 4

散孔材で管壁厚は中庸～薄く、横断面では多角形、単列または 2～4 個が複列する。道管は階段穿孔を有し、段は多数、壁孔は階段状～対列状に配列、放射組織との間では網目状～階段状となる。道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性 II～I 型、1～2 細胞幅、1～20細胞高。年輪界は不明瞭。

シキミは本州(宮城・新潟県以南)・四国・九州に自生する常緑小高木であり、庭や墓地に植栽されることもある。西日本に多く、カシ林やモミ・ツガ林の下木として普通である。材の強度は中程度で、細工物・薪炭材などに用いられる。材の利用よりも、枝葉を仏花とすることで良く知られている。

4. 考察

竪穴から出土した4点の炭化材は、コナラ節2点、クリ1点、シキミ1点であった。これらのうち、コナラ節は同一箇所から出土していることから同一部材の可能性が指摘されている。今回の同定結果は、その可能性を支持しており、出土した2点(試料2・3)の炭化材が同一部材であることを示唆する。試料1は、竪穴内に4か所ある柱穴のうち、北東に位置する柱穴から出土した。その出土状況は、柱穴上に立った状態で出土し、発掘調査時の所見では樹皮もついていた。同定の結果、樹種はクリであることが明らかになったが、クリは強度および耐朽性が高いため主柱材としては適した木材と考えられる。今回の試料は、柱穴上から出土したが、柱穴中には残っていない。これは、床面より上の木材は火災時に炭化して残存したが、床面より下部の土に埋まっていた部分は炭化することなく残ったため、その後腐食して消失したためと考えられる。

一方、南東に位置する柱穴から出土した試料2・3は試料1とは出土状況が異なり小片で出土している。これは、火災時にそれぞれの地点で燃え方が異なったことや、出土した試料の部材等が異なっていたことが考えられる。同定されたコナラ節は、クリ同様強度があるため、柱材を含むあらゆる構築材に利用可能な樹種であったと考えられる。

関東地方では、これまでに多くの遺跡で縄文時代以降の住居構築材について樹種同定が行われてきた。その結果、関東地方では縄文時代にクリが多いが、弥生時代～古墳時代ではコナラ属のクヌギ節およびコナラ節が多くなる。平安時代では、クヌギ節・コナラ節に混じってクリが再び多くなる。このような傾向は、すでに千野(1991)により指摘された通りであるが、千葉県のみで見ると、その傾向は若干異なる。

千葉県では、縄文時代の試料が少ないため、当該期の用材選択については不明な点が多い。弥生時代は300点に近い試料があるが、その半数は樹種不明とされているものの同定された樹種をみるとアカガシ亜属、ユズリハ属、クスノキ科等の常緑広葉樹が多い。古墳時代では、それまでみられなかったクヌギ節およびコナラ節が圧倒的に多くなる。また、その他にも多くの樹種がみられる。奈良・平安時代は、クヌギ節とコナラ節が4割近くを占め、アカガシ亜属、シイノキ属等の常緑広葉樹の占める割合も高い。これらのうち、古墳時代のクヌギ亜属、シイノキ属等の常緑広葉樹の占める割合も高い。これらのうち、古墳時代のクヌギ節・コナラ節は、内陸側の我孫子市、松戸市、流山市等から出土したものが多。一方、同時期でも沿海地では

常緑広葉樹が多く、花粉分析や自然木の調査結果から推定されている古植生と調和する。このような結果から、千葉県では住居構築材に利用する木材は周辺植生と密接な関係があり、内陸側と沿海地で異なった用材選択が行われていた可能性がある。

今回調査された岩井安町遺跡が位置する地域は、千葉県内でも住居構築材の樹種に関する資料が少ない地域である。これまでの結果から見ると、沿海地では常緑広葉樹が多く、沿海地には暖温帯常緑広葉樹（いわゆる照葉樹林）が分布していたことが推定される。今回の調査結果では、コナラ節やクリの落葉広葉樹が4点中3点を占めた。この結果は、平安時代には落葉広葉樹が遺跡周辺に比較的多くみられた可能性がある。これは、人間活動の拡大による暖温帯常緑広葉樹林の二次林化等が考えられるが、今回の結果のみでは判断できない。今後各時期の住居構築材の樹種に関する資料の蓄積を行うとともに、周辺低地で花粉分析等用いた古植生復元を行い、それらの結果をあわせた検討を行う必要がある。

〈引用文献〉

- 平井信二（1979～1981）『木の事典』第2巻～第8巻。かなえ書房。
- 北村二郎・村田 源（1979）『原色日本植物図鑑』木本編<II>。545p.、保育社。
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1986）上貝塚001号住居跡の炭化材樹種同定。『谷・上貝塚・若葉台・塚（1）・（2）・（3）』、p.386～388、日本道路公団東京第一建設局・財団法人千葉県文化財センター
- 千野裕道（1979）炭化材樹種の同定。『千葉市城の腰遺跡』、p.386～388、日本道路公団東京第一建設局・財団法人千葉県文化財センター
- 千野裕道（1980）日秀西遺跡より出土した炭化材について。『千葉県我孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書』、p.639～642、千葉県教育委員会・財団法人千葉県文化財センター。
- 千野裕道（1987）殿平賀向山遺跡出土の炭化材の樹種。『千葉県松戸市殿平賀向山遺跡』、p.110～111、松戸市遺跡調査会
- 千野裕道（1991）「縄文時代に二次林はあったかー遺跡出土の植物性遺物からの検討ー」。『東京都埋蔵文化財センター研究論集』X、p.215～249。

第5章 まとめ

1. 縄文時代

今回の調査で出土した縄文時代の遺物はきわめて少なく、遺構についてはまったく検出されなかった。出土した遺物は土器片と石器が少量である。台地上での縄文時代の活動の希薄さを示していると言えよう。土器は早期および前期に限られ、三戸式から田戸下層式に属するものが最も多かった。胎土に繊維を混入するものが1点あったが、他は繊維を含まず、やや大粒の砂粒を混入するものが多い。表面の調整は行われるものの、砂粒が移動した痕跡をとどめるものもある。前期の土器は諸磯b式が主体と思われるが、出土量はわずかであった。

2. 古墳時代以降

竪穴建物跡の時期

今回の調査によって検出された竪穴建物跡は11棟である。各竪穴の時期は、伴出した土器からおおよそ以下のように分けられる。

7世紀前半……………012号跡

7世紀後半……………なし

8世紀前半……………なし

8世紀後半……………006号跡、010号跡

9世紀前半……………022号跡、026号跡

9世紀後半……………021号跡、023号跡、024号跡、025号跡

10世紀前半……………011号跡

10世紀後半……………020号跡、(012号跡)

古墳時代後期の竪穴建物跡は012号跡のみである。時期は7世紀初めと考えられる。012号跡は別の竪穴建物跡と一部が重複していたらしいが、調査段階で未検出のため遺構の詳細は不明である。出土した土器から10世紀後半の竪穴建物跡と重複していたのではないかとと思われる。

残る10棟の竪穴建物跡の時期は8世紀後半以降で奈良・平安時代に属する。8世紀後半に属すると考えられるのが006号跡と010号跡である。010号跡については土器量が少ないため、おおよそ当該時期に含まれるものと考えられる。9世紀前半に属すると考えられるのが022号跡、026号跡であるが、2棟ともに8世紀第4四半世紀から9世紀第1四半世紀が妥当であろうか。9世紀後半に属すると考えられるのが021号跡、023号跡、024号跡、025号跡である。021号跡、024号跡、025号跡は9世紀第3四半世紀あたりに位置づけられようか。023号跡は口径15cmを上回

る坏ないしは鉢があり、墨書を伴う高台坏も出土している。9世紀末に位置づけられようか。10世紀前半に属すると考えられるのが011号跡である。坏でほぼ形態を知り得るものが18個体出土している。カマド内出土の坏から判断すれば10世紀前半が妥当であろう。10世紀後半に属すると考えられるのが020号跡である。カマド内出土の坏から10世紀中葉が妥当かもしれない。

以上が検出された竪穴建物跡の時期である。調査面積が限られていることから集落の時期的な展開については十分な検討はできないものの、今回調査の対象となった地区については8世紀後半から9世紀後半にかけての竪穴建物跡が主体的であると考えられる。

岩井安町遺跡における集落の展開

今回の調査によって判明した竪穴建物跡は、遺跡の集落全体から考えればほんの一部にすぎない。平成3年に行われた調査区南西側隣接地の公園造成に先立つ発掘調査では、弥生時代後期5棟、古墳時代28棟、奈良・平安時代17棟の合計50棟の竪穴建物跡が検出されており、今回の調査区だけに遺構が集中しているわけではないことを示している。逆に台地上の南側に広く集落が展開する可能性が高く、特に隣接する岩井安町古墳群との関連で、ある程度規模の大きな古墳時代の集落が存在するのではないかと考えられる。地形的には九十九里平野の低地と利根川からの支谷に挟まれたかなり広い台地の一部に遺跡が位置しており、どのような広さで集落が展開しているのかはいまのところははっきりしない。また、今回の調査では弥生時代の遺構・遺物がまったく検出されていないことから、弥生時代の集落は台地の南側を主体として展開するものと思われる。

墨書土器について

竪穴建物跡から11点、遺構外から1点の合計12点の墨書土器が出土している。竪穴建物跡からの内容は011号跡から2点、012号跡から1点、020号跡から4点、021号跡から2点、023号跡から1点、026号跡から1点である。墨書のある土器は、坏ないしは高台付坏に限られる。墨書の位置は、内面の底部が1点、坏外面が8点、外面底部が3点である。字体が判読できるものは011号跡の「足」?・「林」、020号跡の「井」、023号跡の「女」、026号跡の「黒万呂私」の計5点である。墨書の時期であるが、判読できるもののうち最も古いのは026号跡から出土した墨書であろう。8世紀末～9世紀初めにあたるとと思われる。他の墨書は9世紀後半以降と考えられる。

炭化材検出遺構について

011号跡は焼土と炭化材が検出されたのみならず、他の竪穴建物跡とは遺構の形態がやや異なっている。本来の竪穴部分のほかにテラス状の段があり、検出面からその段の肩の部分、さら

にその段から竪穴に落ち込む肩の部分に粘土が貼りつけられていた。この粘土の存在がどのような意味を持つのかは不明であるが、テラス状に張り出した部分は、一般的に考えられている竪穴部分だけの居住空間のみならず、竪穴周囲の部分をも居住空間として伴っている可能性を示しているのではなかろうか。

ところで011号跡で検出された焼土と炭化材であるが、多量に検出された点からすれば、焼失によると断定することができるが、意図的な焼却なのか不慮の出火によるものかは断定できない。遺物の出土状況は他の竪穴建物跡に比べ多いといえ、図示した29個体の土器のうち12個体がカマド内から出土している。覆土内よりもカマドからの点数の方が多い。特に坏がカマド内から9個体も出土していることは、不慮の出火が原因とすれば、使用途中のカマドにこれだけの坏が混入するのは一般的には考えにくい。このことから建物の焼却が何らかの意図をもって行われた可能性が高いといえる。炭化した柱材が検出されたことは、当然のことながら主柱があった状態で焼却されたと考えられるが、上屋があった状態で焼却されたのか、あるいはある程度の解体が行われた後で焼却されたのかは不明である。カマド内からの坏の出土量が多いからすれば、竪穴の廃棄に伴っていわゆるカマド祭祀などの特殊な行為が行われた後に焼却された可能性も考えられる。

参考文献

- 石橋宏克「三戸式土器について」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書—大栄地区(2)—』1987年 千葉県文化財センター
- 平川 南「墨書土器とその字形」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集 1991年 (財)東総文化財センター「遺跡発表会資料」 1993年
- 史館同人「房総における奈良・平安時代の土器」シンポジウム資料 1983年
- 房総歴史考古学研究会「房総における歴史時代土器の研究」 1987年
- 笹生 衛「房総における中世的土器様相の成立過程」『史館』第21号 1989年

第2表 006号跡出土土器観察表

挿図番号	個体番号	種別	器種	遺存度	法量(cm)	調整	色調	胎土	備考
第12図	1	須恵器	坏	2/4	口径 14.0 底径 8.1 器高 4.5	底部 ヘラケズリ、ロクロ整形	青灰色	やや砂多い	
	2	須恵器	坏	2/4	口径 13.7 底径 8.1 器高 4.1	底部 回転ヘラケリ、ロクロ整形	灰色	小石少量	
	3	須恵器	坏	3/4	口径 10.7 底径 7.7 器高 3.9	底部 ヘラケズリ、ロクロ整形	暗灰色	小石少量	
	4	須恵器	坏	1/4	口径 12.0 底径 7.3 器高 3.6	底部 ヘラケズリ、ロクロ整形	青灰色	小石・雲母少量	
	5	土師器	坏	1/4	口径 16.2 底径 12.0 器高 2.2	底部 ヘラケズリ 内面 ミガキ	赤褐色	良好	
	6	土師器	坏	1/4	口径 底径 器高	底部 ヘラケズリ 内面 ミガキ	赤褐色	良好	
	7	土師器	甕	1/4以下	口径 27.0 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	砂多い	
	8	土師器	甕	1/4以下	口径 22.2 底径 器高	口縁部 ヨコナデ	茶褐色	やや砂多い	
	9	土師器	甕	1/4以下	口径 27.2 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	砂多い	
	10	土師器	甕	1/4以下	口径 22.6 底径 器高	口縁部 ヨコナデ	淡褐色	やや砂多い	
	11	土師器	甕	1/4以下	口径 底径 8.8 器高	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	暗褐色	良好	
	12	土師器	甕	1/4以下	口径 底径 8.0 器高	底部 ナデ 体部 ナデ? 内面 ナデ	暗褐色	やや砂多い	
	13	土師器	甗	1/4以下	口径 底径 9.0 器高	ヘラケズリ	赤褐色	やや砂多い	一部カマド内出土

第3表 007号跡出土土器観察表

挿図番号	個体番号	種別	器種	遺存度	法量(cm)	調整	色調	胎土	備考
第37図	1	土師器	高台付坏	2/4	口径 15.8 底径 9.6 器高 7.5	底部 ナデ、ロクロ整形 内面 丁寧なミガキ	赤褐色	やや砂多い	内黒、高台付

第4表 010号跡出土土器観察表

挿図番号	個体番号	種別	器種	遺存度	法量(cm)	調整	色調	胎土	備考
第13図	1	土師器	坏	1/4以下	口径 底径 器高	ロクロ整形	淡褐色	良好	
	2	土師器	甕	1/4以下	口径 15.0 底径 器高	体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	暗褐色	砂多い	
	3	土師器	甕	1/4以下	口径 26.0 底径 器高	体部 ナデ 内面 ナデ	淡褐色	砂多い	
	4	土師器	甗	1/4以下	口径 底径 器高	ヘラケズリ	淡褐色	砂多い	

第5表 011号跡出土土器観察表

挿図番号	個体番号	種別	器種	遺存度	法量(cm)	調整	色調	胎土	備考
第15図	1	須恵器	坏	1/4	口径 14.2 底径 7.2 器高 4.0	ロクロ整形 底部 ヘラケズリ	青灰色	小石・雲母少量	
	2	土師器	坏	完形	口径 13.0 底径 6.3 器高 4.1	ロクロ整形 底部 ヘラケズリ 内面 ミガキ	明褐色	良好	ゆがみ有り

	3	土師器	坏	2/4	口径 底径 器高	13.6 6.6 4.2	ロクロ整形 底部 回転ヘラキリ 内面 ミガキ	暗褐色	良好	カマド内出土
	4	土師器	坏	2/4	口径 底径 器高	12.8 6.2 4.3	ロクロ整形 底部 回転糸キリ	赤褐色	良好	被熱により内外面 剥落 カマド内出土
	5	土師器	坏	完形	口径 底径 器高	13.0 6.2 4.4	ロクロ整形 底部 回転糸キリ	赤褐色	良好	被熱により内外面 剥落 カマド内出土
	6	土師器	坏	完形	口径 底径 器高	12.8 5.1 4.5	ロクロ整形 底部 回転糸キリ	暗褐色	小石微量	カマド内出土
	7	土師器	坏	3/4	口径 底径 器高	13.4 5.8 4.6	ロクロ整形 底部 回転糸キリ	明褐色	良好	器面磨耗
	8	土師器	坏	2/4	口径 底径 器高	13.1 5.7 4.8	ロクロ整形 底部 回転糸キリ	明褐色	良好	ゆがみ有り
	9	土師器	坏	2/4	口径 底径 器高	12.7 5.0 4.8	ロクロ整形 底部 回転糸キリ	暗褐色	やや砂多い	
	10	土師器	坏	1/4	口径 底径 器高	14.2 7.8 3.5	ロクロ整形 底部 ヘラケズリ	暗褐色	良好	
	11	土師器	坏	完形	口径 底径 器高	13.4 5.8 4.2	ロクロ整形 底部 ヘラケズリ 内面 ミガキ	淡褐色	雲母少量	内黒 カマド内出土
	12	土師器	坏	1/4 以下	口径 底径 器高	14.6 6.0 4.5	ロクロ整形 底部 回転糸キリ後ヘラケズリ 内面 ミガキ	暗褐色	良好	内黒 カマド内出土
	13	土師器	坏	3/4	口径 底径 器高	13.0 6.2 4.4	底部 ヘラケズリ 内面 ミガキ	明褐色	良好	内黒 内面やや剥落
	14	土師器	坏	1/4	口径 底径 器高	13.6 _____	ロクロ整形 内面 ミガキ	淡褐色	良好	内黒
	15	土師器	坏	1/4 以下	口径 底径 器高	14.0 _____	ロクロ整形 内面 ミガキ	赤褐色	良好	内外面剥落 カマド内出土
	16	土師器	坏	1/4 以下	口径 底径 器高	13.0 _____	ロクロ整形	赤褐色	良好	
	17	土師器	坏	1/4 以下	口径 底径 器高	7.6 _____	ロクロ整形 底部 回転糸キリ	淡褐色	良好	
	18	土師器	坏	1/4 以下	口径 底径 器高	5.0 _____	ロクロ整形 底部 回転糸キリ	淡褐色	良好	
	19	土師器	坏	1/4 以下	口径 底径 器高	6.0 _____	ロクロ整形	淡褐色	良好	
	20	土師器	坏	1/4 以下	口径 底径 器高	6.6 _____	ロクロ整形 底部 回転ヘラキリ	赤褐色	良好	被熱 カマド内出土
	21	土師器	坏	底部	口径 底径 器高	_____	ロクロ整形 底部 回転糸キリ後高台はりつけ	淡褐色	良好	内面墨書
	22	土師器	坏	口縁部	口径 底径 器高	_____	ロクロ整形	暗褐色	良好	外面墨書 カマド内出土
第16図	23	土師器	甕	2/4	口径 底径 器高	18.4 _____	体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	赤褐色	砂多い	一部カマド内出土
	24	土師器	甕	1/4	口径 底径 器高	20.4 _____	体部 ヘラケズリ 内面 横のナデ	暗褐色	砂多い	一部カマド内出土
	25	須恵器	甕	1/4 以下	口径 底径 器高	29.8 _____	体部 タクキ 内面 横のナデ、指のオサエ	淡褐色	良好	
	26	土師器	甕	1/4 以下	口径 底径 器高	18.4 _____	体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	暗褐色	砂多い	カマド内出土
	27	須恵器	甕	1/4 以下	口径 底径 器高	30.8 _____	口縁部 ヨコナデ 体部 タクキ	淡褐色	砂多い	カマド内出土
	28	土師器	甕?	1/4 以下	口径 底径 器高	_____	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	褐色	やや砂多い	

29	土師器	甕	1/4 以下	口径 底径 器高	7.2	体部 内面	ヘラケズリ ナデ	赤褐色	砂多い	
----	-----	---	-----------	----------------	-----	----------	-------------	-----	-----	--

第6表 012号跡出土土器観察表

挿図番号	個体 番号	種 別	器種	遺存度	法 量(cm)	調 整	色 調	胎 土	備 考
第17図	1	土師器	坏	2/4	口径 13.4 底径 器高 4.0	口縁部 ヨコナデ 底部 ヘラケズリ 内面 ナデ?	淡褐色	良好	カマド内出土
	2	土師器	坏	2/4	口径 12.4 底径 器高 3.7	口縁部 ヨコナデ 底部 ヘラケズリ 内面 ミガキ	赤褐色	良好	内面剥落
	3	土師器	坏	3/4	口径 12.8 底径 器高 4.4	口縁部 ヨコナデ 底部 ヘラケズリ 内面 ミガキ	黒褐色	良好	内外面黒色 内面剥落
	4	土師器	坏	1/4	口径 13.0 底径 器高 3.6	口縁部 ヨコナデ 底部 ヘラケズリ 内面 ミガキ	黒褐色	良好	
	5	土師器	坏	1/4	口径 12.3 底径 器高 4.1	口縁部 ヨコナデ 底部 ヘラケズリ 内面 ミガキ	黒褐色	良好	
	6	土師器	坏	2/4	口径 14.0 底径 器高 3.9	口縁部 ヨコナデ 底部 ヘラケズリ 内面 ミガキ	黒褐色	良好	内黒
	7	土師器	坏	1/4 以下	口径 15.0 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 底部 ヘラケズリ 内面 ナデ?	褐色	良好	
	8	土師器	坏	1/4 以下	口径 13.4 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 底部 ヘラケズリ 内面 ミガキ	褐色	良好	
	9	土師器	坏	1/4	口径 13.4 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 底部 ヘラケズリ 内面 ミガキ	黒褐色	良好	内外面黒色 一部カマド内出土
第18図	10	土師器	坏	1/4 以下	口径 11.8 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 底部 ヘラケズリ 内面 ミガキ	黒褐色	良好	内外面黒色
	11	土師器	甕	1/4 以下	口径 底径 器高 7.0	体部 内面 ナデ	暗褐色	砂多い	
	12	土師器	甕	2/4	口径 31.0 底径 10.2 器高 32.3	体部 下半ヘラミガキ	淡褐色	砂多い	一部カマド内出土
	13	土師器	手捏	1/4	口径 底径 器高	底部 ヘラケズリ			
	14	土師器	手捏	1/4	口径 底径 器高	底部 ヘラケズリ			内外面黒色処理
	15	土師器	坏	3/4	口径 13.2 底径 5.2 器高 4.3	ロクロ整形 底部 回転糸きり	褐色	砂多い	外面墨書
	16	土師器	坏	3/4	口径 12.6 底径 6.8 器高 4.1	ロクロ整形 底部 回転糸きり	淡褐色	砂多い	外面剥落
	17	土師器	坏	2/4	口径 12.6 底径 6.8 器高 4.3	ロクロ整形 底部 ヘラケズリ	暗褐色	やや砂多い	
	18	土師器	坏	1/4 以下	口径 底径 器高 5.2	ロクロ整形 底部 回転糸キリ	褐色	良好	
	19	土師器	坏	1/4	口径 13.4 底径 8.8 器高 3.7	ロクロ整形 底部 ヘラケズリ	赤褐色	良好	
	20	土師器	甕	1/4 以下	口径 底径 器高 15.8	体部 内面 ナデ	茶褐色	やや砂多い	カマド内出土
	21	土師器	甕	1/4 以下	口径 底径 器高 12.4	体部 内面 ヘラケズリ後ナデ	褐色	砂多い	内外面磨耗
	22	灰釉	高台付 坏	1/4 以下	口径 底径 器高 7.6	底部 回転ヘラキリ後高台はりつけ	青灰色	石英粒微量	
	23	須恵器	甕	1/4	口径 底径 器高	体部 内面 タタキ タタキ	青灰色	石英粒微量	

第7表 020号跡出土土器観察表

挿図番号	個体番号	種別	器種	遺存度	法量(cm)	調整	色調	胎土	備考
第20図	1	土師器	坏	完形	口径 13.4 底径 5.7 器高 4.5	ロクロ整形 底部 回転糸キリ	暗褐色	やや砂多い	カマド内出土
	2	土師器	坏	完形	口径 13.6 底径 6.3 器高 4.0	ロクロ整形 底部 回転糸キリ	淡褐色	良好	カマド内出土
	3	土師器	坏	1/4以下	口径 _____ 底径 _____ 器高 6.5	ロクロ整形 底部 回転糸キリ	赤褐色	良好	被熱 一部カマド内出土
	4	土師器	坏	1/4	口径 13.0 底径 6.2 器高 4.6	ロクロ整形 底部 回転糸キリ	淡褐色	砂多い	
	5	土師器	坏	1/4以下	口径 14.8 底径 _____ 器高 _____	ロクロ整形	暗褐色	良好	ゆがみ有り
	6	土師器	坏	1/4以下	口径 12.4 底径 _____ 器高 _____	ロクロ整形	暗褐色	良好	ゆがみ有り
	7	土師器	坏	3/4	口径 14.2 底径 6.2 器高 4.3	ロクロ整形 底部 ヘラケズリ 内面 ミガキ	暗褐色	雲母微量	カマド内出土
	8	土師器	坏	2/4	口径 13.4 底径 5.7 器高 4.1	ロクロ整形 底部 回転糸キリ	明褐色	良好	一部カマド内出土
	9	土師器	皿	1/4以下	口径 14.6 底径 _____ 器高 _____	ロクロ整形	淡褐色	良好	高台つくか? カマド内出土
	10	土師器	坏	口縁部	口径 _____ 底径 _____ 器高 _____	ロクロ整形	淡褐色	良好	外面墨書
	11	土師器	坏	底部	口径 _____ 底径 _____ 器高 _____	底部 回転糸キリ	淡褐色	良好	底部墨書
	12	土師器	坏	口縁部	口径 _____ 底径 _____ 器高 _____	ロクロ整形	淡褐色	良好	外面墨書
	13	土師器	坏	口縁部	口径 _____ 底径 _____ 器高 _____	ロクロ整形	淡褐色	良好	外面墨書
	14	土師器	甕	1/4以下	口径 _____ 底径 _____ 器高 8.8		淡褐色	砂多い	底部木の葉痕
第21図	15	須恵器	甕	1/4以下	口径 25.8 底径 _____ 器高 _____	体部 タタキ 内面 タタキ	青灰色	良好	胴部上位に自然釉
	16	土師器	甕	3/4	口径 16.6 底径 8.4 器高 (28.3)	口縁部 ヨコナデ、底部 ヘラケズリ、 体部ヘラケズリ 内面 棒状工具のナデ	淡褐色	良好	一部カマド内出土
	17	土師器	甕	3/4	口径 18.2 底径 _____ 器高 _____	体部 ヘラケズリ 内面 上位横のナデ、下位縦のナデ	暗褐色	雲母微量	一部カマド内出土
	18	土師器	甕	1/4	口径 13.6 底径 _____ 器高 _____	体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	茶褐色	砂多い	
	19	土師器	甕	1/4	口径 _____ 底径 _____ 器高 _____	体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	暗褐色	やや砂多い	一部カマド内出土
第22図	20	土師器	甕	1/4	口径 15.0 底径 _____ 器高 _____	体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	黒褐色	砂多い	
	21	土師器	甕	1/4	口径 18.4 底径 _____ 器高 _____	体部 ヘラケズリ 内面 横のナデ	褐色	やや砂多い	ゆがみ有り カマド内出土
	22	土師器	甕	1/4以下	口径 14.8 底径 _____ 器高 _____	体部 ヘラケズリ 内面 横のナデ	暗褐色	砂多い	
	23	土師器	甕	1/4以下	口径 20.2 底径 _____ 器高 _____	口縁部 ヨコナデ	暗褐色	やや砂多い	一部カマド内出土

第8表 021号跡出土土器観察表

挿図番号	個体番号	種別	器種	遺存度	法量(cm)	調整	色調	胎土	備考
第23図	1	須恵器	壺?	1/4以下	口径 底径 器高	ロクロ整形	灰白色	良好	肩部に自然釉
	2	土師器	坏	1/4	口径 10.2 底径 器高	ロクロ整形	淡褐色	良好	
	3	土師器	坏	3/4	口径 12.3 底径 5.2 器高 4.1	ロクロ整形 底部 回転糸切り後ヘラ削り	褐色	良好	
	4	土師器	坏	3/4	口径 12.0 底径 6.2 器高 4.2	ロクロ整形 底部 ヘラ削り	淡褐色	良好	内面の底に墨痕 一部カマド内出土
	5	土師器	坏	1/4以下	口径 底径 器高 8.4	底部 ヘラ削り、 体部 ナデ 内面 丁寧なミガキ	黒褐色	良好	内黒
	6	土師器	坏	1/4以下	口径 底径 器高 6.4	ロクロ整形 底部 ヘラ削り	淡褐色	良好	
	7	土師器	坏	体部	口径 底径 器高	ロクロ整形	褐色	良好	外面墨書
	8	土師器	坏	口縁部	口径 底径 器高	ロクロ整形	褐色	良好	外面墨書
	9	土師器	甕	1/4	口径 21.2 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 胴部 ヘラケズリ 内面 ナデ	赤褐色	やや砂多い	カマド内出土
	10	土師器	甕	1/4以下	口径 18.4 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	暗褐色	良好	一部カマド内出土
	11	土師器	甕	1/4	口径 20.2 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	茶褐色	砂多い 雲母少量	一部カマド内出土
第24図	12	土師器	甕	1/4以下	口径 16.8 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	茶褐色	やや砂多い	
	13	土師器	甕	1/4以下	口径 15.0 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	暗褐色	良好	
	14	土師器	甕	1/4以下	口径 19.6 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	暗褐色	砂多い	
	15	土師器	甕	1/4以下	口径 12.2 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	赤褐色	砂多い	
	16	土師器	甕	1/4以下	口径 11.0 底径 器高	底部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	淡褐色	良好	一部カマド内出土
	17	土師器	甕	1/4以下	口径 5.2 底径 器高	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	暗褐色	良好	
	18	土師器	甕	1/4以下	口径 6.8 底径 器高	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	茶褐色	砂多い	

第9表 022号跡出土土器観察表

挿図番号	個体番号	種別	器種	遺存度	法量(cm)	調整	色調	胎土	備考
第25図	1	土師器	坏	1/4	口径 14.2 底径 9.8 器高 5.2	ロクロ整形 底部 回転糸キリ後ヘラケズリ	淡褐色	良好	内面剝落
	2	土師器	甕	1/4以下	口径 14.4 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	茶褐色	良好	
	3	土師器	甕	1/4	口径 14.8 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	暗褐色	良好	
	4	土師器	甕	1/4以下	口径 21.0 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	砂多い	
	5	土師器	甕	1/4以下	口径 20.6 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	褐色	やや砂多い	

	6	土師器	甕	2/4	口径 13.2 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	茶褐色	良好	
--	---	-----	---	-----	---------------------	-------------------------------	-----	----	--

第10表 023号跡出土土器観察表

挿図番号	個体番号	種別	器種	遺存度	法量(cm)	調整	色調	胎土	備考
第27図	1	須恵器	坏	1/4以下	口径 13.4 底径 器高	ロクロ整形	青灰色	良好	
	2	須恵器	坏	3/4	口径 14.6 底径 7.6 器高 4.7	ロクロ整形 底部 回転ヘラケリ	暗褐色	砂多い	内面剥落
	3	土師器	坏	1/4	口径 18.8 底径 器高	ロクロ整形 内面 ミガキ	淡褐色	良好	
	4	土師器	鉢	1/4	口径 20.8 底径 10.2 器高 5.7	ロクロ整形 底部 ヘラケズリ 内面 ミガキ	褐色	良好	内面剥落
	5	土師器	坏	2/4	口径 12.0 底径 4.4 器高 4.0	ロクロ整形 底部 回転系キリ	赤褐色	やや砂多い	内外面磨耗
	6	土師器	坏	2/4	口径 13.0 底径 6.0 器高 4.0	ロクロ整形 底部 回転系キリ	淡褐色	良好	
	7	土師器	高台付 坏	2/4	口径 15.8 底径 器高	ロクロ整形 底部 回転系キリ	淡褐色	良好	底部墨書
	8	須恵器	甕	1/4以下	口径 底径 器高	底部 ヘラケズリ	暗褐色	やや砂多い	
	9	土師器	甕	1/4以下	口径 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	黒褐色	砂多い	

第11表 024号跡出土土器観察表

挿図番号	個体番号	種別	器種	遺存度	法量(cm)	調整	色調	胎土	備考
第28図	1	須恵器	坏	1/4以下	口径 底径 器高 6.5	底部 ヘラケズリ	青灰色	雲母微量	
	2	土師器	坏	2/4	口径 12.3 底径 5.7 器高 4.3	ロクロ整形 底部 回転系キリ後ヘラケズリ	赤褐色	良好	一部カマド内出土
	3	土師器	坏	2/4	口径 12.6 底径 6.5 器高 4.2	ロクロ整形 底部 ヘラケズリ	淡褐色	砂多い	内外面磨耗
	4	土師器	坏	3/4	口径 11.6 底径 6.2 器高 3.5	ロクロ整形 底部 回転系キリ後ヘラケズリ	淡褐色	良好	一部カマド内出土
	5	土師器	坏	2/4	口径 15.8 底径 7.8 器高 5.6	ロクロ整形 底部 回転系キリ後ヘラケズリ 内面 ミガキ	暗褐色	良好	
	6	土師器	坏	1/4	口径 14.4 底径 器高	ロクロ整形 内面 ミガキ	黒褐色	良好	内黒
	7	土師器	坏	1/4以下	口径 13.6 底径 器高	ロクロ整形 内面 ミガキ	暗褐色	良好	内黒 カマド内出土
	8	土師器	坏	1/4	口径 12.4 底径 器高	ロクロ整形	淡褐色	良好	
	9	土師器	鉢	1/4	口径 26.6 底径 11.6 器高 8.5	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ 内面 ミガキ	暗褐色	良好	内黒
第29図	10	土師器	甕	2/4	口径 底径 器高 6.2	ロクロ整形 底部 回転系キリ後ヘラケズリ	暗褐色	良好	
	11	土師器	甕	1/4	口径 32.6 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ	赤褐色	良好	焼成後に穿孔3個 把手2単位
	12	土師器	甕	1/4	口径 18.2 底径 器高	体部 ナデ・オサエ 内面 ナデ	茶褐色	砂多い 雲母微量	

13	土師器	甕	1/4	口径 底径 器高	21.6 ———— ————	体部 ナデ・オサエ 内面 横のナデ	茶褐色	砂多い 雲母微量	一部カマド内出土
14	土師器	甕	1/4 以下	口径 底径 器高	21.4 ———— ————	体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	赤褐色	やや砂多い	
15	土師器	甕	1/4 以下	口径 底径 器高	15.4 ———— ————	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	赤褐色	やや砂多い	
16	土師器	甕	1/4 以下	口径 底径 器高	20.8 ———— ————	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	暗褐色	やや砂多い	
17	土師器	甕	1/4 以下	口径 底径 器高	21.0 ———— ————	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	淡褐色	良好	
18	土師器	甕	1/4	口径 底径 器高	———— ———— ————	体部 ナデ後ヘラミガキ 内面 ナデ	暗褐色	砂多い 雲母微量	
19	須恵器	甕	1/4 以下	口径 底径 器高	12.6 ———— ————	底部 ヘラケズリ 体部 タタキ、下位ヘラケズリ 内面 ナデ	青灰色	小石微量	
20	土師器	甕	1/4 以下	口径 底径 器高	———— ———— ————	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	淡褐色	やや砂多い	カマド内出土

第12表 025号跡出土土器観察表

挿図番号	個体番号	種別	器種	遺存度	法量(cm)	調整	色調	胎土	備考
第31図	1	須恵器	坏	1/4	口径 14.8 底径 7.3 器高 3.8	ロクロ整形 底部 回転ヘラキリ	青灰色	雲母微量	一部カマド内出土
	2	須恵器	坏	3/4	口径 12.8 底径 6.1 器高 4.5	ロクロ整形 底部 ヘラケズリ	青灰色	雲母微量	
	3	土師器	坏	2/4	口径 13.0 底径 7.4 器高 3.7	ロクロ整形 底部 回転糸キリ後ヘラケズリ	赤褐色	やや砂多い	一部カマド内出土
	4	土師器	坏	1/4 以下	口径 11.0 底径 器高	ロクロ整形 底部 ヘラケズリ	暗褐色	良好	
	5	土師器	甕	1/4 以下	口径 7.0 底径 器高	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	暗褐色	良好	カマド内出土
	6	土師器	甕	1/4 以下	口径 6.0 底径 器高	底部 ヘラケズリ 内面 ナデ	赤褐色	やや砂多い	
	7	土師器	甕	完形	口径 12.8 底径 6.2 器高 12.0	口縁部 ヨコナデ 底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ、内面 ナデ	茶褐色	やや砂多い	体部上位内外面剥落 カマド内出土
	8	土師器	甕	1/4	口径 15.2 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	暗褐色	良好	一部カマド内出土
	9	土師器	甕	1/4 以下	口径 12.4 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	暗褐色	良好	
第32図	10	土師器	甕	1/4	口径 12.2 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	暗褐色	やや砂多い	外面剥落 カマド内出土
	11	土師器	甕	1/4 以下	口径 14.6 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	暗褐色	良好	カマド内出土
	12	土師器	甕	1/4	口径 7.0 底径 器高	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	暗褐色	良好	一部カマド内出土
	13	土師器	甕	1/4 以下	口径 22.2 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 体部 ナデ 内面 ナデ	暗褐色	砂多い	一部カマド内出土
	14	土師器	甕	1/4	口径 14.6 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	暗褐色	良好	把手2単位? 一部カマド内出土
	15	土師器	甕?	1/4 以下	口径 18.2 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	暗褐色	良好	
	16	土師器	甕	1/4 以下	口径 底径 器高	口径 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 内面 横のナデ	暗褐色	良好

	17	土師器	甗	把手	口径 底径 器高	体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	暗褐色	良好	
	18	土師器	甗	把手	口径 底径 器高	体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	暗褐色	良好	

第13表 026号跡出土土器観察表

挿図番号	個体番号	種別	器種	遺存度	法量(cm)	調整	色調	胎土	備考
第33図	1	須恵器	甗	1/4以下	口径 底径 器高	ロクロ整形 底部 ヘラケズリ	青灰色	砂少量	
	2	土師器	坏	1/4以下	口径 底径 器高 7.0	ロクロ整形 底部 回転ヘラケリ	暗褐色	良好	
	3	土師器	坏	2/4	口径 11.8 底径 8.0 器高 4.3	ロクロ整形 底部 ヘラケズリ	赤褐色	良好	底部墨書
	4	土師器	坏	1/4	口径 底径 器高 7.2	ロクロ整形 底部 ナデ	暗褐色	良好	
	5	土師器	坏	1/4以下	口径 底径 器高 8.2	ロクロ整形 底部 回転糸切り後ヘラケズリ	赤褐色	良好	内外面赤彩
	6	土師器	甗	1/4以下	口径 15.0 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	暗褐色	良好	カマド内出土
	7	土師器	甗	1/4以下	口径 15.6 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ 内面 横のナデ	暗褐色	良好	
	8	土師器	甗	1/4以下	口径 19.2 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	淡褐色	やや砂多い	
	9	土師器	甗	1/4以下	口径 底径 器高 8.4	底部 ヘラケズリ 体部 ヘラケズリ 内面 ナデ	暗褐色	やや砂多い	内面剥落 一部カマド内出土
第34図	10	土師器	甗	1/4	口径 21.4 底径 器高	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラケズリ後ナデ 内面 ナデ	赤褐色	やや砂多い	一部カマド内出土
	11	土師器	甗	1/4以下	口径 底径 器高	体部 ミガキ 内面 ナデ	褐色	砂多い	
	12	土師器	甗	1/4以下	口径 底径 器高 8.8	体部 ヘラケズリ後ミガキ 内面 ナデ	暗褐色	やや砂多い	一部カマド内出土
	13	土師器	甗	1/4以下	口径 底径 器高 10.6	体部 ナデ? 内面 ナデ?	暗褐色	良好	一部カマド内出土
	14	土師器	甗	1/4以下	口径 底径 器高	内面 ナデ	暗褐色	良好	外面磨耗

第14表 遺構外出土土器観察表

挿図番号	個体番号	種別	器種	遺存度	法量(cm)	調整	色調	胎土	備考
第41図	1	土師器	坏	口縁部	口径 底径 器高	ロクロ整形	淡褐色	良好	外面墨書 C区出土

第15表 石器計測表

挿図番号	個体番号	遺物番号	器種	石質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	欠損の有無	備考
第12図	15	006号跡136	紡錘車	蛇紋岩	46.2	孔8.9	16.2	53.0	有	新しい傷多い
	16	006号跡136	磨石?	軽石	38.9	41.5	25.9	13.2	有	
第16図	30	011号跡68	磨石?	硬質砂岩	104.1	86.4	62.2	600.0	有	
第19図	26	012号跡1	浮子?	軽石	23.6	22.5	12.5	2.3	無	
第22図	39	020号跡173	砥石?	硬質砂岩	80.5	58.0	64.0	356.0	有	
第26図	8	022号跡92	紡錘車	蛇紋岩	40.4	孔8.1	15.7	20.7	有	
	9	022号跡53	磨石?	軽石	22.5	19.3	14.6	2.1	無	

	10	022号跡48	砥石?	硬質砂岩	79.0	57.0	35.5	223.0	有	
第30図	23	024号跡1		軽石	28.8	25.0	12.2	1.9	無	
	24	024号跡		軽石	36.1	17.7	17.8	3.5	有	
	25	024号跡1		軽石	16.0	16.6	13.0	0.9	無	
第32図	19	025号跡54		軽石	27.2	21.8	19.9	1.6	有	
第34図	15	026号跡1	砥石	凝灰岩	64.3	38.6	17.4	59.3	有	
第10図	1	006号跡128	石鏝	チャート	21.7	18.5	4.7	1.0	無	縄文時代
	2	D区-1	石鏝	安山岩	27.2	21.7	3.3	1.3	無	縄文時代
	3	022号跡1	石鏝	チャート	32.8	26.6	4.5	3.2	有	縄文時代
	4	011号跡63	磨製石斧	砂岩	26.0	32.6	16.3	10.7	有	縄文時代
	5	2B-41	凹石	礫岩	93.2	66.8	41.6	368.0	無	縄文時代
	6	4C-64	磨石	砂岩	63.8	42.9	17.8	53.6	有	縄文時代
第41図	1	3C-27	砥石	凝灰岩	85.2	38.1	17.0	84.2	有	
	2	1B-73	砥石	凝灰岩	43.8	36.7	25.4	72.1	有	
		4D-68	コア	黒曜石	41.9	24.6	14.2	12.3	無	
		D区-1	剝片	黒曜石	40.5	23.3	7.6	8.3	無	
		4C-64	剝片	チャート	49.6	24.4	13.3	15.4	無	
		2B-49.59	剝片	チャート	30.6	25.8	9.2	6.2	無	
		026号跡120	剝片	チャート	28.6	18.1	8.1	2.1	無	

第16表 土玉類・土製紡錘車計測表

挿 番 号	個 体 番 号	遺物番号	器 種	最大径 (mm)	最大厚 (mm)	孔 径 (mm)	重 量 (g)	欠損の有無
第19図	25	012号跡35	紡錘車		34.9		(53.3)	有
第22図	24	020号跡166	土玉	20.3	11.7	5.0	4.2	無
	25	020号跡164	土玉	19.6	11.0	5.5	3.4	無
	26	020号跡163	土玉	23.5	12.2	5.5	5.5	無
	27	020号跡214	土玉	22.9	11.7	5.0	4.8	無
	28	020号跡168	土玉	21.7	10.9	6.0	4.2	無
	29	020号跡170	土玉	24.1	13.2	7.8	(4.8)	有
	30	020号跡171	土玉	25.1	8.2	8.2	(4.8)	有
	31	020号跡167	土玉	21.1	10.3	5.1	3.2	無
	32	020号跡161	土玉	20.8	10.2	5.1	(3.2)	有
	33	020号跡165	土玉	22.1	11.9	5.1	(3.6)	無
	34	020号跡169	土玉	22.2	11.5	8.3	(3.7)	有
	35	020号跡162	土玉	21.5	10.0		(2.1)	有
	36	020号跡162	土玉				(1.2)	有
第26図	7	022号跡13	土玉	40.5	40.3		(38.4)	有

抄 録

ふりがな	うなかみまちいわいやすまちいせき
書名	海上町岩井安町遺跡
副書名	海上キャンプ場改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第247集
編著者名	宮城孝之
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809-2 Tel 043-422-8811
発行年月日	西暦 1994年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
岩井安町	千葉県海上郡 海上町岩井字安 町 1,000 ほか	12361	001	35度 45分 10秒	140度 41分 35秒	19920401 ～ 19920630	1,766㎡	改築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岩井安町	集落	旧石器	遺物集中1か所	剥片	竪穴内から完形の鉄製鋤先出土
		縄文		撚糸文・三戸～田戸式土器	
		古墳	竪穴建物 1棟	土師器・須恵器	竪穴内から炭化した柱材出土
		奈良平安	竪穴建物 10棟 土坑 1基	土師器・須恵器・墨書土器・ 線刻土器・鉄製刀子・鉄製 鋤先・鉄製鑿・臼状土玉・ 土製紡錘車・石製紡錘車・ 砥石・支脚	土師器坏に4字の墨書 土師器甕に線刻

写真図版



岩井安町遺跡



1. 調査区全景（南より）



2. 調査区全景（東より）



1. 調査区近景 (東より)



2. 調査区近景 (南より)



1. 確認調査



2. 確認調査



1. 第1ブロック遺物出土状況



2. A区調査状況



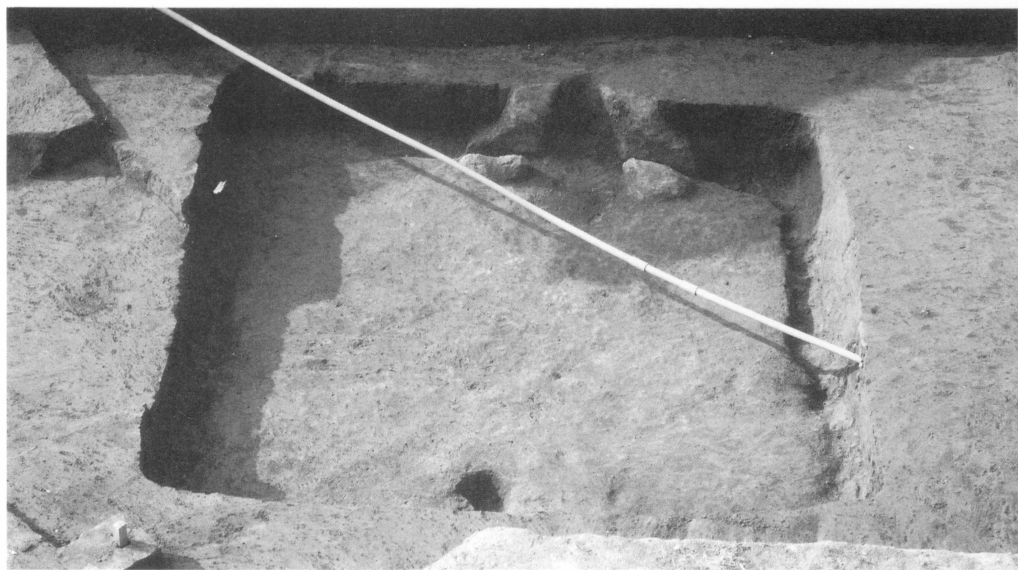
1. B区調査状況



2. C区調査状況



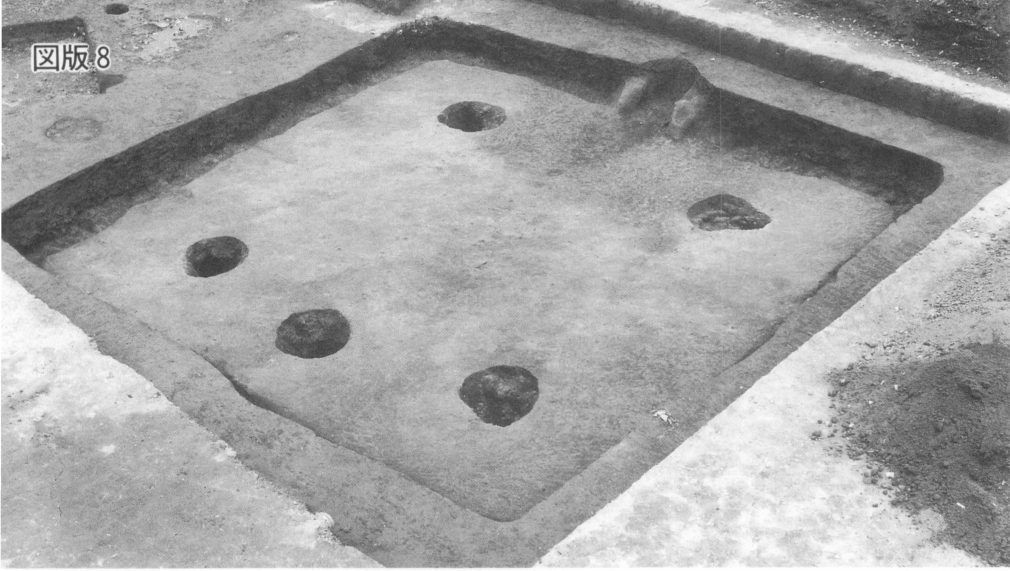
1. 006号跡



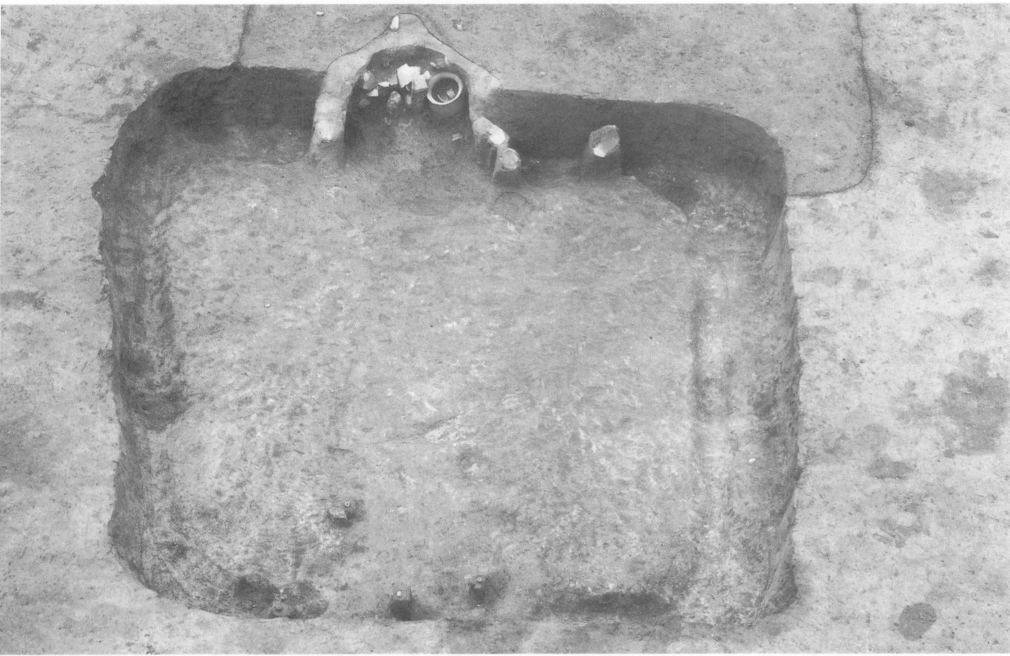
2. 010号跡



3. 011号跡



1. 012号迹



2. 020号迹



3. 021号迹



1. 022号跡



2. 023号跡



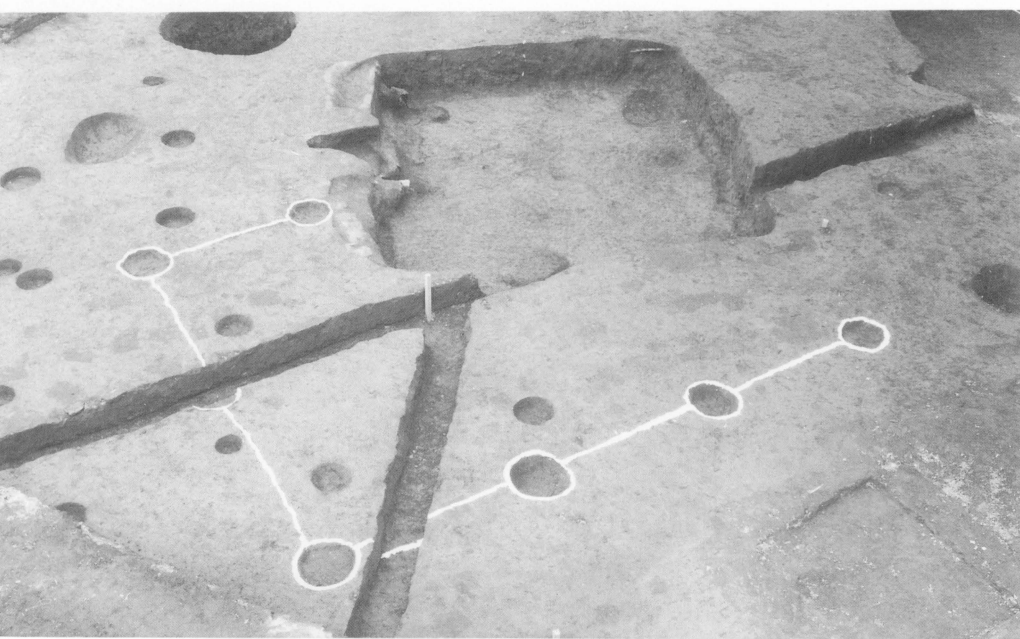
3. D区調査状況



1. 024号迹
025号迹



2. 026号迹

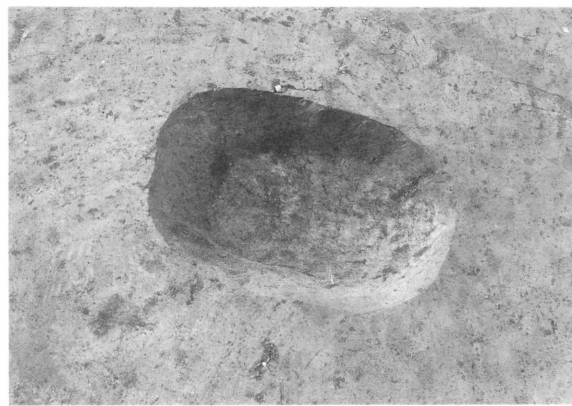


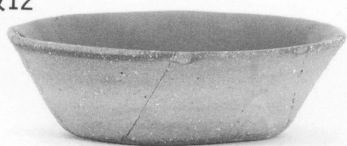
3. 013号迹



1. 018号迹

2. 004号迹	3. 005号迹
4. 007号迹	5. 008号迹
	6. 009号迹





006-1



006-3



006-2



006-13

1. 006号跡



011-1



011-6



011-2



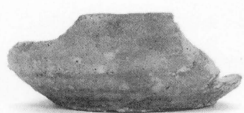
011-7



011-3



011-8



011-4



011-9



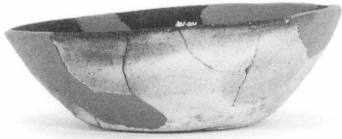
011-5



011-11 2. 011号跡



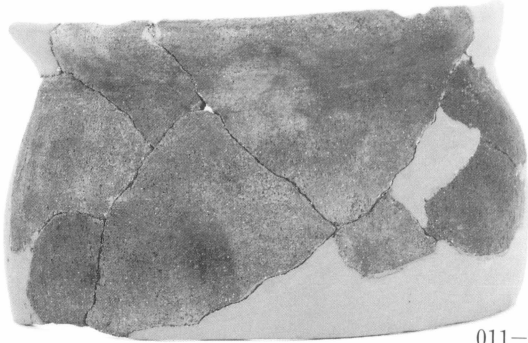
011-12



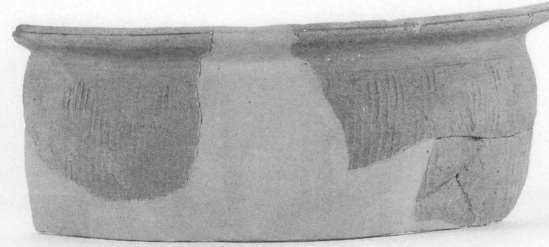
011-13



011-23



011-24



011-25

1. 011号跡



012-1



012-6



012-2



012-9



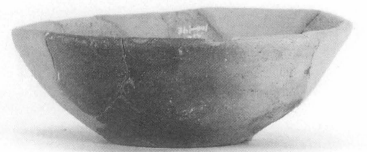
012-3



012-11



012-5



012-15

2. 012号跡



012-12



012-16

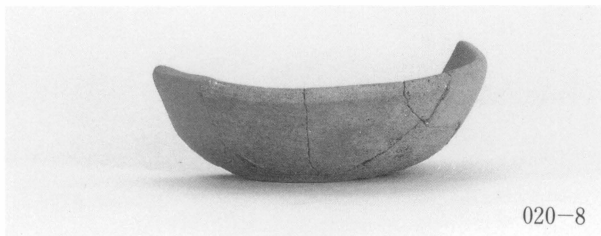


012-17

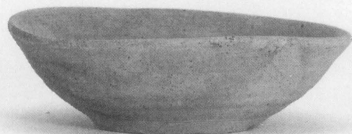
1. 012号迹



020-1



020-8



020-2

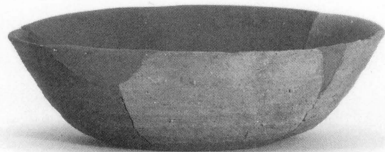


020-4



020-10

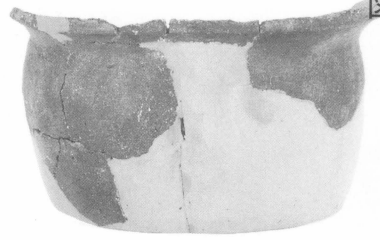
2. 020号迹



020-7



020-17



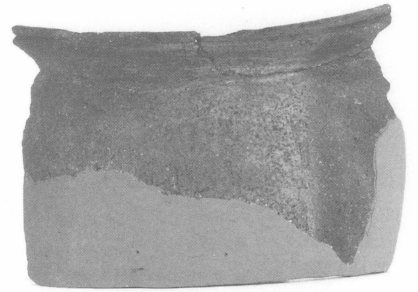
020-20



020-21

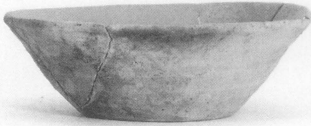


020-18

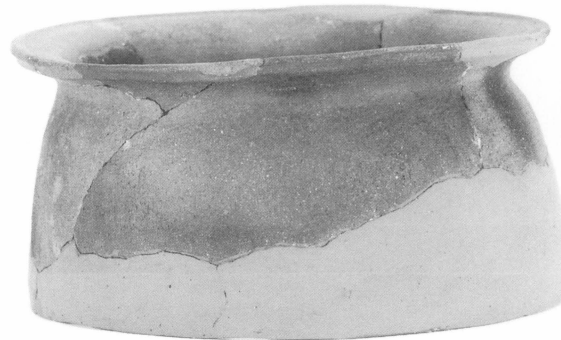


020-22

1. 020号跡



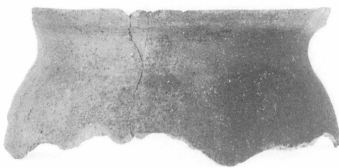
021-3



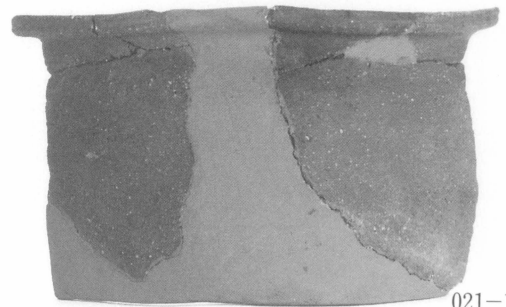
021-9



021-4

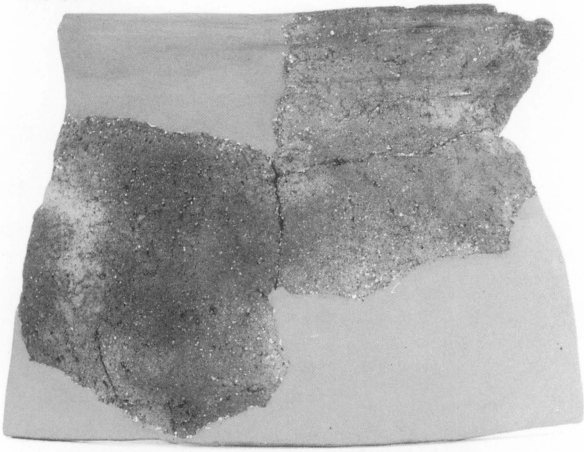


021-15



021-11

2. 021号跡



021-14



022-1



1. 021号迹

022-6



022-3

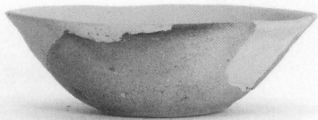
2. 022号迹



023-2



023-6



023-5



023-7 3. 023号迹



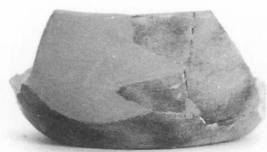
024-2



024-4



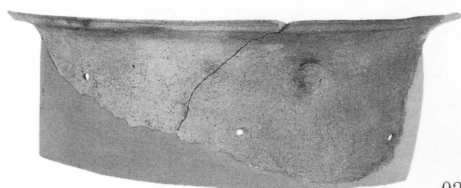
024-3



024-5 4. 024号迹



024-6



024-11



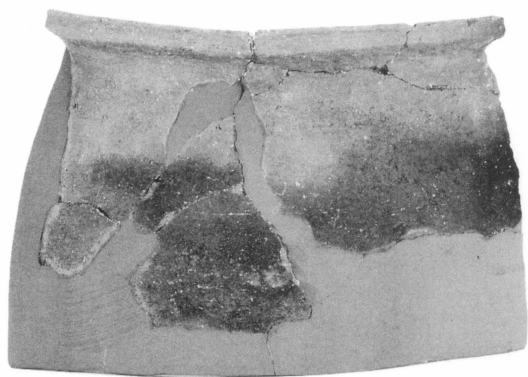
024-9



024-13



024-10



024-12

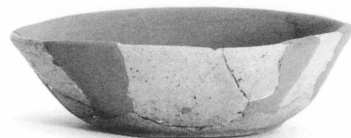


024-19

1. 024号迹



025-1



025-3



025-2

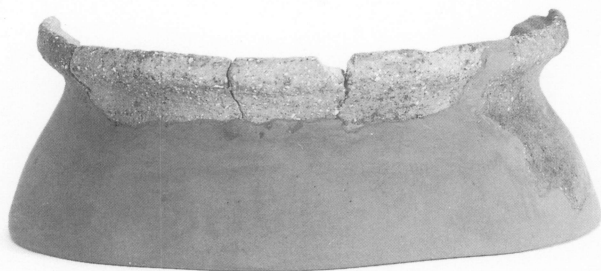


025-7

2. 025号迹



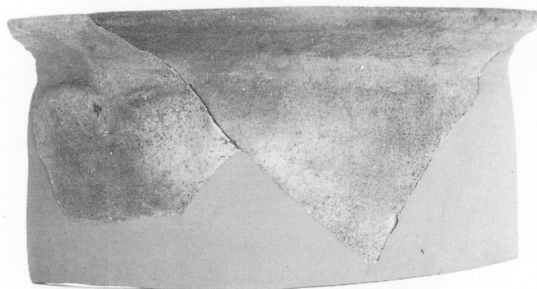
025-8



025-13



025-10



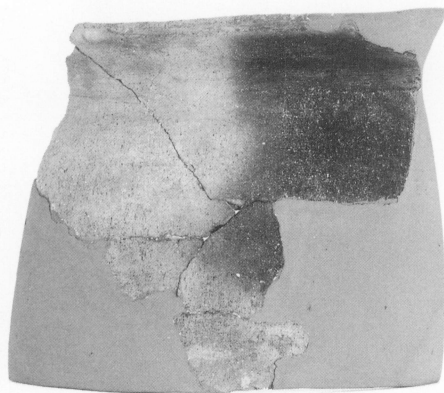
025-14 1. 025号迹



025-12



026-3



026-8



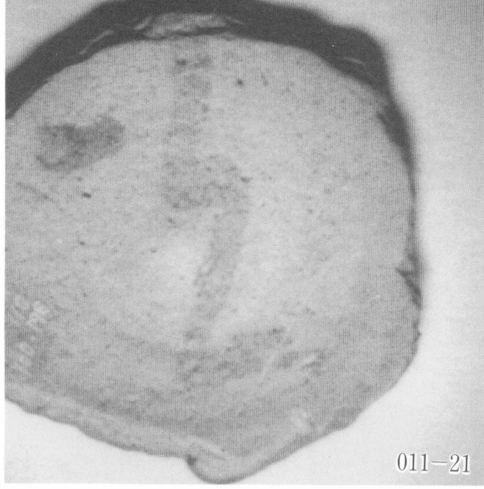
026-10 2. 026号迹



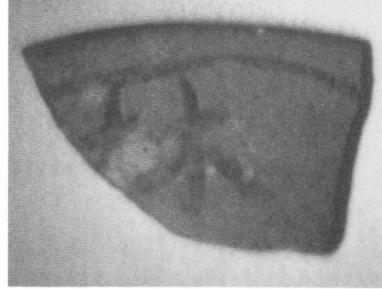
026-9



007-1 3. 007号迹



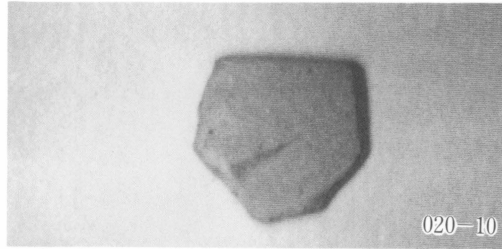
011-21



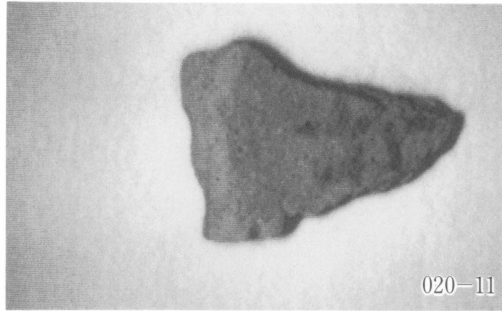
011-22



012-15



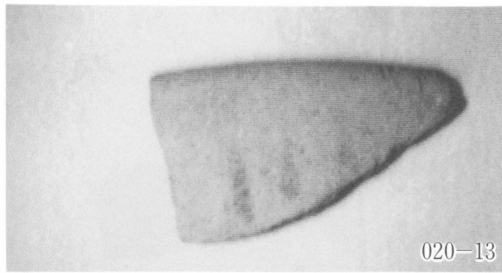
020-10



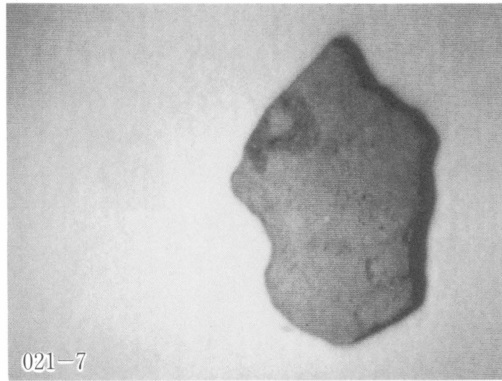
020-11



023-7



020-13

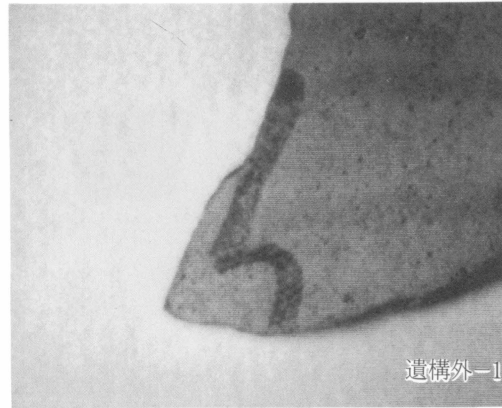


021-7

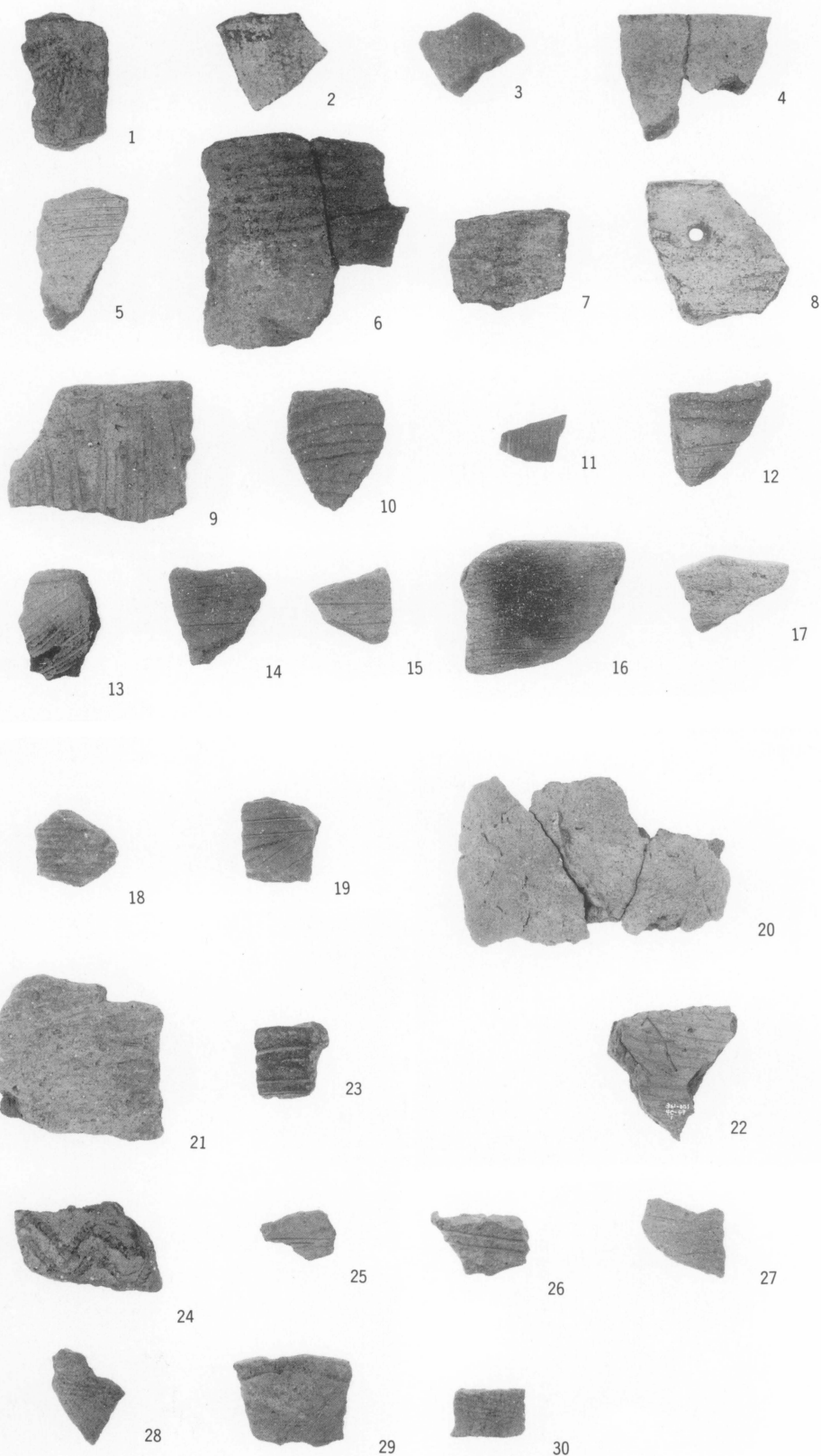


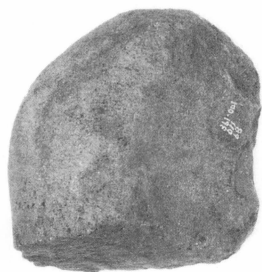
1. 墨書土器

026-3



遺構外-1





011-30



020-39



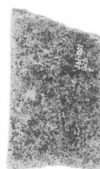
022-10



遺構外-5



遺構外-6



026-15



遺構外-7

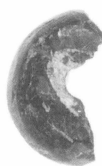


遺構外-8

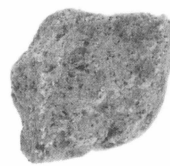
1. 磨石・凹石
砥石



006-15



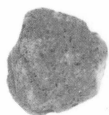
022-8



006-16



012-26



024-23



024-24



024-25



025-19



022-9

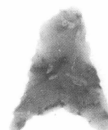
2. 紡錘車・軽石
石鏃・磨製石斧



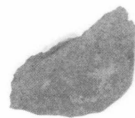
遺構外-1



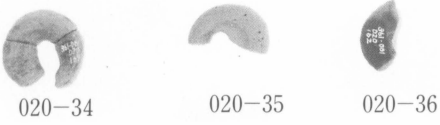
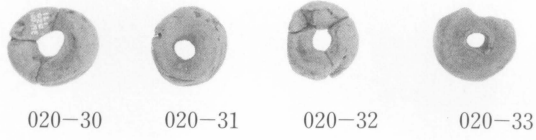
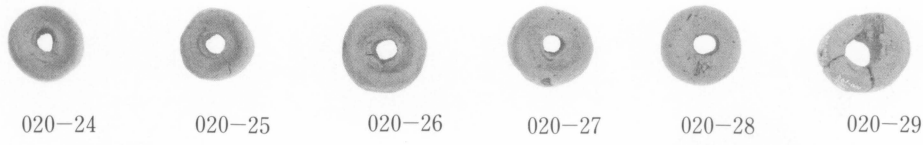
遺構外-2



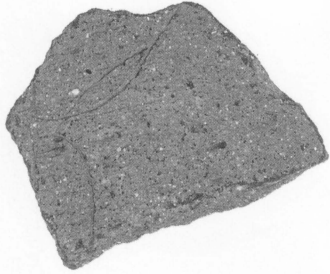
遺構外-3



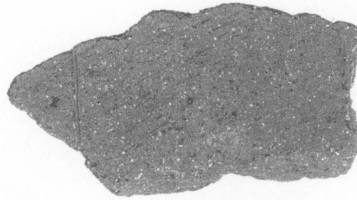
遺構外-4



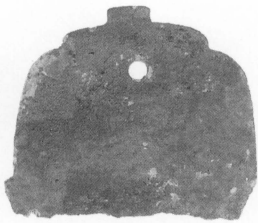
1. 土製品



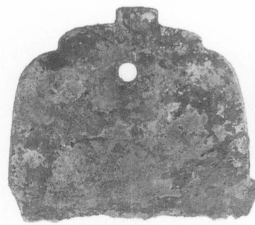
024-21



024-22 2. 線刻



遺構外-10表



遺構外-10裏 3. 銅製品



1



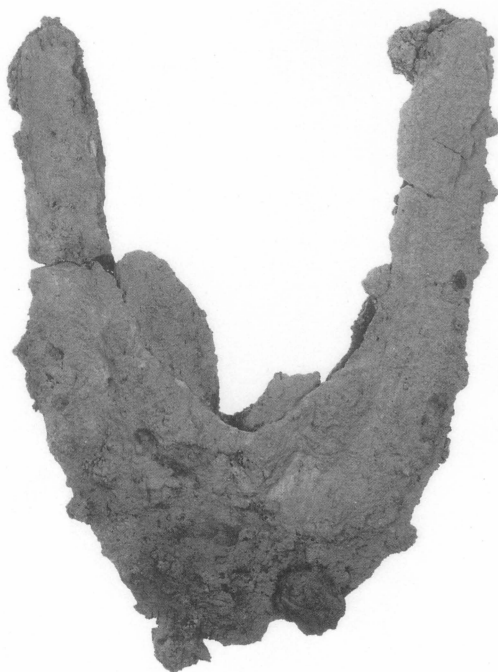
2



4. 旧石器時代石器



012-24



006-14



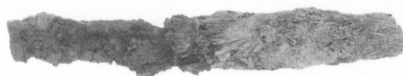
020-37

1. 支脚
鉄製鋤先

020-38



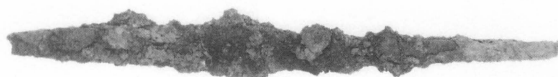
021-19



021-20



024-26



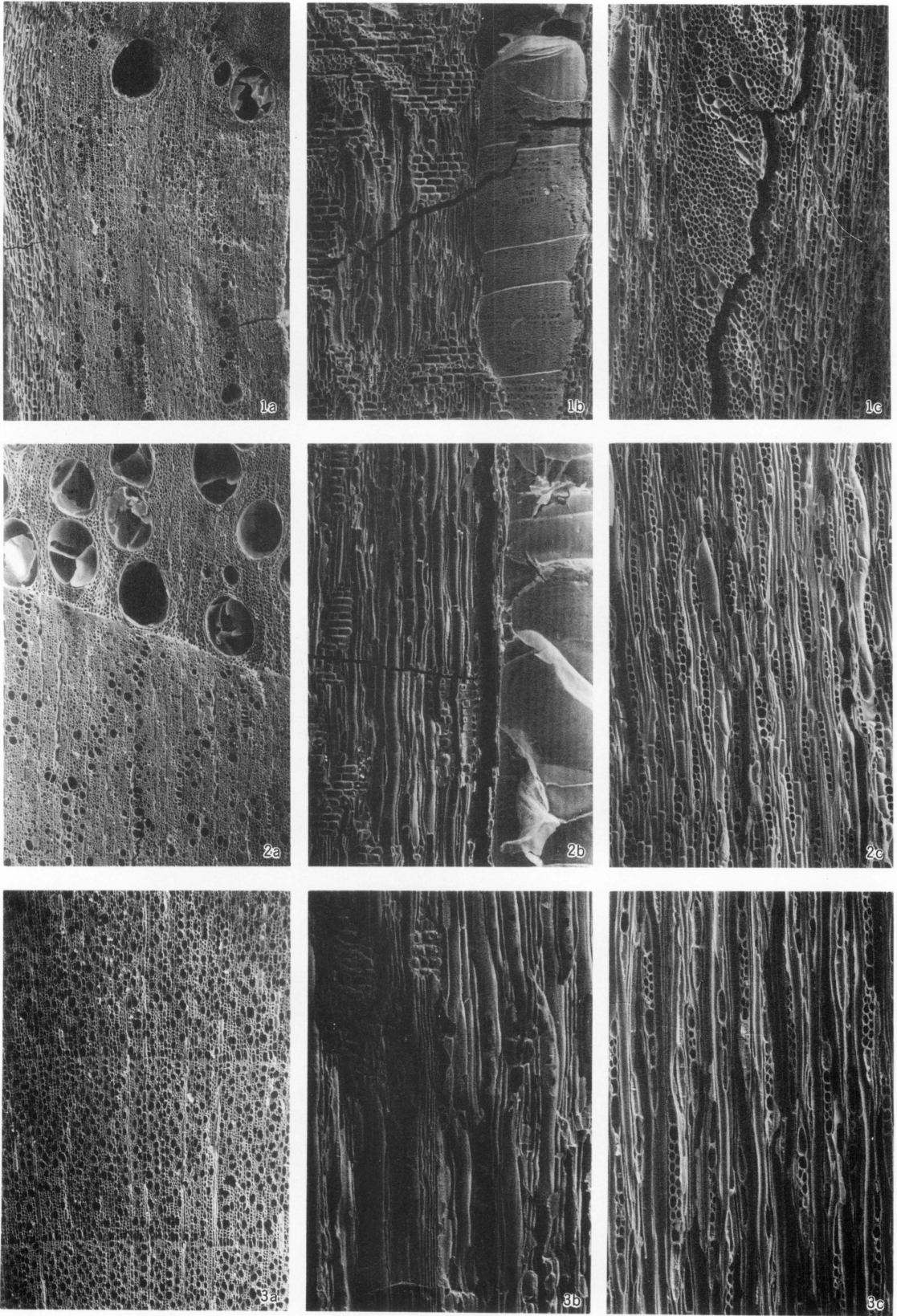
025-20



026-16



2. 鉄製品



011号跡出土炭化材の顕微鏡写真

1. コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種(資料3) 3. シキミ(資料4)
 2. クリ(資料1) a: 木口、b: 柁目、c: 板目

200 μ m : a
 200 μ m : b, c



第43図 遺構配置図 (1/500)

千葉県文化財センター調査報告第247集

海上町岩井安町遺跡

平成6年3月24日 印刷

平成6年3月31日 発行

発行 千葉県社会部

千葉県千葉市中央区市場町1-1

編集 財団法人 千葉県文化財センター

四街道市鹿渡809番地-2

印刷 株式会社 弘文社

市川市市川南2丁目7番2号
